

平成 27 年度指定 スーパーグローバルハイスクール 研究報告書 ＜第 4 年次＞



平成 31 年 3 月



京都府立鳥羽高等学校

ウ 「グローバル・コミュニケーションⅢ」(学校設定科目・3年・2単位)

1 ねらい

グローバル社会における多文化対話力を育成するとともに、課題探究について英語論文を作成し、その内容についてプレゼンテーション、ディスカッションを行う能力を養う。

2 概要(実践)

(1) 年間計画

学期	月	学習内容	評価の観点
1	4	アカデミック・ライティング演習Ⅰ期	・テーマに沿って情報を収集し、批判的思考力を基にして理論を組み立てられる。
	5	↓	
	6	↓	
	7	鳥羽グローバル・サミット(7月)	
2 ・ 3	8	アカデミック・ライティング演習Ⅱ期	・自分の意見を適切な英語で表現することで、主張できる。 ・身につけた文法力・批判的思考力・表現力を用いて英語でディスカッションし、英語論文が書ける。
	9	↓	
	10	↓	
	11	↓	
	12	↓	
	1 2	↓	

(2) 具体的な活動内容

学校設定科目「グローバル・コミュニケーションⅢ」では、「英語表現Ⅱ」の学習内容に加えて、3年間の課題探究の集大成として英語論文作成のために必要とされる知識、技能に加え、英語によるプレゼンテーション及びディスカッションに取り組んだ。

ア 1学期にはパラグラフの構成や繋がり、主張の論理的な展開、適切な英語表現の使用等について、実際に英語論文を作成しながら実践的に学習を行った。

イ 「イノベーション探究Ⅲ」と連携することにより、「鳥羽グローバル・サミット」において論文のプレゼンテーションを行い、海外の大学生や京都の留学生とともに英語によるディスカッションを行った。

ウ 2学期には論理的な英語表現力をさらに身につけるための実践的学習を継続して行った。

<英語論文テーマ>

1 Tradition and Culture

- The characteristics of products that attract attention from the perspective of design
- The cycle of poverty leads to an education gap in developing countries
- How to get ready to receive refugees in Japan and what we can do to accept more refugees

2 Area Studies

- A proposal about how Japan can reduce discrimination against same-sex marriages and sexual minorities
- Food shortage in Nepal is caused by the lack of land for growing rice and the increasing population
- Fushimi sake's potential in the Chinese market

3 Science

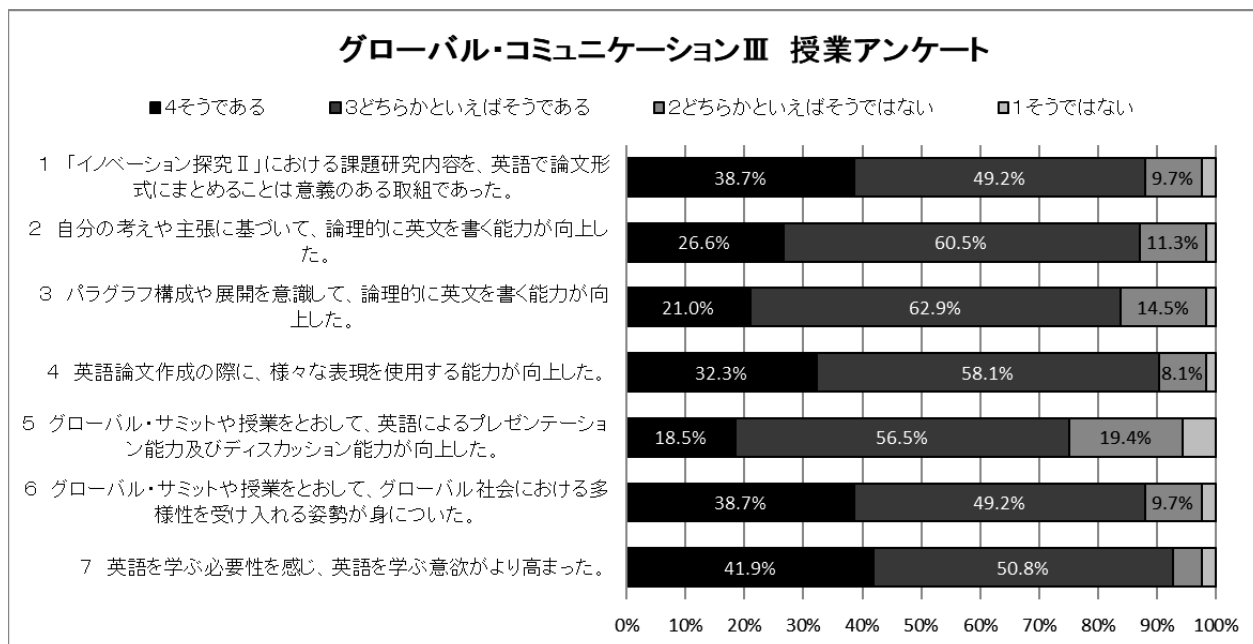
- Using narcotic drugs for medical treatment
- New measures to increase driver's attention and reduce accidents in snowy regions

(3) 評価の方法

「知識・理解」の部分については定期考査で評価を行った。プレゼンテーションについてはルーブリックを作成し評価した。また、生徒による自己評価、相互評価も参考にした。(資料1・2)

3 成果

(1) アンケート結果



(2) 生徒の感想

- ・ 実用的な英語を使う機会がたくさん与えられる中で、英語の学習を進めて行くにつれてそのたび自分の成長や課題を見つけることができた。コミュニケーションをとる楽しさを知ることができてよかった。
- ・ 英語論文の作成については、新しい単語を覚えることにつながったり、構文を思い出すことができたりしたのでとてもよい経験になった。ディスカッションでは、なかなか自分の言いたいことを英語で伝えることができず苦労したが、英語をきちんと学ぼうというきっかけになった。
- ・ 多様な考え方を学び、自分にはない発想があることを知った。また、英語を表現するために4技能すべてにおいて、高いレベルが必要だと分かった。
- ・ 英語は会話でも文章でもはっきり論理的に伝えなければならないことが分かった。パラグラフライティングでは話題に関する例を示し、説得力を持たせる力を伸ばすことができた。

(3) 分析できる成果

英語で論文を書くという意義については90%近い生徒が肯定的にとらえており、実際、こうした取組をとおして英語を書く能力の向上を生徒自身が感じている。特に、質問4「英語論文作成の際に、様々な表現を使用する能力が向上した」について90.4%の生徒が肯定的に回答しており、英語論文の作成が表現力の向上につながっていると生徒たちは実感している。また、質問7「英語を学ぶ必要性を感じ、英語を学ぶ意欲がより高まった」については、92.7%の生徒が肯定的に回答している。自らの考えを英語で論理的にまとめ、発表していくという一連の取組は、生徒にその意義が十分伝わっており、その結果、学習意欲の向上に大いに寄与したと考えられる。

4 課題

質問5「鳥羽グローバル・サミットや授業をとおして、英語によるプレゼンテーション能力及びディスカッション能力が向上した」の肯定的評価が75.0%とやや低くなっている。アンケートにも「英語を書く力はついたが、もう少し英語を話す力をつけたかった」との意見もみられ、実際のプレゼンテーションやディスカッションに備えた練習や指導が不足していたと思われる。英語論文作成に意識が行きがちであるが、次年度については、鳥羽グローバル・サミットに向けてディスカッションの練習を定期的に行い、ライティングとバランスのとれた授業展開に取り組む。

<資料 1>

2018 Innovation III Research Paper Grading Sheet

Grader	
Group	

Skills		Cooperation						Expression		Scoring
		Analysis and Research								
Awareness		Background	Goal and Method	Research Questions	Hypothesis	Discussion	Figures	All Sections		
Section	A: Great (3 points)	The problem is clearly stated and sufficient background information is given.	The goal of the research is clearly stated, and the research methods are clearly explained.	The research questions deeply explore the problem from many different angles.	The hypothesis is persuasive, and includes consideration of cause or comparison.	A clear plan to test the hypothesis is explained.	The figures are clear, understandable, and clarify important information.	A clear research question and a persuasive hypothesis is presented.	A 17-21 Points	
	B: Passing (2 points)	The problem is somewhat unclear and/or background information is somewhat lacking.	The goal of the research is somewhat unclear, and/or the research methods are insufficiently explained.	The research questions somewhat explore the problem, but are lacking in depth and/or missing some important angles.	The hypothesis is somewhat unpersuasive, and/or does not include sufficient consideration of cause or comparison.	The plan to test the hypothesis is somewhat unclear and/or not sufficiently explained.	The figures are somewhat unclear, hard to understand, and/or insufficiently clarify information.	The research question is somewhat unclear, and/or the hypothesis is somewhat unpersuasive.	B 11-16 Points	
	C: Needs Work (1 point)	The problem is not clearly stated, and/or not enough background information is given to understand the problem.	The goal of the research is unclear, and/or the research methods are not explained.	The research questions fail to explore the problem in depth, and/or miss many important angles.	The hypothesis is unpersuasive, and/or does not include consideration of cause or comparison.	The plan to test the hypothesis is not clear, and/or not explained.	The figures are unclear, not understandable, and/or do not give important information.	A clear research question is not presented, and/or a hypothesis is not presented or unpersuasive.	C 0-10 Points	
Grade: (Points)									Total Points:	
Comments		Overall Grade:								

R u b r i c

3rd Grade Global Summit I – Feedback Sheet

Class ()	No. ()	Name ()	Topic ()
--------------	------------	-------------	--------------

1. Could you understand the students?	I completely understood. <i>4 points</i>	I somewhat understood. <i>3 points</i>	I understood about half. <i>2 points</i>	I understood less than half. <i>1 point</i>
2. How was their voice and eye contact?	Their voice was loud and clear, and they had good eye contact. <i>4 points</i>	Their voice was fairly loud and clear, and their eye contact was adequate. <i>3 points</i>	Their voice was hard to hear in parts, and/or their eye contact was lacking. <i>2 points</i>	Their voice was very hard to hear, and they mostly failed to make eye contact. <i>1 point</i>
3. How was their attitude toward communicating with you?	They had a very positive attitude and tried hard to communicate. <i>4 points</i>	They had a fairly positive attitude and made an effort to communicate. <i>3 points</i>	Their attitude was not very positive and their effort to communicate was lacking. <i>2 points</i>	Their attitude was negative and they didn't make much effort to communicate. <i>1 point</i>
4. Did you find their ideas interesting, relevant, and persuasive?	They were very relevant, interesting, and persuasive. <i>4 points</i>	They were somewhat relevant, interesting, and persuasive. <i>3 points</i>	They were lacking in relevance and/or not very interesting or persuasive. <i>2 points</i>	They were mostly irrelevant and/or uninteresting and unpersuasive. <i>1 point</i>
5. Were you able to make a good suggestion about the students' hypothesis?	We made a good suggestion about the hypothesis. <i>4 points</i>	We made an adequate suggestion about the hypothesis. <i>3 points</i>	We made a suggestion about the hypothesis, but it was somewhat lacking. <i>2 points</i>	We were not able to make a suggestion about the hypothesis. <i>1 point</i>
TOTAL:				

エ 「ソーシャル・インテリジェンス」 (学校設定科目・1年・2単位)

1 ねらい

社会の中で情報及び情報技術が果たす役割や影響を理解させ、身の回りのデータの収集と分析、結果の解釈に実践的に取り組み、情報リテラシーと統計リテラシーの育成をめざす。特に統計リテラシーの育成は、実際の問題解決の場で様々なツールを最適な場で利用し、事実に基づく問題解決能力を開発することを目的とする。

2 昨年度の課題と今年度の改善点

昨年度は、情報の収集の仕方、資料の見つけ方を指導し、様々な統計資料の中から課題解決に向けて必要なグラフを作成する力、分析する力を身につけさせることが課題であった。

今年度も、総合的な学習の時間「イノベーション探究Ⅰ」の研究内容を深化させるために、各班の研究テーマに関連した統計資料を「ソーシャル・インテリジェンス」の授業で作成し、傾向や特徴を読み取るとともに分析し、教科横断型の取組を行った。

今年度の改善点として、検索エンジンの使い方を指導し、効率的に課題分析に適した情報を収集する力を育成した。また、課題研究の内容をどのようなグラフ等を用いれば効果的に他者に伝えることができるかについて重点的に指導を行った。

3 概要 (実践)

(1) 年間計画

学期	月	学 習 内 容	関連教科・科目の内容等※
1	4	A 情報リテラシー 情報社会の問題点	情報 「社会と情報」 (1) 情報の活用と表現 (2) 情報通信ネットワークと コミュニケーション (3) 情報社会の課題と情報モラル
	5	情報セキュリティの確保 情報社会における法と個人の責任	
	6	コンピュータの仕組み 情報のデジタル表現	
	7	インターネットの仕組みと活用 情報の表現と伝達	
2	8	問題解決	情報 「社会と情報」 (4) 望ましい情報社会の構築 総合数学 「数学Ⅰ」 (5) データの分析 総合的な学習の時間 「イノベーション探究Ⅰ」
	9	B 統計リテラシー 統計とデータ活用の基本	
	10	データの収集と整理	
	11	データ処理と仮説 仮説の検証	
3	12	発表準備	総合的な学習の時間 「イノベーション探究Ⅰ」
	1	発表準備と発表	
	2	まとめ	

※(1)～(5)は、学習指導要領における各科目の内容

(2) 具体的な活動内容

学校設定科目「ソーシャル・インテリジェンス」では、「社会と情報」の内容に「数学Ⅰ」のデータ分析を加え、さらに総合的な学習の時間「イノベーション探究Ⅰ」との教科横断的な取組をとおして課題分析能力を育成した。

1学期は「社会と情報」の内容を精選し、通常1・2学期をかけて学ぶ内容を圧縮して学んだ。また、6月末からは、表現実習「文化祭ポスター」制作に取り組んだ。

2学期以降は、「社会と情報」の内容を学ぶクラスとは異なる内容の授業展開とした。

ア 問題解決

問題解決の統計的手法の1つである「PPDAC (Problem → Plan → Data → Analysis → Conclusion → Problem → …) サイクル」について学んだ。これは、「課題発見 → 仮説と調査・

実験の計画 → データの収集 → 仮説の検証（データの分析） → 結果の考察とまとめ」と同じである。今年度から、総合的な学習の時間「イノベーション探究Ⅰ」において「現状探究」、「イノベーション探究Ⅱ」において「原因探究」をねらいとした課題研究をそれぞれ行っているが、これらに取り組む上で必要とされる統計手法の考え方について指導を行った。

イ グラフの基本とデータ分析

円グラフ、棒グラフ、折れ線グラフ、レーダーチャートなどのグラフの特徴について学び、目的に応じた使い分けを学習した。題材については、今年度も日本政府観光局（J N T O）の資料を用いつつ、訪日外客数の推移をグラフ化した。その後、全員に世界各国を割り振り、3年間の推移がわかるグラフを作成し、全員分を掲示して共有し、各国の訪日外客数を比較し分析するアクティブ・ラーニングを行った。

ウ 「イノベーション探究Ⅰ」のグラフを作成

基本的なICTスキルを身につけた上で、各班の研究テーマに関連した統計資料を個人で作成させ、傾向や特徴の読み取り分析をさせた。班で意見を出し合いさらに分析を深め、データで考えることの重要性を実感させた。単元学習計画と11月のSGH事業研究発表会（写真1・2）における研究授業の展開計画は次のとおりである。

(ア) 単元指導計画

評価基準の欄 (関) 関心・意欲・態度 (思) 思考・判断・表現 (技) 技能 (知) 知識・理解

時	指導内容	学習活動	評価規準
1	・イノベーション探究の研究内容を深化させるために統計資料を用いることを説明する。 ・資料の探し方、保存の仕方について説明する。	・フィールドワークをとおして、気づいたこと、疑問に思ったことを書き出す。 ・イノベーション探究の研究テーマに関連した統計資料を探す。	活動に興味を持つ。(関) 情報技術を活用し、資料を収集する。(知)
2	・グラフを作成させる。	・統計資料を探し、グラフを作成する。	資料に適切なグラフを作成できる。(知)(技)
3	・グラフを工夫させる。	・正確なグラフであるかを確認し、分かりやすいグラフになるよう工夫する。	工夫したグラフを作成する。(技)
4	・グラフからわかることや問題点を考えさせる。	・個人が作成したグラフを見て、問題点を考える。 ・班で意見を出し合う。	作成したグラフを分析する。(思) 協働して取り組むことができる。(関)
5 ～ 6	・分析結果をまとめさせる。発表に向けて、手順を説明する。	・これまでの流れをまとめ、発表スライドを作成し、発表原稿を考える。	活動に興味を持つ。(関)
7 研 究 授 業	・発表（前半の4班）	・班でこれまでの活動を発表する。 ・他のグループの活動を聞いて、自分たちの研究テーマに関連する新たな気づきについて考える。	伝えたい内容を表現できる。(思) 他の班の発表から新たな課題に気づき、リサーチクエスチョンをみつけることができる。(思)(関)
8	・発表（後半の5班）	同上	同上
9	・さらに分析をさせる。	・研究テーマについてさらに調べ、議論をする。	意欲的に分析をしている。(関)

10	・まとめをする。	・1月のパワーポイントを用いた発表に向けて、これまでの研究内容をまとめる。	分析結果をまとめ整理することができる。(思)
----	----------	---------------------------------------	------------------------

(イ) 研究授業の展開計画

評価の観点 (関) 関心・意欲・態度 (思) 思考・判断・表現 (技) 技能 (知) 知識・理解

過程	指導内容	学習活動	指導上の留意点	評価 (評価の観点) (評価方法)
導入 5分	・あいさつ、出欠確認 ・本時の目標確認	・発表順番、発表時間を確認する。 (発表3分、質疑応答2分、記入1分)	・班長が、進行係、PC操作係、計測係と役割分担を確認するよう指導する。	
展開 I 25分	・前半の4班に発表をさせる。	・班の研究テーマと夏のフィールドワークに関連した統計資料を分析した内容について発表する。 ・聞いている班は、自分たちの班に関連した内容であればメモをする。	・班全員が発表に参加し、分かりやすく伝えるよう指導する。 ・聞いている班は、新たな気づきを意識して記入するよう指導する。	分析したことを人に分かりやすく伝えようと発表しているか。 (思)<観察>
展開 II 15分	・他の班の発表を聞いて、新たにリサーチクエスチョンをみつけさせる。	・テーマが異なる他の班が発表した内容や統計資料が、自分たちの研究テーマにも繋がっていないかを考え、意見を出し合う。	・小さな気づきでもよいので、意見を出し合うことを大切にさせる。 ・ボードに記入させていく。	新たな気づきをみつけようとしているか。 (関)(思)<観察>
まとめ 5分	・複数の班に発表させる。	・班で出た意見、気づきを発表する。	・研究する上では、様々な角度から物事を考えていくことが大切であることを指導する。	

エ 発表準備と発表

2学期中頃からパワーポイントの使い方を学習した後、総合的な学習の時間「イノベーション探究Ⅰ」と教科横断的に授業を展開し、課題研究をまとめたプレゼンテーション資料の作成や発表準備を行った。

SGU立命館大学と連携し、1月12日(土)・13日(日)にびわこ・くさつキャンパスにおいて課題研究宿泊研修を実施(写真3)し、大学生TAから助言を受けた。その後、校内でクラスごとに発表し、生徒間でフィードバックしつつ、スライドや原稿の作り直しを合計3回実施した。

2月7日(木)情報科の学年発表会においてクラス代表が発表、2月23日(土)「イノベーション探究Ⅰ」課題研究発表会において鳥羽の学びネットワーク関係者を招き、全班が発表した。



写真1 S G H事業研究発表会



写真2 S G H事業研究発表会



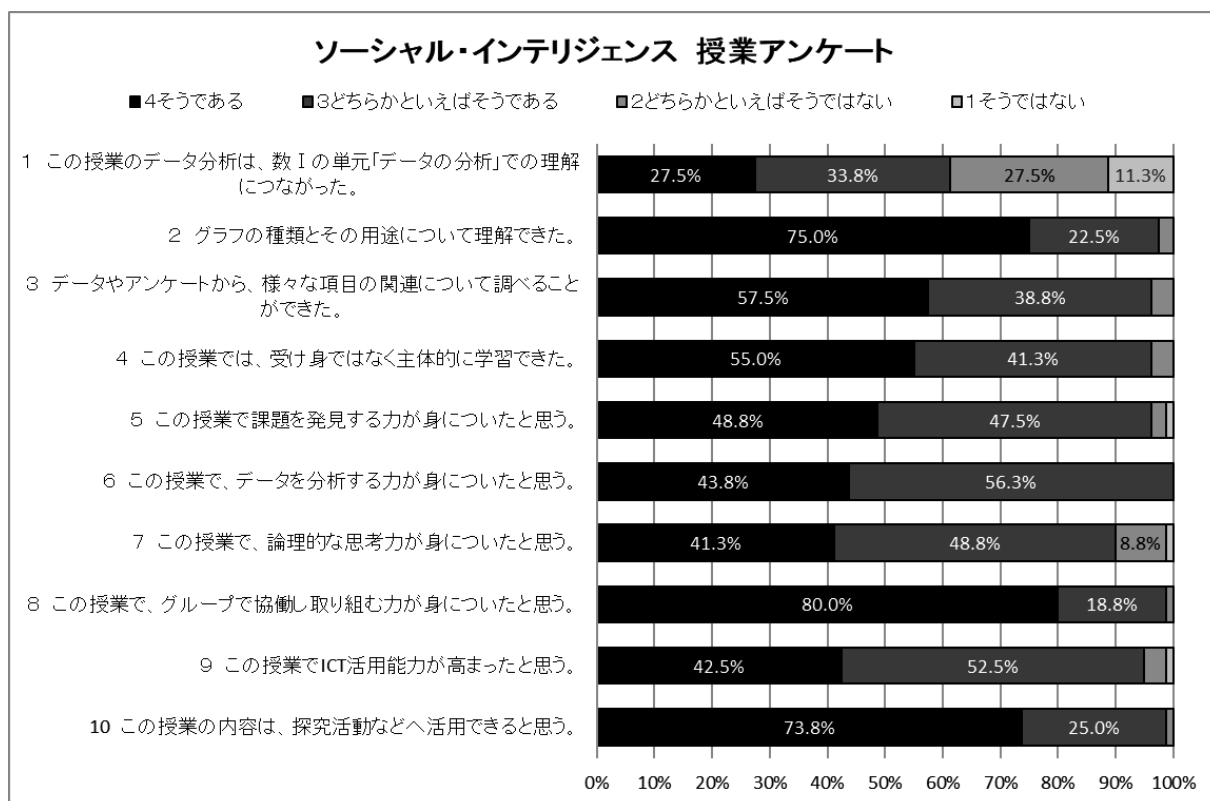
写真3 立命館大学宿泊研修

(3) 評価の方法

1 学期は、定期考査及び実習授業における実習記録簿の提出、「文化祭ポスター」の提出状況の評価した。2 学期は、表計算ソフトを利用し、グラフの作成に関するテスト、実習記録簿の提出、訪日外客数のグラフの提出状況の評価した。3 学期は、課題研究発表を評価するとともに、1 年間の取組全体を評価した。

4 成果

(1) アンケート結果



(2) 生徒の感想

- ・数字だけを見ても分からないことをグラフ化することで、そのデータの特徴などが見えてくることを学び、課題を分析する上で役に立った。
- ・グラフの種類を変えるなど少し工夫をすることで、伝えたい情報をより効果的に表すことができることを学んだ。周囲の人の意見を聞くことで、わかりやすさを追求するようになった。
- ・一つのことをいろいろな視点や多くの人と考えることで自分だけでは見つけられなかったことを見つけることができるということを学んだ。イノベーション探究の課題研究に役立てたい。

(3) 分析できる成果

生徒アンケートの「4 そうである」の回答については、質問 8「協働力の育成」についてが 80.0%、質問 10「探究活動への活用」が 73.8%、質問 2「グラフの種類・用途の理解」についてが 75.0%とそれぞれ高い結果となった。総合的な学習の時間における課題研究で必要とされる ICT を用いた課題分析の基礎的な能力を、教科横断的な取組をとおり習得させることができた。

5 課題

生徒アンケート質問 1 における「数学Ⅰ」のデータ分析との教科横断的な理解については肯定的評価が 61.3%と低かった。本科目は「総合的な学習の時間」、「社会と情報」、「数学Ⅰ」の 3 つについて横断的に取り組むため、ねらいを共有しつつ関連を明確にした上で個々の指導を行う。また、ICT 活用能力をより向上させるため、授業内外のより多くの場面で ICT を活用できる指導や提案を行う。

オ 「京都の風土・世界の風土」（学校設定科目・2年・2単位）

1 ねらい

身近な地域と世界の風土を探究することにより、相互の関係性を具体的かつ、グローバルな視点から理解する力を養う。世界の諸課題（グローバル・イシュー）について自分ごととしてとらえ、考察やグループワークなどを行いながら、まとめる力を身につける。

2 昨年度の課題と今年度の改善点

昨年度の課題であった体系的なテキストの確立という点については、担当者間の連携を密にしながらデジタル教材の開発を進め、大枠を整備することができた。また、昨年度から総合的な学習の時間「イノベーション探究Ⅱ」との教科横断的な取組を進めており、今年度はさらに強化することができた。特に、昨年度も扱った2学期の「難民問題」の学習において、内容を改善するとともに、グローバル・イシューの解決策を考えるための見方・考え方に焦点を当てた指導を充実させ、「イノベーション探究Ⅱ」で取り組むグローバル・イシューの探究活動に活用できる視点を身につけさせることができた。

3 概要（実践）

(1) 年間計画

学期	月	学習内容	評価の観点
1	4	ガイダンス「風土とは」	京都や世界の歴史には、地域の地理的条件や気候、宗教などが大きく影響していることを理解し、その基本的な知識を習得している。 基本的な資（史）料や情報などを収集する能力を身につけ、それらを適切に選択することにより、「イノベーション探究Ⅱ」の活動につなげることができる。
		テーマ①京都の地形と気候	
		テーマ②「京都はなぜ千年以上都市であり続けられるのか？」～Sustainable City Kyoto～ 都市発達史（古代・中世・近世・近代以降）	
	5	テーマ③世界の民族と宗教 国立民族学博物館フィールドワーク	
	6	テーマ④日本の宗教「神仏習合って？」	
		テーマ⑤民族問題「みんなちがって、大変だ！」	
2	7	風土的差異を踏まえた異文化協働学習 （鳥羽グローバル・サミットに向けて）	世界の具体的な事象について探究する活動をとおして、グローバル・イシューを自分ごととしてとらえ、それについて考察し、表現することができる。
	8	夏季休業中 アカデミック・ライティング ※「イノベーション探究Ⅱ」との共催	
	9 10	テーマ⑥難民問題「難民問題から考える」	
	11 12	テーマ⑦「東南アジアの風土を知ろう」 （シンガポール研修旅行に向けて）	
3	1	東南アジアの歴史	東南アジアの学習をとおして研修旅行における課題を明確化させ、仮説を立てて現地での探究活動を実施することができる。
	2 3	3年次の選択に分かれて風土学習	それぞれの選択分野において知識や理解を深めることができる。

(2) 具体的な活動内容

4月から5月にかけては、京都の風土を中心に学習した。「京都はなぜ千年以上都市であり続けられるのか？」というテーマのもと、講義やグループワークをとおして、昨年度実施した「イノベーション探究Ⅰ」で再発見した「京の智」をさらに深化させた。5月末からは、世界の風土について考察し、幅広い視野の獲得を図った。また、寛容力、教養力の育成を目的とした国立民族学博物館フィールドワークを昨年度に引き続き実施した。6月からは、世界の宗教や民族問題について理解を深めるとともに、「イノベーション探究Ⅱ」とも連携を図りながら、本科目で習得した広い視野や文化の多様性への理解を課題探究活動に取り入れた。また、今年度の新たな取組として、7月の鳥羽グローバル・サミットにおいて海外大学生と英語を活用しながら協働学習を行った。既習の京都の都市構造を海外大学生に紹介し、海外大学生の出身地の都市構造と比較しながら、持続可能な都市とはどのようなものかを考察した。2学期は主として、「難民問題から考える」をテーマとして取り上げ、グループワークをとおしてグローバル・イシューを自分ごととしてとらえさせる取組を行った。1月からは、3年次の選択科目に応じた講座授業を展開した。



国立民族学博物館におけるフィールドワーク



鳥羽グローバル・サミットにおいて海外大学生と英語で風土学習



ホワイトボードを利用した難民問題に関する協働学習

(3) 評価の方法

ワークシートやクラス発表に加えて、定期考査による基本的な知識の定着度合について評価した。また、単元によっては、ルーブリック評価票を用いた評価を行った。

例)「京都はなぜ千年以上都市であり続けられるのか?～山背遷都から考える～」の評価票

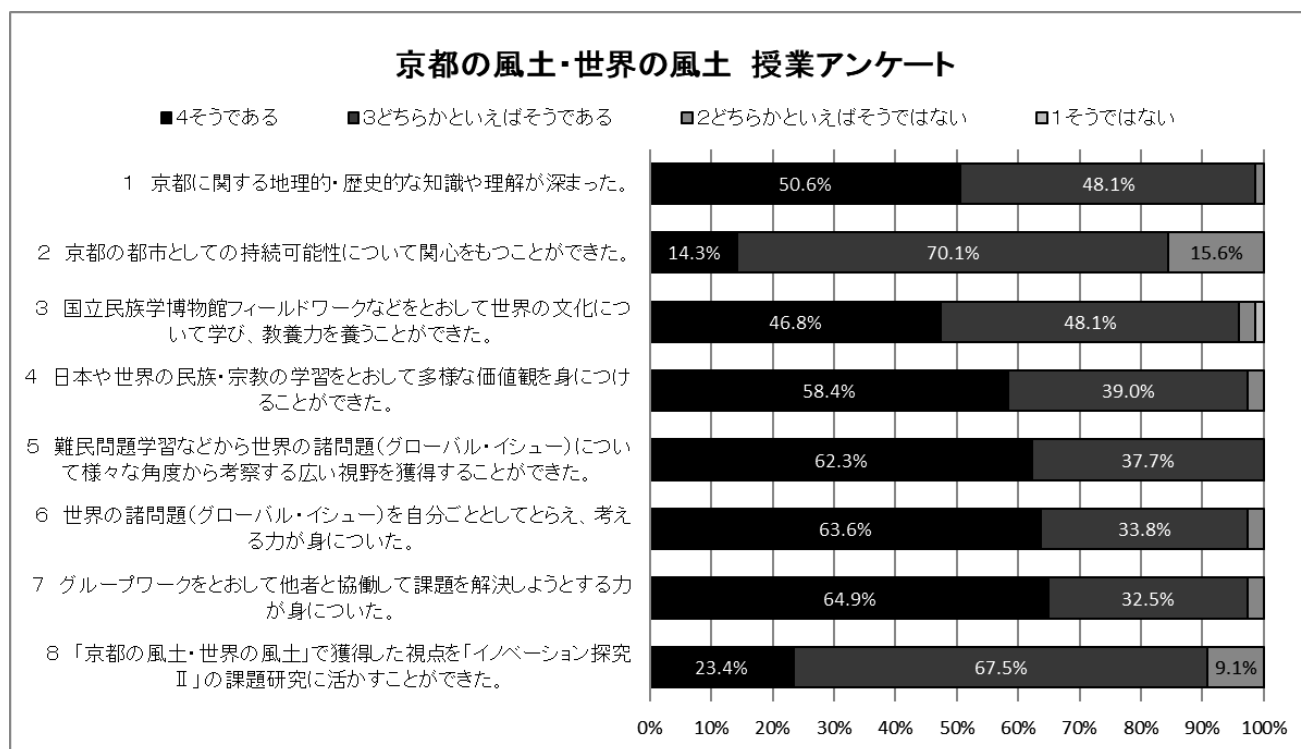
平成30年度 京都の風土・世界の風土 山背遷都から考える 評価票

平成30年4月

		平成30年度			
評価規準	基本的な歴史的知識・理解		歴史的な思考力・分析力・表現力		探究のための協働力・主体性
	知識・理解		思考・判断・表現 資料活用 の技能		関心・意欲・態度
評価項目	基礎的知識の確認		個人考察	グループの結論	グループワーク
評価基準	A: 完璧 (Great)	平城京から長岡京・平安京に遷都する経過を、仏教の影響の強さと関連付けて理解できている。	山背遷都の地理的理由を根拠をもって考察できている。	山背遷都の地理的理由をグループとして根拠をもってまとめられている。	グループ内で自己の役割を果たし、意見を表現することができ、他者の意見を聞くことができた。
	B: 合格 (Good)	平城京から長岡京・平安京に遷都する経過を概ね理解できている。	山背遷都の地理的理由を自分なりに考察できている。	山背遷都の地理的理由をグループとしてまとめられている。	グループ内で意見を表現することができ、他者の意見を聞くことができた。
	C: がんばろう (Needs Work)	平城京から長岡京・平安京に遷都する経過を理解できていない。	山背遷都の地理的理由を自分なりに考察できていない。	山背遷都の地理的理由をグループとしてまとめられていない。	グループ内で自己の意見を述べることや、他者の意見に耳を傾けることができなかった。
評価記入欄 A～C					
コメント欄					

4 成果

(1) アンケート結果



(2) 生徒の感想

- ・京都に関する地理的・歴史的な知識を身につけることができ、他の地域でも歴史的・地理的要因からある出来事が起こったのだと考えると、さらに深く学びたくなった。
- ・京都の都市構造の歴史的推移について授業で学んだが、外国の都市がどのようにつくられたのかを比較するともっと面白いと感じた。
- ・難民問題の学習で資料を多角的な視点で分析しながら考察できたのがよかった。今後何かについて調べ、解決策を考えるときも、一面的ではなく様々な視点から考察する必要があることを再認識した。
- ・グローバル・イシューを解決するために何ができるかについて考える時には、まず、その問題についての正しい知識を得ることが大切だと分かった。
- ・難民問題について学ぶ以前は、この問題は他人事であると捉えていたが、授業をとおして、国際社会の一員として何ができるかを考えるようになった。
- ・日本の歴史や難民問題について深く考えるにつれて、どんどん分からないことが増えていき、自分から新聞を読み、ニュースを見るようになった。
- ・地理的に物事を考えるという視点を、イノベーション探究で取り組んでいる課題研究に行き詰まった時に思い返したい。
- ・この授業をとおして、間違いを恐れずに積極的に自分の意見を発すること、熟慮した上で自分の考えを述べるのが大切だと学んだ。

(3) 分析できる成果

アンケート項目のすべてにおいて、「4そうである」と回答した生徒の割合が昨年度を上回った。担当者間で連携し、授業をとおして内容のみならず、科目のねらいを明確に伝えることができた成果だと考える。このことは、質問項目6「世界の諸問題(グローバル・イシュー)を自分ごととしてとらえ、考える力が身についた」について、「4そうである」と回答した生徒の割合が昨年度よりも37.8%上昇し、伸び率が最も高いことから検証できた。

生徒の感想にも見られるとおり、単に「グローバル・イシューを自分ごととしてとらえ、考える力が身についた」と自覚しただけでなく、こうした学びを受けて、今後さらに知識を蓄えていった

い、新聞やニュースを見ていきたいと感じた生徒が複数いたことも成果である。1年間の授業で完結するのではなく、授業をとおして生徒のコンピテンシーを育成することができ、「学びに向かう人間性」を身につけさせることができた。

一方で、一定の成果はあったものの、「イノベーション探究Ⅱ」における課題研究に「京都の風土・世界の風土」で育成する力をいかに結びつけるかについては、次年度においても引き続き研究開発を進める必要がある。

5 課題

生徒アンケート質問8『『京都の風土・世界の風土』で獲得した視点を『イノベーション探究Ⅱ』の課題研究に活かすことができた』について「4 そうである」と回答した生徒の割合が23.4%とやや低かった。「京都の風土・世界の風土」で育成する力を、グローバル・イシューを探究する「イノベーション探究Ⅱ」における課題研究にさらに結びつけるためには、年度当初の京都の風土を学習する際に、ローカルな課題とグローバルな課題がどれだけ密接に関わっているかをいかに生徒へ提示できるかが重要であると考え。京都の風土学習から授業が始まるため、生徒にとっては「京の智」の再発見に取り組んだ「イノベーション探究Ⅰ」とのつながりを感じやすい一方で、SDGs などグローバル・イシューを扱う「イノベーション探究Ⅱ」とのつながりは感じにくい。生徒アンケートの自由記載に「京都の都市構造の歴史的推移について授業で学んだが、外国の都市がどのようにつくられたのかを比較するともっと面白いと感じた」という感想が見られたが、7月の鳥羽グローバル・サミットで実施した授業展開を年度当初から組み込んでいければ、「京都の風土・世界の風土」の学習がグローバル・イシューの探究と密接に関わっているということを生徒はより理解することができると考え、次年度の改善点として取り組む。

また、次年度のSGH研究開発5年次に向けて、「京都の風土・世界の風土」の教材化・冊子化を行い、HP上での公開をとおして、成果普及に取り組む。

(3) 研究開発単位Ⅲ：新しい視座と高い言語能力を確立する戦略群

ア 京都府海外サテライト校留学

1 ねらい

平成 28 年度から京都府が設置した英語圏の中等教育機関をサテライト校での 2～6 ヶ月間程度の中期留学を通じ、海外で生活しながら行う多様な学びを通じて多文化対話力や多面的・多角的な課題分析能力・解決能力を養い、グローバル・リーダーとしての資質を向上させる。

2 概要（実践）

(1) 平成 29 年度冬期オーストラリア中期留学

日 程 平成 30 年 1 月 14 日（日）～3 月 30 日（金）

場 所 クイーンズランド州 Burnside State High School
クイーンズランド州 Caloundra State High School

参加者 1 年生女子生徒 2 名

(2) 平成 30 年度夏期オーストラリア中期留学

日 程 平成 30 年 8 月 4 日（土）～12 月 10 日（月）

場 所 クイーンズランド州 Mitchelton State High School, Earnshaw State College

参加者 2 年女子生徒 1 名

(3) 平成 30 年度冬期オーストラリア中期留学

日 程 平成 31 年 1 月 26 日（土）～4 月 8 日（月）

場 所 クイーンズランド州 Benowa State High School

参加者 1 年生女子生徒 1 名

(4) 留学内容

留学先学校の相当学年の生徒とともに、英語で行われる授業を受ける。また、現地の歴史・文化のうち、自ら設定した内容について日本との違いを研究し、理解を深める取組を行い、帰国後レポートを提出する。

(5) 事前研修

留学内定後、約 5 ヶ月間で研究課題を明確にし、研究成果活用の展望について具体的に目標を持たせる。

3 成果

概要(1)に参加した生徒のうち 1 名は、1 年次 12 月に受験した G T E C のスコアが 1 年後には 59 点伸びた。その中でもリスニングスコアが 46 点の伸びを見せ、リーディング及びライティングスコアよりも大きな伸びがあったことから、英語によるコミュニケーションに必要な高いリスニング能力を身につけたといえる。また帰国後は、平成 30 年度 S G H 上海海外研修に参加し海外インターンシップにチャレンジしたり、2018 年度 S G H 全国高校生フォーラムに学校代表として、ポスターセッションやディスカッションに参加するなど、随所でリーダーシップを発揮している。もう 1 名の生徒は、帰国後まもなく 1 年間の長期留学にチャレンジするなど、継続的に語学習得、異文化理解に努めており、今後グローバル・リーダーとして活躍することが大いに期待されている。

概要(2)に参加した生徒は、1 年次 12 月に受験した G T E C のスコアが 1 年後には 64 点伸びた。概要(1)の生徒同様リスニングスコアが 56 点伸びており、中期留学はリスニング能力の向上に結びつくことが確認できた。

概要(3)の参加生徒についても帰国後には、府立高校生及び本校生徒に対して成果の還元を期待できる。なお、語学力に関しては、1 年次の 12 月に G T E C を受験し、帰国後の成績と比較できるようにしている。

4 課題

留学生徒が留学中に達成する成果については、現在のところ、本校 H P を利用した留学生通信や留学希望者を対象とした場での成果発表という形でおこなっている。さらに、広く普及を図るためにも、留学生徒にスピーチコンテストやディベート大会等への積極的な参加を促していくことが必要だと考えられる。

イ 海外インターンシップ (7) 韓国

1 ねらい

海外において、グローバル企業で外国人職員とともに働く経験をとおして、将来的に国際的なビジネスで活躍できるグローバル・リーダーとしての資質を向上させる。また、課題研究に関するフィールドワークを外国人職員とともにやり、多文化協働による主体的な課題解決能力を高める。

総合的な学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡ」における伝統・文化領域等の課題研究を深化させ、新たな価値を創造する力や情報発信の技能を身につけるため、一般財団法人自治体国際化協会ソウル事務所（クレアソウル）でワークショップを実施する。さらに、多様な価値観を受け入れる寛容力と幅広い教養力を身につけるために、韓国・ソウルの歴史的遺産や施設を訪れ、多角的な視座に立ってフィールドワークを行う。また、ハンヨン高校の生徒とのフィールドワーク・課題研究においては、日韓両国の伝統的な市場を保存するという観点から課題を発見し、その解決に向けた継続的な協働による取組の可能性を探る。

2 昨年度の課題と今年度の改善点

昨年度の課題の一つであった「海外の大学で学ぶこと」や「海外で働くこと」への関心の高まりがやや低かったという点については、今年度においては事前学習として国内で株式会社片岡製作所京都本社を訪れワークショップを行う際に、昨年度よりも具体的に現地フィールドワークで学習すべき事項を明確にした。また、クレアソウル、ハンヨン高校訪問のための事前学習も充実させ、現地で発見した内容、学習した内容を事前学習に取り込み、課題研究を深める取組を重視した。

3 概要（実践）

(1) 日 程 平成 30 年 8 月 6 日（月）～8 月 9 日（木）（4 日間）

(2) 場 所 韓国・ソウル

①一般財団法人自治体国際化協会ソウル事務所（クレアソウル）

②株式会社韓国片岡 ③S J T 社 ④景福宮 ⑤ハンヨン高校

⑥吉洞市場 ⑦北村韓屋村

(3) 参加者 1 年生 6 名、2 年生 4 名

(4) 参加者選考方法

志望理由書、英語によるディスカッション、日本語による現地で行う課題研究に関する調査計画についての面接を実施した。

15 名が応募し、10 名を参加者に決定した。

(5) 引 率 教諭 2 名

(6) 現地プログラム

8 月 6 日	J R 京都駅集合、関西国際空港から仁川国際空港へ 午後：一般財団法人自治体国際化協会ソウル事務所（クレアソウル）訪問 ブリーフィングとして韓国の現状を学習した後、情報発信の方法についてワークショップ 京都の着物文化の発信方法について議論し、「イノベーション探究ⅠⅡ」の課題研究内容を深化
8 月 7 日	午前：インターンシップⅠ 株式会社韓国片岡を訪問し、韓国における事業展開の現状について学習 午後：インターンシップⅡ タッチパネル等の製造を手がける S J T 社を訪問し、現地の製造工程に実際に入ることにより、「ものづくり」に必要とされる考え方を体得
8 月 8 日	午前：ソウル市内フィールドワークⅠ 朝鮮王朝の王宮景福宮を訪れ、古来の日本と韓国の歴史を正しく認識し、日韓の未来に向けた関係構築について考察

	午後：ハンヨン高校生とソウル市内フィールドワーク 韓国の伝統的な市場がある吉洞を訪れ、京都の市場との相違点を考察することで、共通する課題や解決方法について協働研究を実施
8月9日	午前：ソウル市内フィールドワークⅡ 韓国の伝統的な家屋が残る北村地域においてフィールドワークを実施し、京都の町屋（町家）の保存問題について共通する課題や解決方法を考察 午後：仁川国際空港から関西国際空港に向けて帰国



クレアソウルにて海外への情報発信の手法について学ぶ



株式会社韓国片岡にてインタビューを行う



ハンヨン高校生とともに、吉洞市場をフィールドワーク調査

(7) 事前・事後研修等

- ア 事前研修（6月8日～7月30日までの昼休み、放課後等9回実施）
 - ・ソウルでの課題研究に向けた準備(京都フィールドワーク、京都の市場についての学習)
 - ・外部講師による韓国語講座
- イ 9月13日（木）校内海外研修成果発表会において、課題研究成果をプレゼンテーションし、他の生徒への普及を行った。

4 成果

帰国後に韓国ソウル海外研修に関するアンケートを実施したところ、質問4「異なる文化の人々と協力して課題に取り組む力（多文化協働力）が向上した」、質問7「日本や韓国などの文化について学ぶことで、様々な知識を得るとともに、視野が広がった（教養力）」についてすべての参加生徒が「4そうである」と答えた。

また、「イノベーション探究ⅠⅡ」の課題研究を深化させるための現地フィールドワークについては、景福宮を訪れた際と吉洞市場を調査したフィールドワークに関して参加生徒全員が「意義のあるものだった」と回答をした。訪れた先で行ったワークショップや調査活動は、新たな価値を創造するために非常に有効的な手段であったことがアンケート結果から検証できた。

5 課題

生徒アンケートの質問1「英語によるコミュニケーション能力が向上した」について肯定的に回答した生徒の割合が70%とやや低かった。事前学習と外国語学習を関連させ、海外研修をととして外国語の運用能力を高められるようにプログラム内容を改善する。



景福宮フィールドワーク



ハンヨン高校生との協働研究

(4) 上海

1 ねらい

総合的な学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡ」における課題研究をグローバルな視点から深化させるために、日本と歴史的・文化的、そして経済的に深いつながりのある中国・上海で、海外インターンシップ・学校訪問・フィールドワーク等を行う。

日本貿易振興機構（JETRO）では「中国の経済概況と日系企業の動向」のブリーフィングを受け、ディスカッションを行う。

上海市嘉定一中を訪問し、英語で京都及び本校の紹介や「イノベーション探究Ⅱ」の取組についてのプレゼンテーションをし、ディスカッションを行う。上海市嘉定一中生徒との協働学習をとおりて互いの文化の違いについて学ぶとともに、課題研究に関するインタビュー調査を行う。

京都に本社をおく株式会社片岡製作所の海外事業所である上海片岡貿易有限公司においては将来グローバル・リーダーとして活躍するための海外インターンシップを行う。次に、三菱UFJ銀行上海支店でのインターンシップも行い、日本の企業が海外事業を展開する上の留意点についてのレクチャーを受け、現地職員とのディスカッションを実施する。

これらの活動をとおりて、多文化協働による課題発見能力・課題解決能力を高める。

2 昨年度の課題と今年度の改善点

昨年度の課題は、実際の英語力が向上するように4技能型外部検定や事前・事後学習を充実させることであった。今年度は英語プレゼンテーションの事前学習と各自の課題研究に関するインタビューの際に用いる英語表現の指導に特に力を入れた。また、海外インターンシップを充実させるために、企業の取組について十分に調査させるとともにインタビュー項目を事前に整理させた。

3 概要（実践）

(1) 日 程：平成30年10月31日(水)～11月3日(土・祝)(4日間)

(2) 場 所：中国・上海

①日本貿易振興機構（JETRO）上海事務所

②上海市嘉定一中

③上海片岡貿易有限公司、三菱UFJ銀行上海支店

④南京路、南翔老街、古猗園、孔子廟、外灘、新天地、豫園

(3) 参加者：1年生3名・2年生7名

(4) 参加者選考方法：

志望理由書、英語によるディスカッション、現地で行う課題研究に関する調査についての日本語による面接を実施した。13名が応募し、10名を参加者に決定した。

(5) 引 率：教諭2名

(6) 現地プログラム

10月31日	JR京都駅集合、関西国際空港から上海浦東国際空港へ 到着後、日本貿易振興機構（JETRO）上海事務所訪問 「中国経済の概況と日系企業の動向」についてブリーフィング、ディスカッション
11月1日	午前：上海市郊外の南翔老街、古猗園、孔子廟をフィールドワーク 午後：上海市嘉定一中訪問 上海市嘉定一中生徒による英語のプレゼンテーション、本校生徒による京都及び本校の紹介、「イノベーション探究Ⅱ」の取組について英語でプレゼンテーション プレゼンテーション終了後、生徒間で交流し、課題研究について質疑応答を実施
11月2日	午前：上海片岡貿易有限公司インターンシップ 上海片岡貿易有限公司の中国での事業展開についてレクチャーを受けた後、本校生の課題研究内容について現地職員へのインタビュー調査を実施

	午後：三菱 UFJ 銀行上海支店インターンシップ、外灘フィールドワーク 三菱 UFJ 銀行から「外資系ロボットメーカー」の取組を例に、海外事業を展開する上での留意点についてレクチャーを受け、終了後に外灘にてフィールドワークを実施
11 月 3 日	午前：新天地、豫園をフィールドワーク 豫園では復旦大学の学生とともにフィールドワーク、各自の課題研究についてのインタビュー調査を実施 午後：上海浦東国際空港から関西国際空港に向けて帰国



南翔老街にてフィールドワーク



上海片崗貿易有限公司で日本企業の中国進出について学ぶ



三菱 UFJ 銀行上海支店にて海外事業展開の留意点を学ぶ

(7) 事前・事後研修等

ア 事前研修（7 月 18 日～10 月 29 日までの期間に、昼休みと放課後等 13 回実施）

- ・英語でのプレゼンテーション準備、中国基本情報レクチャー
- ・7 月 24 日（火）株式会社片岡製作所京都本社インターンシップ
- ・6 月 20 日（水）、7 月 25 日（水）

高校生ビジネスプラン・グランプリ ビジネスプラン作成サポート授業

イ 事後研修

- ・11 月 9 日（金）振返り
- ・11 月 22 日（木）本校普通科 2 年スポーツ総合専攻を対象に報告会
- ・12 月 15 日（土）本校学校説明会での報告プレゼンテーション

4 成果

(1) 生徒の感想

- ・「グローバル社会で通用するためにはどのような力を持つべきか」という問いに対して、どの訪問先も共通して「異文化に対する寛容力」と答えていたのが印象的であった。
- ・英語が通じなくて困ったが、英語以外の言語を学ぶことも大切だと改めて思った。

(2) 分析できる成果

帰国後に、本校がグローバル・リーダーに必要とされる力と定義した 5 つの力が向上したかをアンケート調査したところ、質問 6「自分とは異なる価値観を尊重する力（寛容力）が向上した」については 100%、質問 7「日本や世界の文化について学ぶことで、様々な知識を得るとともに、視野が広がった（教養力）」については 90%が「4 そうである」と回答した。

また、質問 9「海外で働くこと、国際的な仕事について関心が高まった」について 100%が肯定的に回答するなど、経済成長の著しい上海で海外インターンシップを行うことが生徒のグローバルなキャリア観の形成に結びつく効果を検証できた。次年度についても継続的に海外インターンシップを実施し、その教育的効果について検証を続ける。

5 課題

質問 8「海外の大学で学ぶことについて関心が高まった」について「4 そうである」と回答した生徒が 50%とやや低い。復旦大学との鳥羽グローバル・サミットと本研修をとおした相互訪問できる体制を活用し、次年度は海外大学への留学意欲を高める活動を取り入れる。

(ウ) 台湾

1 ねらい

将来的に国際的なビジネスでグローバル・リーダーとして活躍するための資質向上を目的とし、京都に本社をおく株式会社片岡製作所の海外事業所である台湾片岡股份有限公司において海外インターンシップを行う。

また、総合的な学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡ」における課題研究を深化させるために、歴史・文化的に深いつながりのある台湾を訪れ、台北・台中市内のフィールドワークを実施する。台中市立台中工業高級中等学校や国立台湾大学において課題研究に関して英語によるプレゼンテーションやインタビュー調査を実施し、研究内容を深める。

2 昨年度の課題と今年度の改善点

昨年度の経験をもとに日程調整を行い、国立台湾大学での訪問時間を長くとり、キャンパス内の大学生にインタビュー調査を実施した。その結果、昨年度よりも多くの大学生から助言を受けることができ、課題研究内容を深めることができた。また、台北市内のフィールドワークでは、中正紀念堂の博物館で蒋介石の経歴を学び、台湾の歴史的背景に迫ることができた。昨年度以上に、台湾の地域的特徴をよく理解した上で行動させ、多文化協働力を高めることができた。

3 概要（実践）

(1) 日 程 平成 30 年 12 月 24 日(月・祝)～12 月 28 日(金)(5 日間)

(2) 場 所 台湾

①台北市内フィールドワーク

②台中市内フィールドワーク

③台中市立台中工業高級中等学校

④台湾片岡股份有限公司、上銀科技股份有限公司

⑤国立台湾大学

(3) 参加者 1 年生 6 名・2 年生 3 名

(4) 参加者選考方法

志望理由書、英語によるディスカッション、日本語による現地で行う課題研究に関する調査についての面接を実施した。12 名が応募し、10 名を参加者に決定したが、1 名は体調不良のため、参加を辞退した。

(5) 引 率 教諭 2 名

(6) 現地プログラム

12 月 24 日	J R 京都駅集合 関西国際空港から、台湾桃園国際空港へ 台北市内をフィールドワーク（台北駅周辺、總統府）
12 月 25 日	午前：台湾片岡股份有限公司インターンシップ 会社概要説明、事業内容や課題研究について質疑応答 午後：上銀科技股份有限公司（HIWIN Technologies Corp.）訪問。会社概要説明、事業内容や課題研究について質疑応答
12 月 26 日	台中市内をフィールドワーク（宝覺寺、台中駅周辺） 台中市立台中工業高級中等学校訪問、課題研究内容に関する英語によるプレゼンテーションとインタビュー調査、授業参加
12 月 27 日	午前：国立台湾大学において課題研究について英語によるインタビュー調査 午後：台北市内をフィールドワーク（中正紀念堂）
12 月 28 日	帰国



台中の宝覺寺で日本と台湾の歴史的繋がりについて学ぶ



台中の高校生に、課題研究に関して英語でプレゼンテーション



HIWIN Technologies Corp. でのインターンシップ

(7) 事前・事後研修等

ア 事前研修（9月26日～12月21日まで、放課後11回実施）

- ・課題研究、英語プレゼンテーション準備
- ・12月7日（金）株式会社片岡製作所京都本社インターンシップ

イ 事後研修（1月10日～2月7日、放課後）

- ・2月2日（土）京都府教育委員会「グローバルネットワーク京都交流会」において、課題研究成果を英語でプレゼンテーション
- ・2月7日（木）1年生の学年集会において、実践報告

4 成果

帰国後に本研修に関するアンケートを実施したところ、質問7「日本や世界の文化について学ぶことで、様々な知識を得るとともに、視野が広がった（教養力）」については100%、質問9「海外で働くこと、国際的な仕事について関心が高まった」については77.8%が「4そうである」と回答するなど、台湾の歴史や伝統・文化に関する事前学習や海外インターンシップの教育的効果がみられた。

S G H台湾海外研修では英語を使用する場面が多いことから、事前学習として英語を用いた課題研究内容の資料作成とプレゼンテーションに取り組んだ結果、質問1「英語によるコミュニケーション能力が向上した」について肯定的に回答した生徒の割合が、昨年度の87.5%から今年度は100%に上昇した。自由記載においても「英語を話せることはグローバル社会で働くために必ず必要だから、絶対に学ぶべきだと改めて思った」など、英語の学習意欲向上についての記載が多く見られた。

また、国立台湾大学での活動時間を増やし、多くの海外大学生へのインタビューを行った結果、質問8「海外の大学で学ぶことについて関心が高まった」について肯定的に回答した生徒の割合が、昨年度の75.0%から今年度は88.9%に上昇した。

5 課題

昨年度と同様に、過去の地図を参照しながら台中駅周辺を歩き土地利用の変遷を学ぶというフィールドワークを今年度も行った。次年度はこのフィールドワークをさらに充実させ、台湾と日本の歴史的関係を深く調査し、現地の人々が抱く日本に対するイメージについてもインタビュー調査を行い、帰国後にその内容を映像等も交えながら伝えたいと考えている。



台湾片岡股份有限公司インターンシップにて事業内容について質疑応答



国立台湾大学キャンパス内にてインタビュー調査

(I) 海外研修アンケート

■実施期間、参加者、研修先

- (1) 韓国研修 平成30年8月6日（月）～8月9日（木）、10名（1年生6名・2年生4名）
 ①一般財団法人自治体国際化協会ソウル事務所（クレアソウル） ②株式会社韓国片岡
 ③SJT社 ④景福宮 ⑤ハンヨン高校 ⑥吉洞市場 ⑦北村韓屋村
- (2) 上海研修 平成30年10月31日（水）～11月3日（土・祝）、10名（1年生3名・2年生7名）
 ①日本貿易振興機構（JETRO）上海事務所 ②上海市嘉定一中 ③上海片岡貿易有限公司
 ④三菱UFJ銀行上海支店 ⑤南京路、南翔老街、古猗園、孔子廟、外灘、新天地、豫園
- (3) 台湾研修 平成30年12月24日（月・祝）～12月28日（金）、9名（1年生6名・2年生3名）
 ①台北市内フィールドワーク ②台湾片岡股份有限公司、上銀科技股份有限公司
 ③台中市内フィールドワーク ④台中市立台中工業高級中等学校 ⑤國立台湾大学

■回答方法：4 そうである 3 どちらかといえばそうである 2 どちらかといえばそうでない
 1 そうではない

1 共通	研修先	4	3	2	1
Q1 英語によるコミュニケーション能力が向上した。	韓国	2	5	2	1
	上海	5	4	1	
	台湾	4	5		
Q2 英語を学ぶ必要性を感じ、英語を学ぶ意欲が高まった。	韓国	9	1		
	上海	8	1	1	
	台湾	8	1		
Q3 現状分析を踏まえた上で、新しい提案をする力（価値創造力）が向上した。	韓国	5	5		
	上海	5	4	1	
	台湾	5	3	1	
Q4 異なる文化の人々と協力して課題に取り組む力（多文化協働力）が向上した。	韓国	10			
	上海	7	2	1	
	台湾	6	3		
Q5 疑問点を自分で調べるなどして、主体的に課題を解決する力（突破力）が向上した。	韓国	10			
	上海	8	2		
	台湾	6	2	1	
Q6 自分とは異なる価値観を尊重する力（寛容力）が向上した。	韓国	7	3		
	上海	10			
	台湾	7	2		
Q7 日本や世界の文化について学ぶことで、様々な知識を得るとともに、視野が広がった（教養力）。	韓国	10			
	上海	9	1		
	台湾	9			
Q8 海外の大学で学ぶことについて関心が高まった。	韓国	5	3	2	
	上海	5	5		
	台湾	7	1	1	
Q9 海外で働くこと、国際的な仕事について関心が高まった。	韓国	5	3	2	
	上海	8	2		
	台湾	7	2		
Q10 S G H海外研修に参加してよかった。	韓国	10			
	上海	9	1		
	台湾	8	1		

2 韓国研修

<事前学習>

	4	3	2	1
Q1 クレアソウル訪問に向けての事前学習は、今回の研修に役立った。	9	1		
Q2 張（チャン）先生による韓国語講座は、今回の研修に役立った。	8	1		
Q3 事前学習で行った京都フィールドワーク（市場についての調査）は今回の研修に役立った。	10			
Q4 片岡製作所でのインターンシップに向けた事前学習は今回の研修に役立った。	8	1		

<研修中>

	4	3	2	1
Q5 1日目のクリアソウルでのブリーフィング・ワークショップは意義のあるものだった。	9	1		
Q6 2日目の株式会社韓国片岡でのインターンシップは意義のあるものだった。	9	1		
Q7 3日目午前のソウル市内フィールドワークⅠは意義のあるものだった。	10			
Q8 3日目午後のハンヨン高校生とのワークショップは意義のあるものだった。	10			
Q9 4日目午前のソウル市内フィールドワークⅡは意義のあるものだった。	6	2	2	

3 上海研修

<事前学習>

	4	3	2	1
Q1 事前学習として実施したプレゼンテーション準備は、今回の研修に役立った。	7	2	1	
Q2 事前学習として実施した中国の地理・歴史についての学習は、今回の研修に役立った。	5	5		
Q3 事前学習として中国や訪問企業等について調査するという課題は、今回の研修に役立った。	8	2		
Q4 片岡製作所京都本社インターンシップは、課題研究や今回の研修に役立った。	8	2		

<研修中>

	4	3	2	1
Q5 1日目日本貿易振興機構（JETRO）訪問は意義のあるものだった。	9	1		
Q6 2日目午前の上海フィールドワークⅠは意義のあるものだった。	9	1		
Q7 2日目午後の上海市嘉定一中訪問は意義のあるものだった。	8	2		
Q8 3日目午前の上海片岡貿易有限公司でのインターンシップは意義のあるものだった。	9	1		
Q9 3日目午後の三菱UFJ銀行上海支店でのインターンシップは意義のあるものだった。	9	1		
Q10 3日目午後の上海フィールドワークⅡは意義のあるものだった。	8	1	1	
Q11 4日目上海フィールドワークⅢ・Ⅳは意義のあるものだった。	9	1		

4 台湾研修

<事前学習>

	4	3	2	1
Q1 事前学習で取り組んだ台湾・日本の比較研究で、新たな価値を発見することができた。	9			
Q2 台湾の地理・歴史についての事前学習は今回の研修に役立った。	5	4		
Q3 英語によるプレゼンテーションの資料作成・発表練習は今回の研修に役立った。	9			
Q4 株式会社片岡製作所京都本社インターンシップは意義のある取組であった。	9			

<研修中>

	4	3	2	1
Q5 1日目午後の台北フィールドワークは意義のあるものであった。	8	1		
Q6 2日目午前の台湾片岡股份有限公司でのインターンシップは意義のあるものだった。	9			
Q7 2日目午後の上銀科技股份有限公司でのインターンシップは意義のあるものだった。	7	2		
Q8 3日目午前の台中フィールドワーク(宝覺寺、台中駅周辺)は意義のあるものだった。	8	1		
Q9 3日目午後の台中市立台中工業高級中等学校での交流は意義のあるものだった。	8	1		
Q10 4日目午前の國立台湾大学訪問は意義のあるものだった。	7	2		
Q11 5日目午後の台北フィールドワーク(中正紀念堂)は意義のあるものであった。	8	1		

5 成果

研究開発3年次までの海外インターンシップの成果を踏まえ、4年次の平成30年度から教育課程内に海外インターンシップを位置づけ、単位認定を行った。SGH事業がグローバル・リーダーの育成に向けた教育課程等の研究開発が主な目的であることから、この単位認定を今年度の成果とする。

参加生徒の変容については、共通質問9「海外で働くこと、国際的な仕事について関心が高まった」の肯定的評価について、SGH対象の3年生が62.9%、全2年生が48.6%、全1年生が37.4%であったのに対し、海外インターンシップ参加者は93.1%となるなど、海外のグローバル企業において就業体験を行うことがグローバルな観点からのキャリア教育として教育的効果があることを検証することができた。また、共通質問8「海外の大学で学ぶことについて関心が高まった」については、SGH対象の3年生が22.6%、全2年生が12.9%、全1年生が13.4%であったのに対し、海外インターンシップ参加者は89.7%となった。復旦大学や國立台湾大学の大学生、ハンヨン高校、上海市嘉定一中、台中市立台中工業高級中等学校の高校生とともに協働研究・協働学習を行うことや将来の進路について意見交換することにより、生徒たちは海外の大学を身近に感じ、将来の進路選択がグローバルに広がる効果があることを検証された。

6 課題

海外インターンシップの教育的効果について実施前後も含めてより詳細に分析し、全国に普及できる海外インターンシップのモデル形成に取り組む。

これまでの国内における事前・事後学習と海外における課題研究の現地調査・フィールドワークに加え、ICTを用いた事前・事後のやりとりを増やし、英語を用いつつ、オンラインで海外の大学生・高校生とともに協働しながら課題研究を行う機会を増やす。また、成果普及の取組として、連携校である京都府教育委員会グローバルネットワーク京都9校についても同様にオンラインで海外の大学生と協働研究できる仕組み作りを行う。

ウ 海外の高校とのワークショップ (7) 韓国・ハンヨン高校

1 ねらい

同世代の海外の高校生との交流を通じて、様々な価値観や考え方を学び、多文化協働力や寛容力を養う。また、協働学習の中で「京の智」を再確認するとともに、課題研究内容をグローバルな視点から深化させ、世界における様々な課題を発見し、解決する力を培う。

2 概要（実践）

- (1) 日 時 平成 30 年 8 月 8 日（水）13:00～17:00
- (2) 場 所 ソウル特別市ハンヨン高校内及び吉洞市場
- (3) 参加者 1 年生 6 名・2 年生 4 名、ハンヨン高校生徒 15 名
- (4) 講 師 ハンヨン高校キム教諭
- (5) 引 率 教諭 2 名
- (6) 現地プログラム
 - ア 13:00-14:30 ハンヨン高校着、歓迎会・自己紹介
 - イ 14:30-15:00 ハンヨン高校生によるプレゼンテーション
 - ウ 15:00-16:00 ハンヨン高校の生徒と韓国食文化を体験（昼食）
 - エ 16:00-17:30 吉洞市場を訪れ、日韓両国の市場の発展に向けた考察と相互提案
- (7) 事前・事後研修等
 - ア 事前研修（6 月 8 日～7 月 30 日までの昼休み、放課後等 9 回実施）
 - ・ソウルでの課題研究に向けた準備（7 月末に実施した京都フィールドワークによる錦市場及び大手筋商店街の調査と、韓国市場の現状についての学習）
 - ・外部講師による韓国語講座の実施
 - イ 事後研修
 - ・9 月 29 日、10 月 27 日の本校学校説明会において、SGH韓国ソウル海外研修における課題研究内容およびその成果について、中学生・保護者を対象にプレゼンテーションを行った。
- (8) 日本における協働学習
 - ・平成 31 年 2 月 20 日にハンヨン高校の生徒 19 名が来校し、多文化協働学習を実施するとともに、伝統・文化領域の課題研究に関連づけて、東寺にてフィールドワークを実施。

3 成果

研修後のアンケートによると、質問 4「異なる文化の人々と協力して課題に取り組む力（多文化協働力）向上した」において、10 人全員の参加生徒が「4 そうである」と回答しており、協働力を育成できた。また、質問 7「日本や世界の文化について学ぶことで、様々な知識を得るとともに、視野が広がった（教養力）」についても 10 人全員の生徒が「4 そうである」と回答しており、本研修がグローバル・リーダーに必要な資質の向上に効果的であることが検証できた。

4 課題

言語の壁を感じた場面もあったが、ハンヨン高校生と協力しながら市場で調査を行うことができた。事前学習における仮説、現地における調査を踏まえ、帰国後に ICT を用いてハンヨン高校と協働しながら検証できる仕組み作りに取り組む。



ハンヨン高校生との協働学習



市場でインタビュー調査



東寺にてフィールドワーク

(イ) 上海・上海市嘉定一中

1 ねらい

同時代を生きる海外の高校生と交流を通じて、様々な価値観や考え方を学び、多文化対話力を身につける。また、「イノベーション探究Ⅱ」での課題研究に関して英語で発表し、インタビュー調査や協働学習を行う。将来的に国際的な舞台で自信を持って研究発表ができる実践的英語力も育成する。

2 概要（実践）

- (1) 日 程 平成 30 年 11 月 1 日（木）
- (2) 場 所 上海市嘉定一中
- (3) 参加者 S G H 上海海外研修参加者 1 年生 3 名・2 年生 7 名、上海市嘉定一中生徒 10 名
- (4) 引 率 教諭 2 名
- (5) 現地プログラム
 - ア 14:00-15:00 上海市嘉定一中到着、校内見学（サイエンスルーム、資料館、図書館等）
 - イ 15:00-16:30 歓迎会・課題研究発表会
 - ・本校生徒による日本・学校紹介（英語）
 - ・上海市嘉定一中生徒による中国・学校紹介（英語）
 - ・上海市嘉定一中生徒による中国の民族衣装に関する発表（英語）
 - ・本校生徒による「イノベーション探究Ⅱ」の課題研究に関する発表（英語）
 - ・意見交流 本校生徒の課題研究テーマに関するインタビュー調査を実施
- (6) 事前・事後研修等
 - ア 事前研修（7 月 18 日～10 月 29 日まで、昼休みと放課後等 13 回実施）
 - ・課題研究に関する調査内容や英語でのプレゼンテーション準備、中国の伝統・文化学習
 - イ 事後研修
 - ・11 月 22 日（木）本校普通科スポーツ総合専攻 2 年生を対象としたプレゼンテーション
 - ・12 月 15 日（土）本校学校説明会におけるプレゼンテーション

3 成果

上海市嘉定区のトップ高校との英語を用いた協働学習をととして、生徒アンケートに「同世代の生徒が高い目標を持ち、学んでいることを知り、自分たちも主体的な学びが必要だと再確認した」と回答するなど、海外の同世代の生徒がどのような学習を行っているかを知り、学習意欲を高めることができた。また、事前研修として英語によるプレゼンテーションの練習に取り組んだことで、中国の高校生とも円滑なコミュニケーションを図ることができ、自信へとつなげることができた。

4 課題

これまでの年に 1 回の訪問をととした協働学習を発展させ、オンラインでの生徒間の相互のやり取りを推進する仕組み作りを検討・提案する。また、復旦大学との連携と合わせて、海外の大学で学ぶことへの関心を高める取組を行う。



英語による「イノベーション探究Ⅱ」
の課題研究プレゼンテーション



上海市嘉定一中の歴史から、
嘉定区の歴史や文化を考察

(ウ) 台湾・台中市立台中工業高級中等学校（旧 国立台中高級工業職業学校）

1 ねらい

同時代を生きる海外の高校生との交流をととして、様々な価値観や考え方を学び、多文化対話力を身につける。また、総合的な学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡ」での課題研究に関して英語で発表し、インタビュー調査や協働学習を行う。将来的に国際会議等で自信を持って研究発表ができる実践的英語力も育成する。

2 概要（実践）

- (1) 日 程 平成30年12月26日（水）
- (2) 場 所 台中市立台中工業高級中等学校
- (3) 参加者 S G H台湾海外研修参加者1年生6名・2年生3名
台中市立台中工業高級中等学校生徒26名
- (4) 引 率 教諭2名
- (5) 現地プログラム
 - ア 歓迎会、課題研究に関して英語によるプレゼンテーション
 - イ 課題研究内容に関する英語によるインタビュー及びディスカッション
 - ウ 台湾の食文化等に触れる異文化交流、授業参加、施設見学
- (6) 事前・事後研修等
 - ア 事前研修
 - ・課題研究内容についてプレゼンテーション資料を作成し、英語で発表練習を行った。
 - イ 事後研修
 - ・2月2日（土）京都府教育委員会「グローバルネットワーク京都交流会」において、S G H台湾海外研修における課題研究内容について、英語でプレゼンテーションを行った。

3 成果

- (1) 生徒の感想
 - ・台湾の高校生は私たちよりも積極的で、歓迎式や交流内容等のすべてを生徒自身が企画したと知って驚いた。今後私たちも、海外から学生が来校する時には、同じように積極的に受け入れるべきだと感じた。
 - ・台湾の高校生のコミュニケーション能力は高く、歓迎式で1人の生徒が「Don't be shy!」と呼びかけ、アイスブレイクができたおかげで、活発なディスカッションができた。
- (2) 分析できる成果

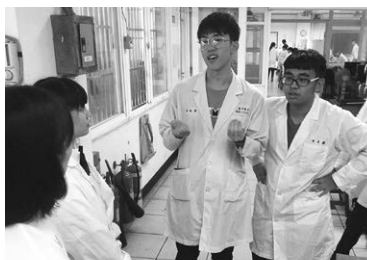
課題研究に関する英語によるプレゼンテーションやディスカッションをととして、現地の視点から多くの情報が得られた。また、各生徒が英語でのコミュニケーションや国際交流に対しての意識を高めたことから、今後海外の高校生が来校する際にリーダーシップを発揮することが期待できる。

4 課題

課題研究において、京都や日本文化に関する発表内容は議論しやすいが、「イノベーション探究Ⅱ」の専門性の高い研究内容を海外の高校生に伝えるためには、より英語力を高める必要がある。



アイスブレイキング活動



授業見学及び授業参加



課題研究内容に関するディスカッション

(I) 台湾・高雄市天主教明誠高級中学、台湾・国立竹北高級中学

1 ねらい

同時代を生きる海外の高校生との交流を通じて、様々な価値観や考え方を学び、多文化対話力を身につける。また、「イノベーション探究ⅠⅡ」での課題研究に関して英語で発表し、インタビュー調査や意見交流を行う。将来的に国際会議等で自信を持って研究発表ができる実践的英語力も育成する。

2 概要（実践）

(1) 高雄市天主教明誠高級中学交流会

ア 日 時 平成 30 年 5 月 30 日（水）

イ 場 所 鳥羽高校

ウ 参加者 1・2年生グローバル科 161 名、高雄市天主教明誠高級中学生徒 34 名

エ 実施内容

歓迎式、英語による伝統・文化に関する Show&Tell、部活動見学

(2) 国立竹北高級中学交流会

ア 日 時 平成 30 年 10 月 23 日（火）

イ 場 所 鳥羽高校

ウ 参加者 2 年生普通科 239 名、国立竹北高級中学生徒 32 名

エ 実施内容

歓迎式、英語による伝統・文化に関する Show&Tell、ランチ交流、スポーツ授業参加・見学

3 成果

S G H対象クラスが第 1・2 学年全員と 3 年生 3 クラスに広がる中、多くの生徒にどのように海外の高校生等との協働学習の機会を与えるかが課題であったが、管理機関等と連携しながら、年に数回海外の高校生の訪問を受け入れることで課題解決を図った。また、グローバル科で研究開発した海外の高校生等との協働学習プログラムを普通科でも行うことにより、校内的な普及を図ることができた。

4 課題

海外の高校から本校への訪問回数が限られ、定常的に海外の高校生と協働学習できる環境が整備できていないことが課題であった。平成 31 年度から、アジア高校生架け橋プロジェクトをとおして 2 名の留学生を受け入れることにより、より多くの生徒が外国語を用いながら海外の高校生と学びあえる環境を整える。

また、海外の高校からの訪問が 1 回限りの協働学習とならないように、オンラインで学校間・生徒間で連携できる仕組み作りを行う。



英語を用いた Show & Tell



国立竹北高級中学との交流会

エ 鳥羽グローバル・サミット

1 ねらい

3年生については、総合的な学習の時間「イノベーション探究Ⅲ」における課題研究について海外の大学生とディスカッションを行い、地域・言語や世代を超えた新たな価値を協働で提言し、価値創造力を高める。1・2年生については、海外の大学生とのワークショップ等をとおして課題研究内容をグローバルな視点から深化させるとともに、多文化協働による課題発見能力・課題解決能力を高める。また、海外大学生との KYOTO フィールドワークや協働授業をとおして、「京の智」の再発見を促すとともに、文化や価値観の違いを理解し、共生するための多角的な視点を身につけさせる。

2 概要（実践）

- (1) 日 時 平成 30 年 7 月 11 日（水）～7 月 15 日（日）
- (2) 場 所 本校、京都市内
- (3) 参加者 1 年生全員 320 名、2 年生全員 320 名、3 年生普通科理数人文 G124 名
- (4) T A N U S（シンガポール国立大学）4 名、復旦大学（上海）2 名、きょうと留学生ハウス・京都府名誉友好大使等 27 名（京都大学、京都工芸繊維大学、京都府立大学、同志社大学、立命館大学、龍谷大学）
- (5) プログラム
 - ア 7 月 11 日（水）

15：30～17：00 開会式、ホームステイ先との対面式
 - イ 7 月 12 日（木）・13 日（金）
 - (ア) 「グローバル・コミュニケーションⅠ」（1 年生グローバル科 80 名）

内容：総合的な学習の時間「イノベーション探究Ⅰ」との教科横断的な取組として、京都の伝統・文化について ICT 機器を用いながら英語でプレゼンテーション
 - (イ) 「総合数学」（1 年生グローバル科 80 名）

内容：海外のトップ大学の学生とともに、英語と日本語の数学表現の概念定義や表記の仕方の違いに関する協働学習
 - (ウ) 「グローバル・コミュニケーションⅡ」（2 年生グローバル科 81 名）

内容：総合的な学習の時間「イノベーション探究Ⅱ」との教科横断的な取組として、国ごとに価値観が異なるグローバル・イシューについて英語ディベートを実施
 - (エ) 「京都の風土・世界の風土」（2 年生グローバル科 81 名）

内容：平安京と中国長安城をモデルに、京都の都市域の変遷を地形図を用いて確認し、今後の都市（京都・シンガポール・上海）の在り方を海外大学生と協働して考察
 - (オ) 「イノベーション探究Ⅲ」（3 年生普通科理数人文 G124 名）

内容：総合的な学習の時間「イノベーション探究Ⅲ」の課題研究内容について英語でディスカッションを行い、海外の大学生とともに作成した提言を英語で発表
 - (カ) グローバル・ランチ、グローバル・カフェ、1 年生ワークショップ

内容：昼休みと放課後に全生徒と全教職員を対象に、異文化理解や課題研究内容に関するインタビュー調査に取り組む機会を設けた。また、1 年生対象に Show&Tell 等を英語を用いて行うワークショップを実施
 - ウ 7 月 14 日（土）

「KYOTO フィールドワーク」（1 年生 15 名、2 年生 16 名参加）

内容：グループごとに課題研究テーマを設定、京都市内においてフィールドワークを実施

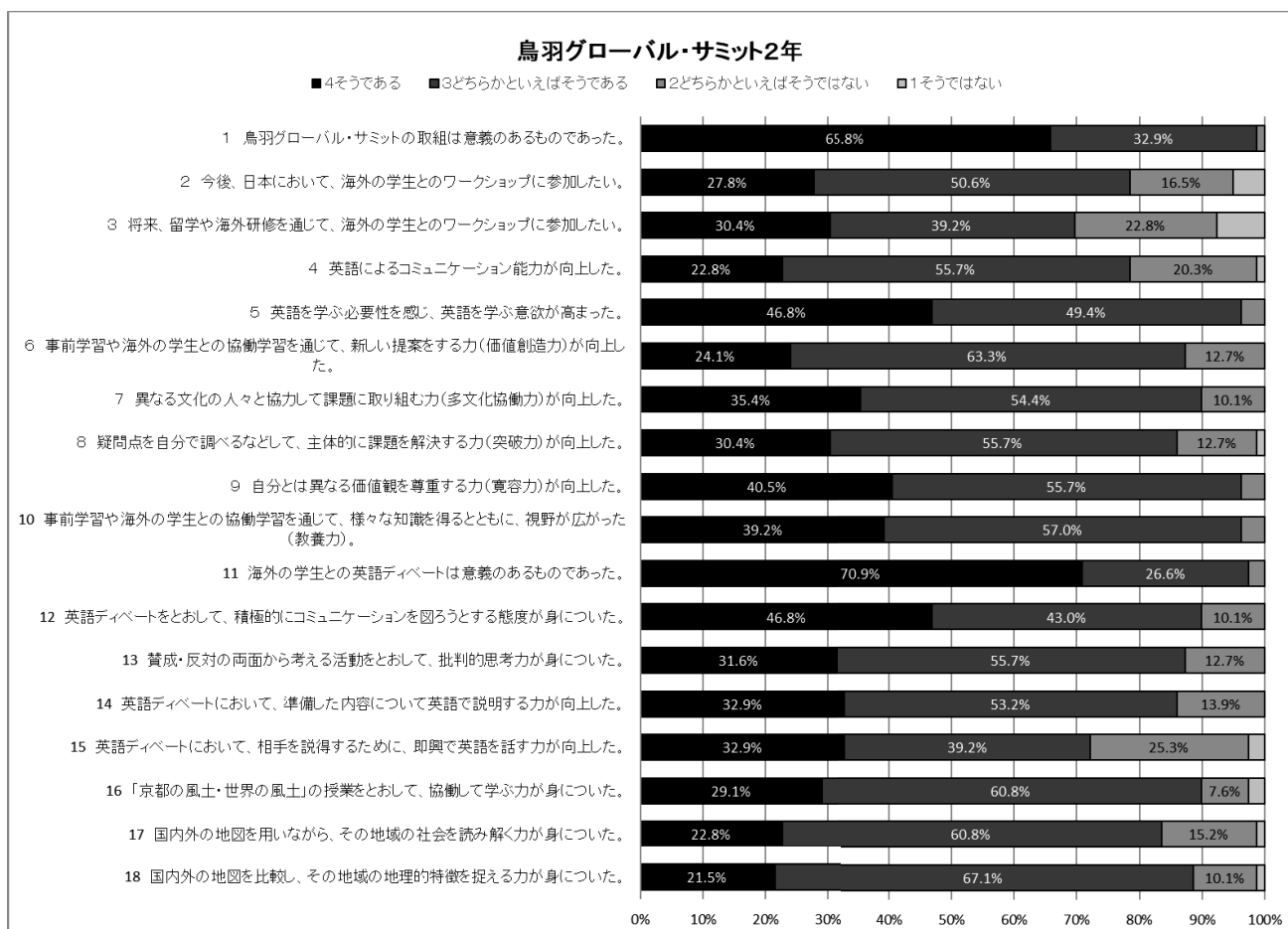
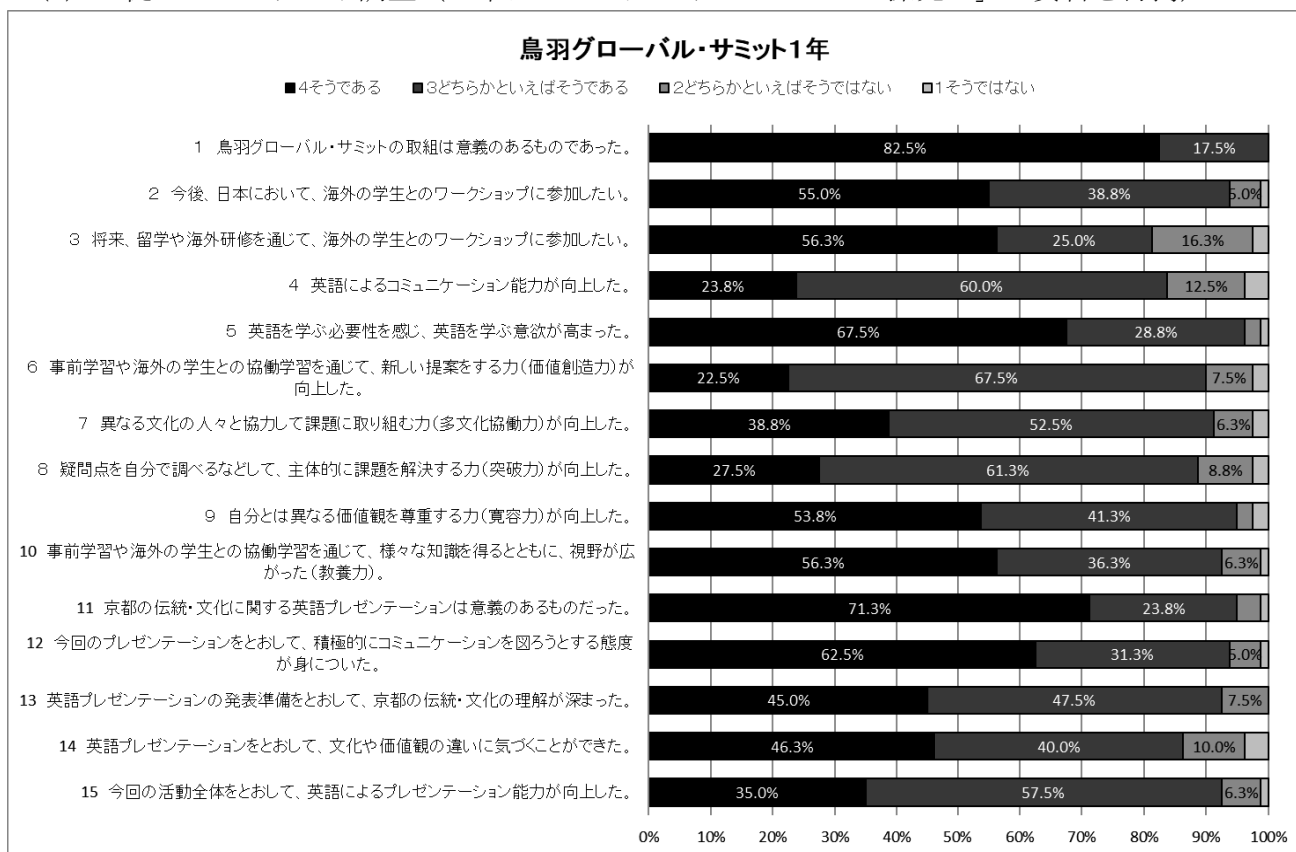
場所：東福寺、泉涌寺、八坂神社、安井金比羅宮、仁和寺、龍安寺、金閣寺、高台寺、知恩院、天龍寺、野宮神社、銀閣寺、祇園祭鉾町
 - エ 7 月 15 日（日）

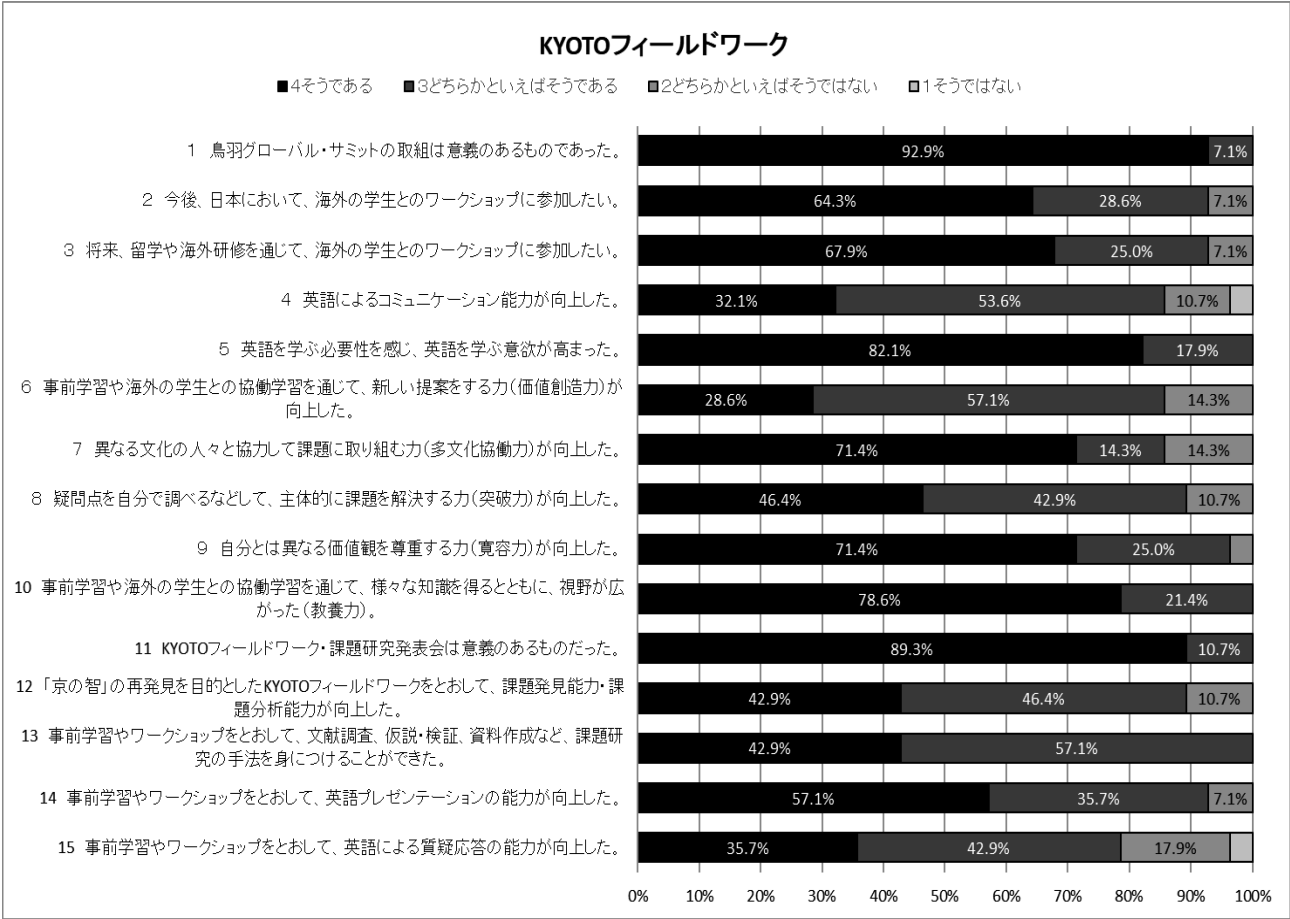
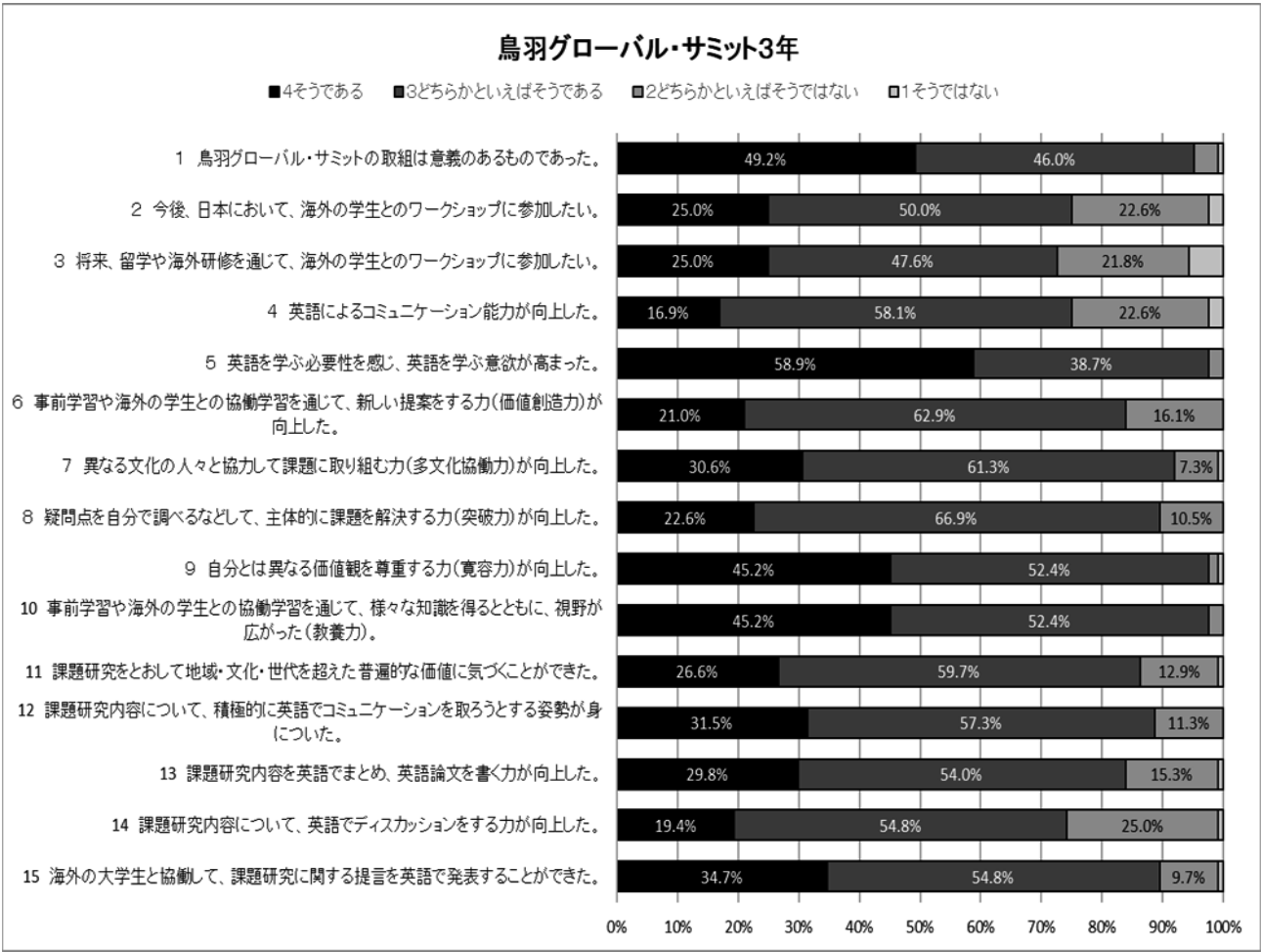
「課題研究発表会」（1 年生 15 名、2 年生 16 名参加）

内容：前日の「KYOTO フィールドワーク」をとおして発見した「京の智」について、海外の大学生とともに英語でプレゼンテーション、世界へ発信

3 成果

(1) 生徒へのアンケート調査（3年については「イノベーション探究Ⅲ」の資料を再掲）





(2) 生徒の感想

- ・海外の大学生や留学生と英語でディスカッションをしたが、聞き取れた言葉から類推して内容を理解することができた。3年間取り組んだ課題研究の内容について質問や提案もたくさんしていただき、課題研究の内容がさらに深まり、視野が広がった。
- ・海外の大学生や留学生が私たちの課題研究について、一緒になって一生懸命に考えてくれたことが嬉しかった。英語で分からない言葉が出てくると、簡単な英語に言い換えていただき、コミュニケーションを楽しむことができた。海外の大学生や留学生から、私たちとは全く異なる考え方や他の解決策が出て、発想を広げることができた。
- ・今回の KYOTO フィールドワークでは日常的な英語から課題研究に使う専門的な英語まで、様々な英語に触れることができた。外国人観光客へ英語を用いたインタビューをすることで、自分たちの住む京都をこれまでとは別の視点で見ることができ、たくさんの新しい発見があった。

(3) 分析できる成果

3年間の課題研究の総まとめとして、シンガポール国立大学や上海の復旦大学、SGU京都大学等で学ぶ留学生など、世界のトップレベルの学生とともにSDGsの達成に向けた国際会議を開催する経験をとおり、多くの生徒たちが刺激を受けることができた。特に、質問5「英語を学ぶ必要性を感じ、英語を学ぶ意欲が高まった」について、3年生の97.6%、2年生の96.2%、1年生の96.3%が肯定的に回答するなど、SGH中間評価を受けて、事前学習も含めて探究のプロセスにのっとりた外国語の習得及び活用を推進することができた。

3年生と1年生の生徒アンケートを分析すると、質問9「自分とは異なる価値観を尊重する力(寛容力)が向上した」の肯定的評価がそれぞれ97.6%、95.1%と高く、課題研究の協働学習によるコミュニケーションから多様性に対する寛容力が身につくことが検証できた。また、質問10「事前学習や海外の学生との協働学習を通じて、様々な知識を得るとともに、視野が広がった(教養力)」の肯定的評価がそれぞれ97.6%、92.6%と高く、ディスカッション等をとおりて自分たちとは全く異なる視点から新しい知識や多角的な視座を獲得することができた。

2年生については、世界のトップレベルの学生にチームでディベートを挑むという難易度の高い活動に取り組んだことから、A評価については全体としてやや低かったものの、質問12「英語ディベートをとおりて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が身についた」のA評価が46.8%、肯定的評価が89.8%に達するなど、チームで役割分担しながら積極的に自分たちの意見を英語で述べることができた。

希望者が参加した「KYOTO フィールドワーク」および課題研究発表会については、参加者アンケートのA評価に着目すると、ほとんどの質問が各学年の全体平均を上回った。質問13「事前学習やワークショップをとおりて、文献調査、仮説検証、資料作成など、課題研究の手法を身につけることができた」のA評価が42.9%、肯定的評価100%に達するなど、海外のトップ大学の学生から2日間のプログラムをとおりて課題研究の手法を学んだことが成果へと結びついた。

運営体制としては、4年間の研究開発をとおりて、シンガポール国立大学や復旦大学、SGUの留学生と継続的に連携・協働しながら国際会議を開催できる仕組みができたことも成果である。

4 課題

4年間の研究開発をとおりて、海外の学生との協働学習が生徒のグローバル・マインドセットを涵養する効果があることが検証されていることを踏まえ、アジア高校生架け橋プロジェクトにより2名の留学生を受け入れ、年に1回開催される国際会議に加え、定常的に海外の高校生と学びあえる学習環境を作る。また、グローバル企業や国際機関、京都府教育委員会グローバルネットワーク京都連携校の高校生からも参加者も募り、多様性が感じられる環境を作り、成果普及を行う。



「イノベーション探究Ⅲ」



KYOTO フィールドワーク



課題研究発表会

(4) 研究開発単位Ⅳ：鳥羽の学びネットワークを活用した リベラルアーツ教育の研究開発

ア アクティブ・ラーニングを取り入れた公開授業・研究授業

1 ねらい

学びの質を高める手段の一つとして、生徒の主体的な活動を重視するアクティブ・ラーニングを推進する。平成30年度は「アクティブ・ラーニングの研究・実践～主体的・対話的で深い学び」をテーマとし、昨年度同様に研究授業・公開授業を実践することで学びの質の向上を図る。

2 昨年度の課題と今年度の改善点

SGH中間評価を踏まえ、昨年度の課題であったアクティブ・ラーニングを取り入れた授業を全教科・全科目へ広げるために、公開授業・研究授業を各教科1名以上が実践した。また、11月15日（木）のSGH事業研究発表会では、学校設定科目の研究授業に加えて、全授業の公開授業を実施し、鳥羽の学びネットワークのSGUやグローバル企業の関係者、SGH校・SGHアソシエイトや他の府立高校の教員から助言を受け、授業改善に取り組んだ。

3 概要（実践）

(1) 公開授業

実施期間 平成30年7月9日（月）～7月18日（水）

実施人数 9名（国語科2名 地理歴史・公民科1名 数学科1名 理科2名 英語科2名 保健体育科1名）

内 容 科目ごとにアクティブ・ラーニングを取り入れた研究授業の実践
授業参観教員によるアンケートの実施

(2) 研究授業・公開授業

実施期間 平成30年11月1日（木）～11月28日（水）

（平成30年11月15日（木）はSGH事業研究発表会）

実施人数 研究授業 10名（国語科1名 地理歴史・公民科1名 数学科1名 理科1名 英語科3名 保健体育科2名 情報科1名）

公開授業 22名（国語科1名 地理歴史・公民科4名 数学科2名 理科3名 英語科2名 保健体育科4名 芸術科3名、第2外国語3名）

4 成果

(1) 各教科から

- ・単にアクティブ・ラーニングの取組を行うだけでなく、それをどのように活用し、生徒にどのような力を身につけさせるのかを十分に考慮し、導入する必要があることを再確認した。（国語科）
- ・アクティブ・ラーニングへの指導法転換と実践により、自分がこれまで思っていたアクティブ・ラーニングのイメージが大きく変わった。校内外への授業公開とそのフィードバックをとおした授業改善に取り組むことができた。（英語科）

(2) 分析できる成果

- ・教科間で指導内容・指導方法を共有、分析することで、生徒に主体的・対話的な学びを促すことができた。また、生徒に対しても、一人では扱うのが難しい課題・テーマについて、グループでのアクティブ・ラーニングをとおして主体的・意欲的に取り組ませることができた。

5 課題

アクティブ・ラーニングに関する授業実践について、自分の教科だけでなく、他の教科の取組についても共有を進めることができた。授業実践に加えて、授業の評価・分析についても共有する場面を増やすことを課題とする。

また、次年度はICTを活用したアクティブ・ラーニングを推進し、校内の生徒間に加えて、海外の大学生・高校生とともにオンラインで行える仕組み作りに取り組む。

イ 伝統・文化学習

1 冷泉家時雨亭文庫による和歌講習・歌会

(1) ねらい

平安の王朝文化を今に伝える「冷泉家時雨亭文庫」常務理事の冷泉貴実子氏を講師に迎え、日本の伝統的美意識を和歌及び披講をととして学ぶ体験的学習を行うことで、伝統・文化への関心を高める。また、生徒自らが和歌を英訳することで、自国の文化を海外へ発信する姿勢を学ぶ。

(2) 概要

公益財団法人「冷泉家時雨亭文庫」の冷泉貴実子常務理事と六嶋由岐子氏による講演・作歌指導を受け、1人1首作成した。春の歌会・秋の歌会において、公益財団法人「冷泉家時雨亭文庫」の田中タカ子氏の指導を受け、代表歌の披講を行った。

ア 作歌指導 平成30年6月6日(水) 1年生151名、11月14日(水) 1年生84名、
11月16日(金) 1年生85名

イ 春の歌会 平成30年5月29日(火) 1年生150名、2年生158名、披講研究部12名

ウ 秋の歌会 平成30年10月24日(水) 1年生166名、2年生158名、披講研究部8名

(3) 生徒の感想

- ・和歌を実際に詠んでみて、伝統が現在に繋がっていることを感じられた。

2 京都府高校生伝統文化事業(茶道)

(1) ねらい

京都府の産業としてのお茶、茶の歴史及び伝統・文化「茶道」の果たす役割と意義を理解する。

(2) 概要

ア 第1回 平成30年10月16日(火)・10月19日(金) 2年生160名

イ 第2回 平成30年10月23日(火)・10月26日(金) 2年生160名

裏千家師範 山本宗成氏を招き、「茶道」の作法を体験する。

3 未生流笹岡による「花手前(いけばなパフォーマンス)と講演及びディスカッション」

(1) ねらい

京都府にゆかりの深い華道を取り上げ、専門的立場の方を講師に迎えて体験的学習を行うことで、伝統・文化への関心を高めるとともに、豊かに生きる力を育てる。また海外の方との文化交流をととして、様々な文化や価値観を理解し、日本の伝統・文化を海外へ発信することの重要性を学ぶ。

(2) 概要

ア 日 時 平成30年11月21日(水) 2年生306名

イ 内 容 「未生流笹岡」三代家元笹岡隆甫氏による花手前と講演をととして、日本の代表的な文化である「華道」に秘められた日本固有の美意識と深い精神性を学んだ。後半では笹岡氏、京都府名誉友好大使のウドムパーニッチ・イサラーさん、本校生徒の3名で伝統・文化をテーマとしたパネルディスカッションを行った。

(3) 生徒の感想

- ・左右対称が完璧な美であるという考えもあるが、日本の生け花はそうではなく、出来ないところがあってそれを互いに支え合っていくという意味があり、とても日本らしいと思った。



秋の歌会



いけばなパフォーマンス

ウ グローバル思考力コンテスト

1 ねらい

グローバル課題に関する資料を分析し、これまでの経験や知識を活用しつつ、課題解決へとつながる思考力を、各クラス内のグループ活動による協働型コンテストをとおして養う。

2 概要（実践）

(1) 日 時 平成31年1月31日（木）6限LHR

(2) 対 象 1・2年生全員

(3) 形 態 4～5名によるグループ活動、各HR教室において担任が監督

(4) 内 容 「2050年の社会」を視野に入れた取り組むべき最重要課題の検討

持続可能な社会の構築をテーマとし、生徒が社会で中心となって活躍する2050年を視野に入れつつ、①から⑨の中で最も優先的に取り組むべき課題は何かを考えさせた。その際、中位や下位との比較をしながら、最優先課題として選んだ理由を述べさせた。

①地球温暖化、②人口増加、③資源・エネルギーの争奪、④宗教対立・民族対立

⑤生態系の破壊、⑥領土問題等、国家間の対立、⑦エボラ出血熱などの世界的流行病

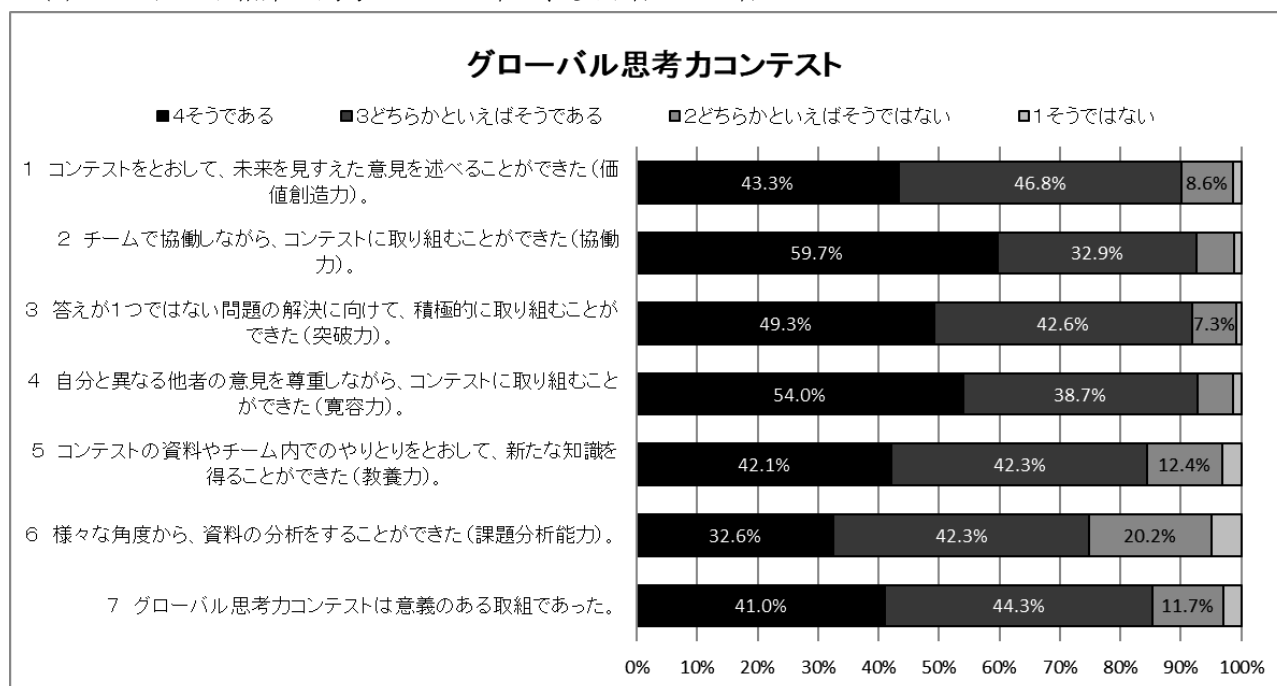
⑧人々による物質的な豊かさの追求、⑨巨大噴火・巨大地震などの自然災害

(5) 問題作成担当 SGHリベラルアーツ研究グループ内のグローバル思考力コンテスト担当

(6) 評 価 担当で全グループの解答をそれぞれ、分析力、論理力、想像力、表現力の4つの観点で評価し、最優秀賞1グループ、優秀賞3グループを選出した。

3 成果

(1) アンケート結果 対象：1・2年生、参加者 605名



(2) 分析できる成果

生徒アンケート質問2「チームで協働しながら、コンテストに取り組む事ができた(協働力)」のA評価が59.7%、肯定的評価が92.6%と高く、1・2年生の全クラス対象のコンテストをとおして、楽しみながら課題解決能力を育成することができた。また、「総合的な学習の時間」におけるアクティブ・ラーニングをとおして身につけた課題解決の手法を活用する生徒も多く見られた。

4 課題

中位や下位との比較が弱く、調べた内容をそのまま書いているものもあった。また、身近なものを高い順位にする傾向があった。「ソーシャル・インテリジェンス」等により課題分析能力を育成する。

1 課題研究ワークショップ「よい研究発表とはどのようなものか？」

(1) ねらい

「イノベーション探究Ⅱ」において課題研究を進めるにあたり、よい研究発表の条件を理解する。

(2) 概要（実践）

ア 日 時 平成 30 年 6 月 9 日（土） 10：40～12：30

イ 参加者 2 年生グローバル科 81 名

ウ 場 所 本校生物講義室及び 7 棟多目的教室

エ 講 師 大阪大学 進藤修一教授、柿澤寿信講師

オ 内 容 講義及びワークショップ「よい研究発表とはどのようなものか？」

(3) 成果

ア 生徒の感想

- ・ 今回の講義で研究発表をよりよくするためにはどうすればよいか詳細に知ることができた。よく見かける研究発表のパターンを見たときに、自分たちのグループはさすがに当てはまらないだろうと他人事のように考えていたが、実際はトピック 5 要件すべてを満たしてはおらず、もう一度改めて見直す必要があると感じた。
- ・ 課題を分析する方法を知った。まず問題を大まかに分けて、そこから木の枝のように細分化させていくというもので、これなら問題を漏らすことないとわかった。
- ・ 今回の講義でトピックの 5 要件について学んだ。一見どれも当たり前に思えたが、実際にそれら 5 つをすべて合わせたトピックを考えるのは、それほど容易ではないようだ。ひとくくりで掘り下げるのではなく、主題・トピック・仮説というふうに分解して思索することを意識して進めたい。
- ・ 講義後に改めて自分たちの取り組んできたことを確認してみると、主題はともかくトピックが不明瞭であることに気づいた。探究活動が行き詰まる前に知ることができてよかったと思った。
- ・ 課題研究を進める上では因果関係があるか、情報に信用性があるかをしっかり考え、筋道を立ててよい研究にしたい。

イ 分析できる成果

研究目的を明確にし、研究テーマを絞り込むことの必要性を理解できた。よい研究発表の要件を理解し、課題研究を進める指針を獲得することができた。

(4) 課題

大阪大学の先生方による講義及びワークショップをとおして、「研究目的が明確であること」、「思考に分析と論理が含まれていること」、「的をしぼった調査ができていること」の 3 点がよい研究発表の条件であることが理解できた。また、鳥羽高校の課題研究では仮説構築までを主眼としているが、本来の研究では仮説検証が重要であることも理解した。次年度は、本校では行わない仮説検証の手法についての理解を深める講座にしていきたい。



「よい研究発表」について
グループワーク



柿澤寿信講師による講義

2 アカデミック・ライティング講座

(1) ねらい

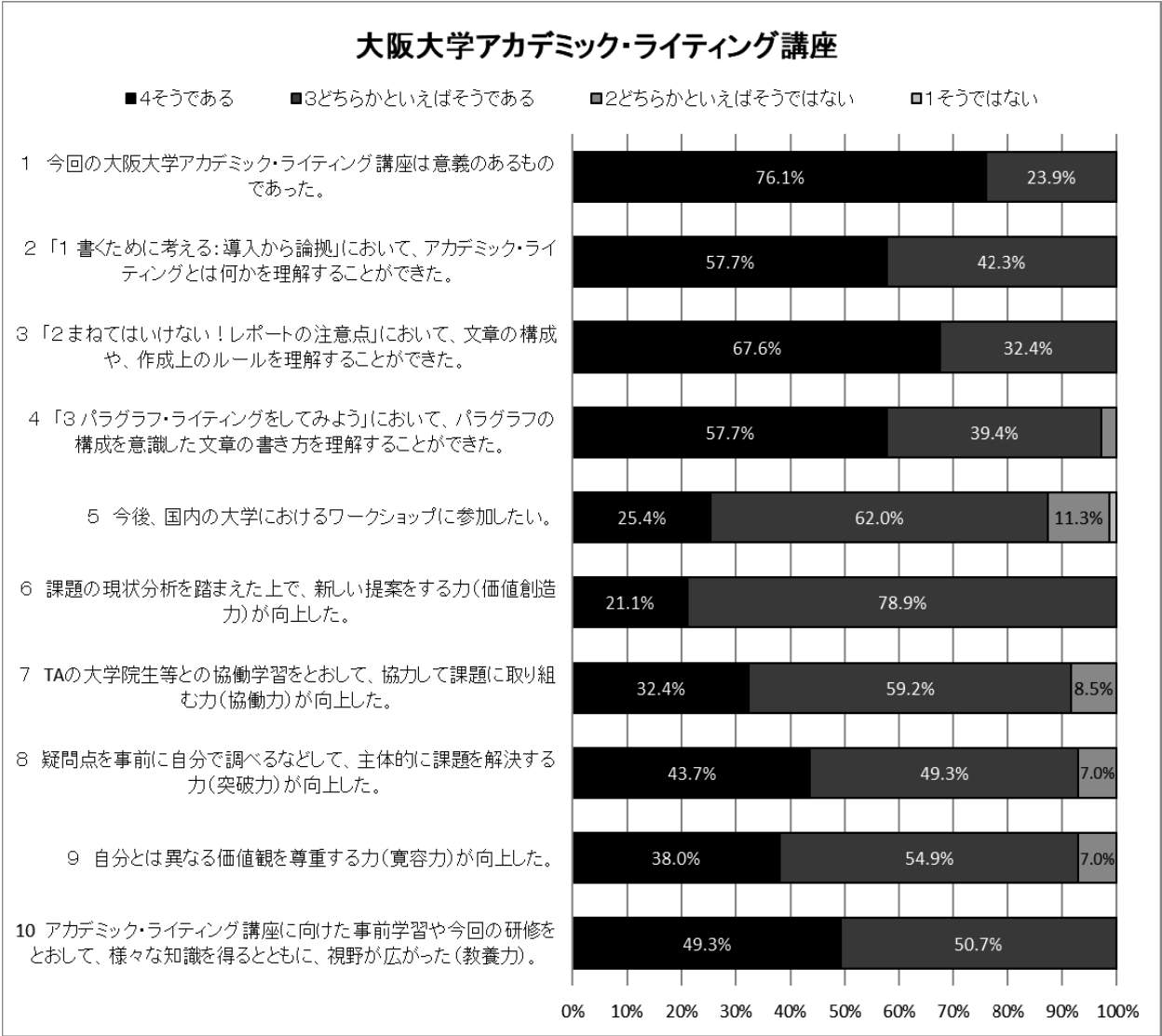
「イノベーション探究Ⅱ」において、論文を作成する際に必要な技能であるアカデミック・ライティングについて学習し、根拠情報の見つけ方や情報の整理方法、レポートの組み立て方などに関する手法を身につける。

(2) 概要（実践）

- ア 日 時 平成 30 年 8 月 17 日（金） 13：15～16：15
- イ 参加者 2 年生グローバル科 81 名
- ウ 場 所 大阪大学豊中キャンパス
- エ 講 師 大阪大学 堀一成准教授、坂尻彰宏准教授、進藤修一教授、大学院生（TA）6 名
- オ 内 容 講義及びワークショップ「アカデミック・ライティング講座」

(3) 成果

ア アンケート結果



イ 生徒の感想

- ・事前にリサーチクエストを調べていったが、ツッコまれてみると、調べて分かったつもりだったことが、全然調べ足りないことが分かった。これからは自分でツッコミを入れて、調査を深めたいと思った。
- ・書きたいこと、主張したいことを無計画に並べても結局何を伝えたいのか、核が見えにくいし前もって設計図を書き、自分の主張の分析をし、核となる部分を強調するよう心がける。
- ・グループワークで情報を共有して、5W1Hでツッコんでいくと、自分が気づけなかった矛盾点や何のために調査したのかが明らかになった。また、T Aの方がつきっきりで丁寧に指導してくださり、パラグラフ・ライティングが非常にしやすくなった。
- ・学術的な文章を作成するには、主題と答えのある、わかりやすい文章をつくることが大切だとわかった。また、インターネット上の他人の情報をコピーし、そのまま利用するのは、絶対にしてはいけないことであることがわかった。
- ・どうやって研究を進めていけばよいかわからない中で、アカデミック・ライティング講座を受けて、自分の調査の仕方や文の書き方にズレがあることに気づいた。これからは「パラグラフの構成」を意識して文を書きたい。

ウ 分析できる成果

アカデミック・ライティングとは何かを理解することができ、演習をととしてアカデミック・ライティングの必要性や難しさを十分に体感できた様子がうかがえる。生徒アンケート結果を昨年度と比較すると、肯定的な回答がほとんどの質問で増えており、とりわけ講座内容を問う質問1～4に対する最も肯定的な回答4が飛躍的に向上した（質問1が57.3%→76.1%、質問2が31.5%→57.7%、質問3が46.8%→67.6%、質問4が26.6%→57.7%）。これは、事前学習として、課題研究において各自が担当するリサーチクエストについての「調査シート」を完成させて臨んだ結果であると考えられる。

(4) 課題

事前に大阪大学の先生方と本校の担当者が十分な打合せをして、アカデミック・ライティング講座に向けた課題研究に関する「調査シート」を新たに作成した。生徒がきっちりと事前学習に取り組み「調査シート」を完成して参加したことにより、深い学びとなった。また、事後にはワークシートに丁寧な添削をしていただき、生徒の課題研究の深化に大変役立った。大阪大学大学院において「学術的文章の作法とその指導」という授業を修了した大学院生がT Aとなってくださっているおかげで、大変充実した講座となっている。引き続き次年度も高大の担当者間で生徒の研究状況を共有し、事前学習をきっちりと行っただうえで主体的に参加し、限られた時間を有効に使い、深い学びを実現していく。この講座により多くの本校教員が参加し、アカデミック・ライティングの教授法に触れることが望ましい。



書くために考える
：導入～論拠の検証



まねてはいけない！
：レポートの注意点



パラグラフ・ライティングを
してみよう

オ SGU連携・立命館大学宿泊研修

1 ねらい

総合的な学習の時間「イノベーション探究Ⅰ」において2学期までに取り組んできた課題研究を、2月実施の校内発表会に向けて集中的に研究グループで協働し、プレゼンテーションの準備を行う。

2 概要（実践）

- (1) 日 時 平成31年1月12日（土）・13日（日）
- (2) 参加者 1年生グローバル科79名
- (3) 場 所 立命館大学びわこ・くさつキャンパス セミナーハウス「エポック立命21」
（鳥羽の学びネットワークで連携しているSGU立命館大学の充実した施設を利用）
- (4) 講 師 TA（立命館大学生5名）
- (5) 引率指導 「イノベーション探究Ⅰ」「ソーシャル・インテリジェンス」の各担当教員
- (6) 内 容 宿泊を伴う2日間で、教員やTAの指導・助言を受けながら研究グループごとに協働し、校内発表のためのプレゼンテーション構成をまとめ、効果的な発表資料の作成に当たる。
また、中間発表を行うことで課題を明確にし、2月の発表に向けて完成度さらに高める。



立命館大学到着後、発表資料をグループで作成



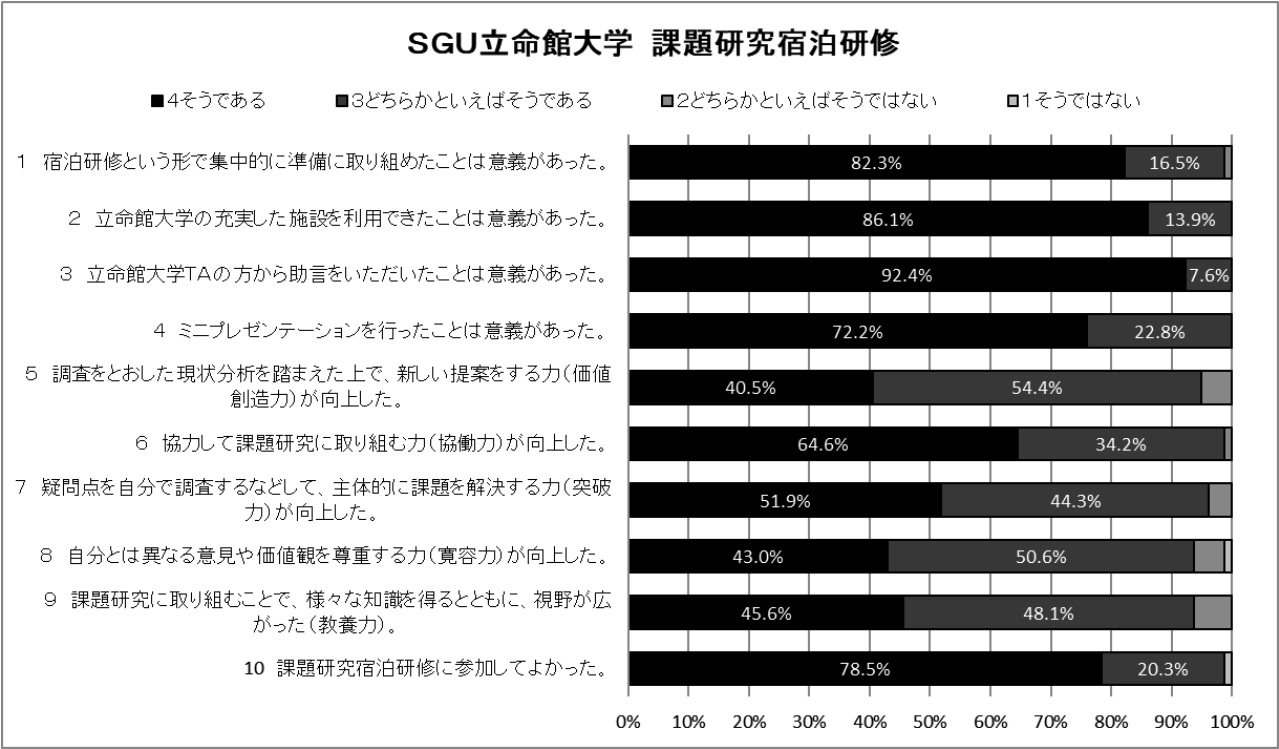
2日目の中間発表に向けて、発表資料をグループで再検討する



2日目、中間発表としてミニプレゼンテーションを行う

3 成果

(1) アンケート結果



(2) 生徒の感想

- ・SGUの大学生から集中的にアドバイスをいただき、課題研究を深めることができた。
- ・グループでよい発表をするという一つの目的に向かって、協力しながら課題研究に取り組むことができた。
- ・自分ではまとめられていると思っていたことが、他人から見るとまだ不完全なところもあることが分かり、課題研究発表会のプレゼンテーションではもっと分かりやすく伝えていく工夫が必要だと思った。
- ・プレゼンテーションではもっと簡単にまとめていき、分かりやすく伝えていくことが必要だと思った。
- ・自分が取り組んでいるリサーチ・クエスチョンについて、より深く学んでいきたいと思った。また、課題解決に向けて、自分たちが今できることや今後すべきことを考えていきたい。
- ・ミニプレゼンテーションをしていくうちにたくさん疑問が思い浮かび、自分たちのプレゼンテーションの問題点を発見することができた。
- ・立命館大学のTAからアドバイスをもらい、自分の中で普通だと思っていたことが、発表の聞き手からすると不自然と捉えられる場合もあると気づくことができた。
- ・自分たちの発表を客観的に見たときの疑問について探究したり、リサーチ・クエスチョンを作成するまでの背景やまとめを工夫したりすることで、より聞き手に伝わりやすくなると学んだ。

(3) 分析できる成果

授業時間内では設けることができないまとまった時間を確保し、プレゼンテーションの準備を進めることができたという点で今年度も有意義な取組となった。事前にプレゼンテーションの構成案や原稿案を綿密に考えた上で研修に臨んだことで、作業中のTAとの議論も深まり、TAの助言のもとで各グループが研究内容をさらに深化させることができた。また、ミニプレゼンテーションにおいて成果を発表しTAの講評を受けたことで、研究内容を客観的に見つめ直し、さらなる質的向上を図る意欲的なグループも多かった。

生徒アンケートについては、「4そうである」と回答した生徒が昨年度に比べて多く、特に質問7「疑問点を自分で調査するなどして、主体的に課題を解決する力（突破力）が向上した」について「4そうである」と回答した生徒の割合は昨年度よりも29.4%上昇し、本研修の事前準備として課題研究内容を深めることの重要性を実感した。また、TAから様々なアドバイスをいただいたことは、課題研究発表について学ぶだけでなく、生徒のキャリア観の形成という点においても貴重な機会となった。

4 課題

事前に個人のやるべきことが明確に定まっていれば、発表資料の作成時間を短縮でき、発表内容や論の立て方に関するグループでのディスカッションをより充実させることができる。その場にTAも加わってもらえば、議論がさらに深まり、グループとしての研究発表の質が向上する。次年度は、グループで協働して探究することの意義をより生徒が感じられるプログラムを研究開発する。

カ JICA関西ワークショップ

1 ねらい

JICA職員との協働学習をととして専門的見地から指導・助言を受けることにより、各自が取り組むSGH課題研究内容を深化させる。

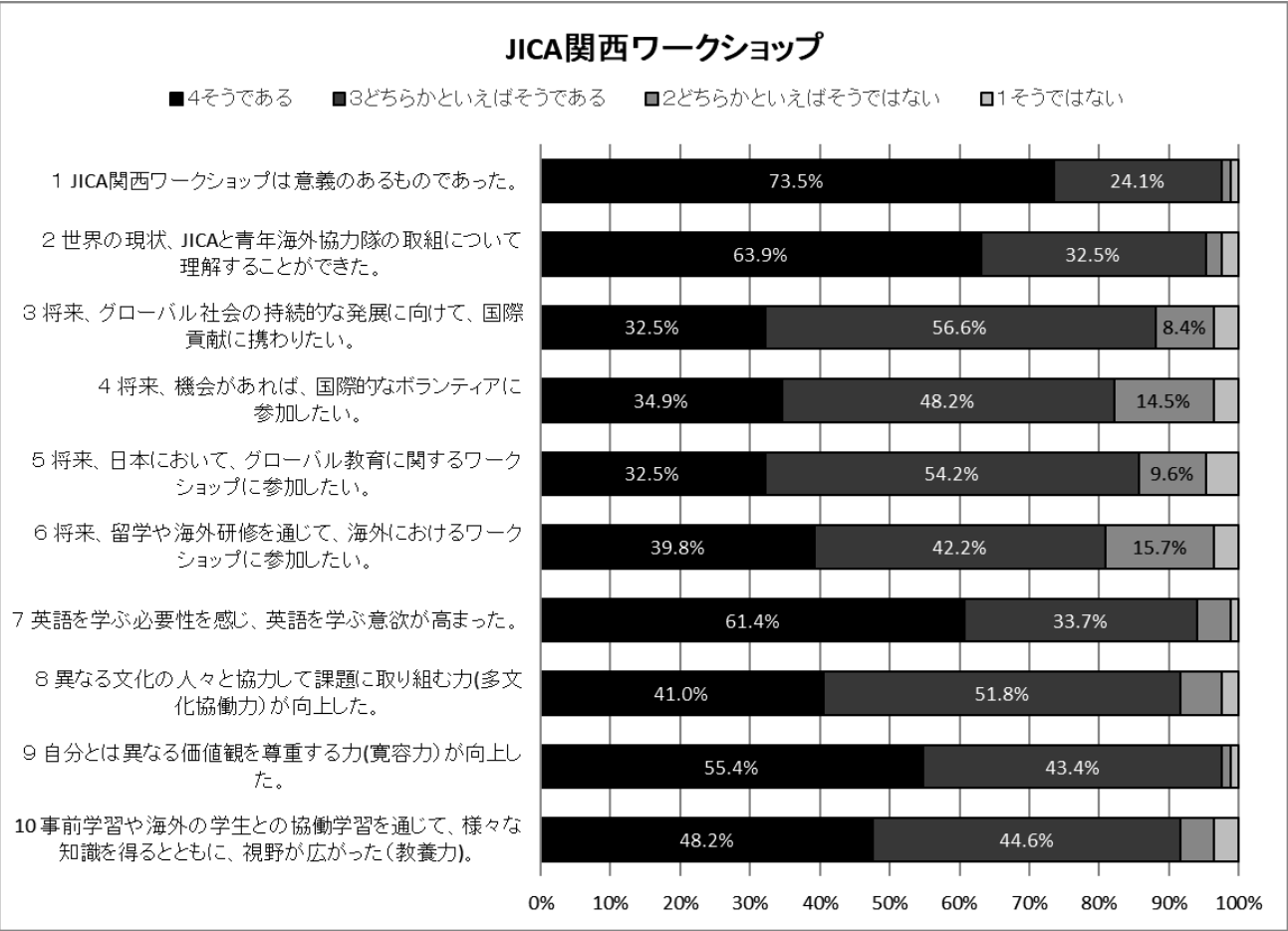
地球規模の課題や多様な文化、世界と日本のつながりを学び、異文化を理解し、多文化協働のための方策を考える。

2 概要（実践）

- (1) 日 時 平成 30 年 7 月 27 日（金） 11:10～14:20
- (2) 参加者 1・2 年生グローバル科及び普通科 88 名
- (3) 場 所 京都府立鳥羽高等学校
- (4) 講 師 河合憲太氏（公益社団法人青年海外協力協会 J O C A 大阪代表）
吉田悦子氏（公益社団法人青年海外協力協会 J O C A 大阪）
- (5) 内 容 J I C A ・ 青年海外協力隊の取組と日本の国際貢献に関する講義、グローバルな視点からのキャリア教育、「多国籍住民の町内会」ワークショップ

3 成果

(1) アンケート結果



(2) 生徒の感想

- ・今回初めて J I C A の方のお話を詳しく聞いた。J I C A が発展途上国のためにできることは何かを考え、架け橋の役割を果たしていることを知った。河合さんの体験談をととして、様々な国際貢献のあり方があった。
- ・青年海外協力隊は発展途上国のために何かを「してあげる」団体だと思っていたが、一番大切なのは「同じ目線で共感すること」だと分かった。これからは自分自身の周囲にも目を向けて、そ

れぞれが快適に暮らせる社会を作りたい。

- ・国際社会において、他の国の人々の話に耳を傾け、異なる価値観を尊重することの大切さがわかった。たくさんの言語、特に英語を学ぶことにより多くの人々とつながれると思う。英語をさらにしっかり勉強していきたい。
- ・日本人とベトナム人では「ありがとう」という言葉の言い方や考え方に違いがあるというお話を聞き、1つの視点からではなく、様々な視点から考えることの重要性がわかった。日本国内においても多文化共生が進んでいる。多くの人々と積極的にコミュニケーションをとっていきたい。

(3) 分析できる成果

昨年度に引き続き、本校を会場として1年生グローバル科全員と1・2年生の希望者を対象として実施した。昨年度とほぼ同数の88名が参加し、SGHの取組を校内に広げることができた。

河合氏からはインドネシア、吉田氏からはベトナムにおける青年海外協力隊への参加経験についてお話をいただき、日本の国際貢献の在り方について理解を深めることができた。ワークショップ実施前は、国際ボランティアに関心を持つ生徒が一定数いるものの、JICAの具体的な取組内容についてはほとんどの生徒がわからない状況であった。このワークショップをとおして、本校の卒業生である河合氏からは部活動で取り組んだ水球をインドネシアの子どもたちに教えた経験、吉田氏からは企業で働いた後に大学時代から興味を持っていた発展途上国における教育活動に従事した経験をそれぞれお話しいただき、日本人が世界で多様な国際貢献に従事していることを知るきっかけとすることができた。

生徒のアンケート結果については、質問7「英語を学ぶ必要性を感じ、英語を学ぶ意欲が高まった」の肯定的評価が95.1%、質問9「自分とは異なる価値観を尊重する力（寛容力）が向上した」が98.8%と特に高かった。自由記述についてもこの2点に関する感想が多く、青年海外協力隊としての正式な業務内容に加えて、現地での生活やコミュニケーションに関する実体験について話を聞くことで、生徒たちは外国語学習と異文化理解の重要性を感じることもできた。

また、質問3「将来、グローバル社会の持続的な発展に向けて、国際貢献に携わりたい」の肯定的評価が89.1%、質問4「将来、機会があれば国際的なボランティアに参加したい」の肯定的評価が83.1%と高く、多くの生徒が海外における国際貢献に関心を持った。

実施内容を昨年度から一部変更し、多国籍の住民が同じ町内に住み、様々な課題についてロールプレイ形式で解決する「多国籍住民の町内会」ワークショップを行った。質問8「異なる文化の人々と協力して課題に取り組む力（多文化協働力）が向上した」の肯定的評価が92.8%と高くなるなど、日本にしながら異文化コミュニケーション能力を向上させるための指導方法をJICAとともに研究開発することができた。

4 課題

参加生徒をさらに増やすことで、校内における成果普及に取り組む。また、鳥羽グローバル・サミットや「イノベーション探究ⅠⅡ」との関連を深めた取組へと発展させる。

次年度については、SGHの研究開発の成果を他校へ普及を推進するために、午後の部については本校を会場として他校と合同で実施することを検討する。



青年海外協力隊の取組について



ベトナムにおける教育支援について



「多国籍住民の町内会」ワークショップ

キ 高大社連携事業

1 ねらい

S G U等の大学、グローバル企業や国際機関等の鳥羽の学びネットワークと個々に連携して行ってきた教育活動をさらに発展させ、高校・大学・企業が一体となって取り組む高大社連携を推進し、社会に開かれた教育課程の研究開発を進める。

2 概要（実践）

- (1) 平成30年度京都南ロータリークラブ×鳥羽高校キャリアガイダンス
ア 日時・会場 平成30年9月15日（土）・京都府立鳥羽高等学校
イ 連携先 京都南ロータリークラブ、京都南ロータリーアクトクラブ
ウ 内 容 パネルディスカッション「働くことの意義」・「グローバル社会で働くために求められる人材像とは」をうけ、各教室においてグループディスカッション、その後全体報告
- (2) 高大社連携フューチャーセッション
ア 日時・会場 平成30年11月3日（土・祝）・キャンパスプラザ京都
イ 主 催 京都高大連携研究協議会
（京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都府私立中学高等学校連合会、京都商工会議所、公益財団法人大学コンソーシアム京都）
ウ 内 容 「働くことと学ぶをどう繋げるか？ー人間にしかできない価値とは何かを考えるー」をテーマに、ロールモデルトークの後、大学生と高校生が学ぶことと働くことをいかにつなげるかについて議論
- (3) 京都中小企業家同友会 2018 高大社連携研修事業
ア 日時・会場 平成30年11月23日（金・祝）・京都府中小企業会館
イ 主 催 京都中小企業家同友会
（共催：福知山公立大学杉岡ゼミ・本校、協力：公益財団法人大学コンソーシアム京都）
ウ 内 容 「中小企業の本気の課題に、学生はどこまで取り組むことができるのか!？」をテーマに、中小企業の経営者、福知山公立大学・京都府立大学・京都光華女子大学の大学生、本校生徒がグループディスカッションし、その後全体報告
- (4) 第16回高大連携教育フォーラム
ア 日時・会場 平成30年12月8日（土・祝）・キャンパスプラザ京都
イ 主 催 京都高大連携研究協議会（同上）
ウ 内 容 高大社連携キャリア教育の特別分科会において、本校の竹林教諭および本校生徒が「高大社連携の現段階の到達点とミライ～高校、大学それぞれの立場から～」をテーマとする成果発表およびパネルディスカッションに参加

3 成果

S G H研究開発1年次から3年次にかけては、S G U等の大学や企業・国際機関等と本校が個々に連携する事業が多かったが、本年度4年次から京都南ロータリークラブ、京都中小企業家同友会、京都商工会議所、公益財団法人大学コンソーシアム京都など、大学・企業団体・高校が一体化された高大社連携を推進することをとおし、より多くの方々と同時に連携しながらグローバル・リーダーを育成する仕組みを作ることができた。

キャリア教育の観点からも、高校・大学・企業が一体となった取組をとおり、将来的にグローバル社会で働く上での見通しを生徒に持たせることができた。

また、課題研究の発表機会が増え、1回の発表につき多様な所属先の方々からフィードバックを受けることができ、生徒の多角的視座の獲得に結びつけることができた。

4 課題

今年度は高大社連携の仕組み作りに重点を置いたが、次年度についてはプログラム内容と参加生徒の変容について検証と改善を行い、他の地域でも実践できるモデル化を行い、成果普及に積極的に取り組む。

(5) その他の取組

ア 各種コンテスト参加

(7) 日本政策金融公庫「高校生ビジネスプラン・グランプリ」

1 ねらい

グローバルな社会またはビジネス課題に関する公益性の高いコンテストへの参加をとおして課題分析能力・課題解決能力を高めるとともに、「イノベーション探究ⅠⅡ」やSGH海外研修で取り組んでいる課題研究内容をビジネスの観点から深める機会とする。

2 概要（実践）

(1) 年間計画・実施内容

6月20日（水）日本政策金融公庫ビジネスプランサポート授業 基礎編

7月25日（水）日本政策金融公庫ビジネスプランサポート授業 実践編

9月11日（火）ビジネスプランエントリー

10月10日（水）ビジネスプランシート送付

(2) 参加生徒 1年生11名・2年生11名

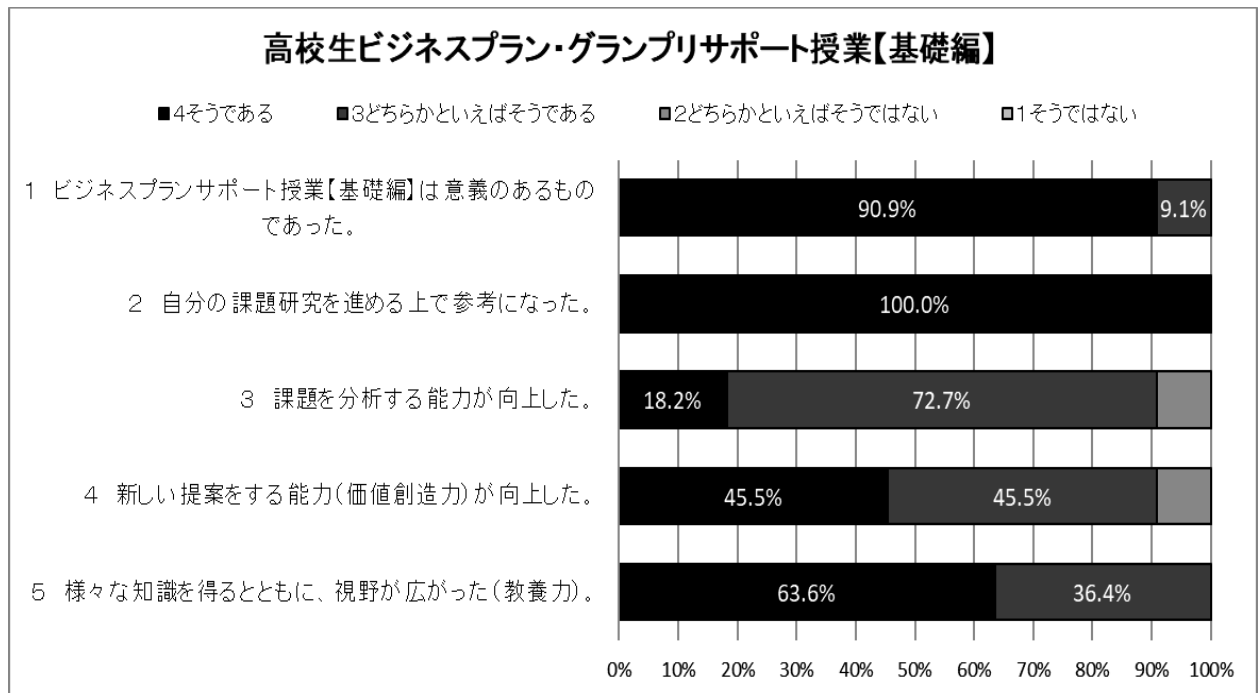
(3) テーマ 「食べちゃうストロー」、「My Cosme Pack」等

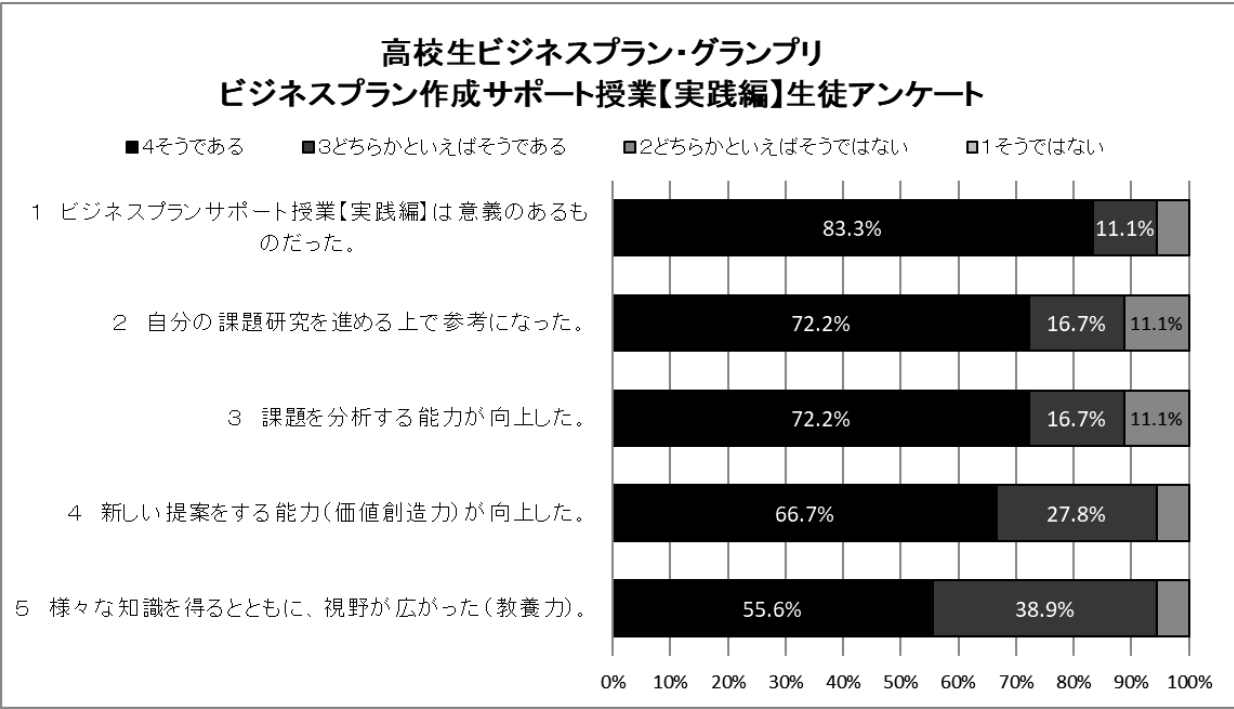
(4) 講師 坂井俊一郎氏

（株式会社日本政策金融公庫国民生活事業京都創業支援センター上席所長代理）

3 成果

(1) アンケート結果





- (2) 生徒の感想
- ・ビジネスプランを考える時に、どこに「ニーズ」があるかを調査するのが大切だということを学ぶことができた。自分の考えだけで「ニーズ」を決めるのではなく、しっかりとアンケート調査を実施し、データを分析をしたい。
 - ・アイデア(ビジネスプラン)を考える時に必要になるのは幅広い知識と広い視野であると思った。また、アイデアを考えるだけでなく、更にその先のお金の動きなどを考えなくてはいけないと思った。
- (3) 分析できる成果
- 4, 359 件のエントリーがある中で入賞することは難しかったが、総合的な学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡ」やSGH海外研修の課題研究をふまえたビジネスプランを作成することで、マーケティングや予算立てなど、より実社会に近い形で研究内容を深めることができた。
- アンケート結果によると、質問2「自分の課題研究を進める上で参考になった」について「4そうである」と回答する生徒の割合が、基礎編については前年度より12.5%高い100%、実践編については前年度より1.6%高い72.1%とそれぞれ昨年度に比べて高い値になり、課題研究やSGH海外研修と関連づけつつ、多角的に分析し、提案する能力を高めることができた。

4 課題

【実践編】質問5のA評価が55.6%とやや低く、教養力の育成にやや課題がある。次年度については、ビジネスプランを検討する際の文献調査などについて、「イノベーション探究ⅠⅡ」における課題研究の手法との関連を深めたい。また、ビジネスプランの作成方法の取得にとどまらず、マーケティングの手法などを学ぶ取組を実施したい。



ビジネスプランサポート授業（基礎編）

ビジネスプランサポート授業（実践編）

校内プレゼンテーション

(イ) 京都府教育委員会「グローバルネットワーク京都交流会」

1 ねらい

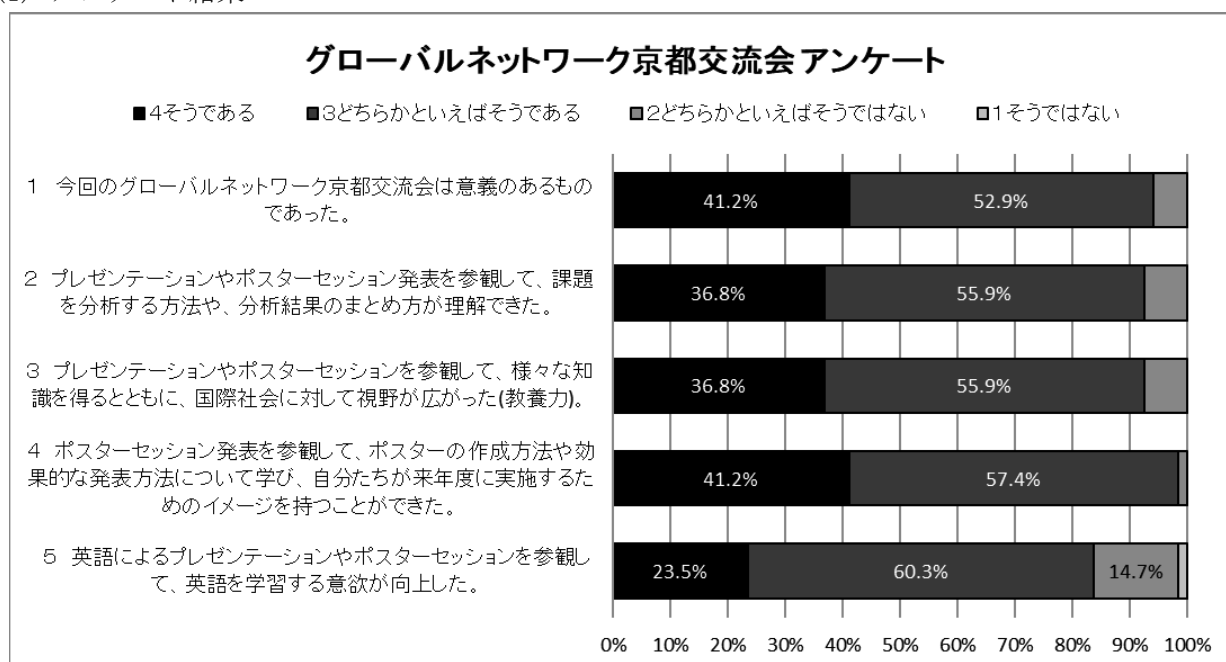
社会参画意識を醸成するとともに、国際社会に貢献できるリーダーを育成するため、課題分析力・思考力・判断力・表現力を培う。また、SGH事業の取組を府立高校に紹介し、グローバルネットワーク京都の幹事校として他校と連携しながら課題研究の指導手法等を共有・深化させる。

2 概要（実践）

- (1) 日時 平成31年2月2日（土）
- (2) 会場 京都工芸繊維大学
- (3) 主催 京都府教育委員会
- (4) 対象 京都府教育委員会グローバルネットワーク京都9校
幹事校：鳥羽高校
山城高校、洛西高校、東宇治高校、菟道高校、城南菱創高校、西城陽高校、園部高校、峰山高校
- (5) 主な実施内容
 - ア 「グローバルネットワーク京都論文コンテスト」
テーマ「持続可能な国際社会への展望」、1年生169名が取り組み、代表3点を応募
 - イ 提言発表Ⅰ（英語によるプレゼンテーション）
テーマ「持続可能な国際社会への展望」、2年生2名
SGH台湾海外研修参加者が株式会社片岡製作所の京都本社と台湾拠点でのインターンシップを踏まえ、中小企業がかかえる人材不足問題の解決について英語で発表
 - ウ 提言発表Ⅱ（ポスターセッション）
テーマ「持続可能な国際社会への展望」、2年生11名
「イノベーション探究Ⅱ」の下記課題研究内容を日本語で発表
 - ・教育の不足に起因する性的少数者への人権侵害を踏まえた、思春期以前の教育を促進させるための方策
 - ・京都府久御山町における補助金交付制度を利用した定住化促進のための方策
 - ・時間や使える金額に制限のある高校生が、イエメンに対してできるコレラ蔓延を防ぐ衛生環境改善のための国際支援

3 成果

(1) アンケート結果



(2) 分析できる成果

京都府立高校の中でグローバル教育を推進する学校群である京都府教育委員会グローバルネットワーク京都の幹事校として、SGHの研究開発内容、ポスターセッションについての成果普及に取り組むことができた。また、他の8校の連携校とともに、各校で取り組んだ課題研究内容に関する発表や質疑応答を行い、課題研究の手法についても共有することができた。

オーディエンスとして参加した1年生グローバル科全員を対象に行ったアンケートでは、ほとんどの項目で「4そうである」と答えた生徒が昨年度よりも増加した。特に、質問項目4の「ポスターセッション発表を参観して、ポスターの作成方法や効果的な発表方法について学び、自分たちが来年度に実施するためのイメージを持つことができた。」の肯定的評価については、昨年度よりも12.6%増加し、98.6%に達した。グローバルネットワーク京都の連携校の発表を見ることで、次年度11月に行う「イノベーション探究Ⅱ」課題研究ポスターセッションの具体的なイメージを持つことができた。

4 課題

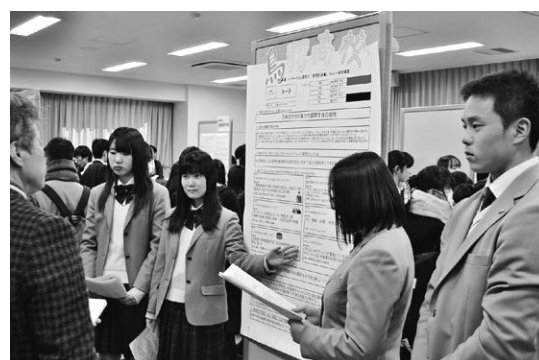
「イノベーション探究Ⅱ」において研究開発した内容を、初見の参観者にもわかりやすく説明できるように、専門用語の使用やプレゼンテーションの方法を工夫する。

発表用ポスターの型については教材開発を進めることができているので、次年度は質疑応答をさらに意識した指導体制を整備して、研究発表の質的向上を図りたい。

また、グローバルネットワーク京都校間の連携については、オフラインだけではなくICTを用いたオンラインでの手法について研究開発および提案を行い、本ネットワークの生徒たちが連携しながら課題研究や協働学習に取り組める仕組み作りを推進する。



提言発表Ⅰ「プレゼンテーション」



提言発表Ⅱ「ポスターセッション」

イ 外国語教育
(7) 実用英語技能検定（英検）

1 平成 30 年度英検取得状況

		在籍者数	準2級		2級		準1級	
			取得者数	取得率(%)	取得者数	取得率(%)	取得者数	取得率(%)
合計	全体	960	333	34.7%	120	12.5%	3	0.3%
	グローバル科・G	285	165	57.9%	79	27.7%	2	0.7%
	普通科(G以外)	675	168	24.9%	41	6.1%	1	0.1%
1年生	全体	320	116	36.3%	20	6.3%	0	0.0%
	グローバル科	80	51	63.8%	10	12.5%	0	0.0%
	普通科	240	65	27.1%	10	4.2%	0	0.0%
2年生	全体	320	125	39.1%	48	15.0%	2	0.6%
	グローバル科	81	56	69.1%	28	34.6%	2	2.5%
	普通科	239	69	28.9%	20	8.4%	0	0.0%
3年生	全体	320	92	28.8%	52	16.3%	1	0.3%
	理数人文G	124	58	46.8%	41	33.1%	0	0.0%
	他の普通科	196	34	17.3%	11	5.6%	1	0.5%

2 級別受験者推移

	H27		H28		H29		H30	
	受験者	割合	受験者	割合	受験者	割合	受験者	割合
準1級	9	0.8%	8	0.8%	18	1.8%	39	4.1%
2級	94	8.7%	118	11.4%	178	17.8%	257	26.8%
準2級	176	16.3%	148	14.3%	168	16.8%	206	21.5%
在籍者数	1080		1037		1000		960	

3 級別取得者推移（平成 30 年度は第 2 回まで）

	H27		H28		H29		H30	
	取得者	割合	取得者	割合	取得者	割合	取得者	割合
準1級	0	0.0%	1	0.1%	2	0.2%	3	0.3%
2級	17	1.6%	40	3.9%	58	5.8%	120	12.5%
準2級	92	8.5%	89	8.6%	279	27.9%	333	34.7%
在籍者数	1080		1037		1000		960	

4 成果と課題

クラス数減の影響で在籍者数が減る中、全ての級で受験者数が増加した。特に CEFR の B 2 レベルの準 1 級受験者が 18 名から 39 名へ、B 1 レベルの 2 級が 178 名から 257 名へと増加した。また、A 2 レベルの準 2 級取得者は 27.9%から 34.7%へと増加した。また、第 3 回で 1 級に 1 名が合格した。

課題として、全生徒のうち 1 年生の 57%・2 年生の 53%が平成 30 年度中に 1 度も英検を受験していないことから、土曜日の校内会場での積極的な受験をさらに促す。また、第 2 回の合格者平均と不合格者平均を比べると、Reading が 32 点・Listening が 31 点に対し、Writing が 111 点と差が大きかった。改善点として、次年度については 1 年次から段階的に英語を書く活動をさらに充実させる。

(イ) GTEC

1 トータルスコア分析

1年生

グレード	スコア	推奨スコアガイドライン	R	L	W	S
7	710～810	大学での専門教育を英語で学べる	1	4	0	4
6	610～709	海外進学を視野に入れることができる	1	20	0	15
5	520～609	高校上級 ：海外の高校の授業に参加できる	23	30	15	78
4	440～519	高校中級 ：海外ホームステイや語学研修を楽しめる	115	66	236	118
3	380～439	高校初級 ：ALTと日常的な会話をし、英語体験を楽しめる	110	75	40	78
2	300～379	定型的なやりとりであればできる	32	60	25	19
1	0～299	挨拶程度の簡単なコミュニケーションができる	34	61	0	3

2年生

グレード	スコア	推奨スコアガイドライン	R	L	W	S
7	710～810	大学での専門教育を英語で学べる	1	9	0	2
6	610～709	海外進学を視野に入れることができる	8	43	0	21
5	520～609	高校上級 ：海外の高校の授業に参加できる	70	51	60	106
4	440～519	高校中級 ：海外ホームステイや語学研修を楽しめる	136	74	207	124
3	380～439	高校初級 ：ALTと日常的な会話をし、英語体験を楽しめる	53	52	17	48
2	300～379	定型的なやりとりであればできる	28	44	25	7
1	0～299	挨拶程度の簡単なコミュニケーションができる	20	43	7	6

2 成果

昨年度から1・2年生全員がGTECを授業内実施し、4技能型の外部検定試験を受験する学校体制を整備した。グローバル科における総合的な学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡ」の課題研究と学校設定科目「グローバル・コミュニケーションⅠⅡ」の教科横断的取組、普通科におけるグローバル科に準じた「総合的な学習の時間」における課題研究と「英語表現ⅠⅡ」の教科横断的取組をそれぞれ推進し、課題研究に関する英語プレゼンテーションや英語ディベート活動を重点的に行った結果、4技能の中でグレード5の高校上級に達した生徒数が、1・2年生ともにスピーキングが最も高い結果となった。

3 課題

4技能のバランスを分析すると、1・2年生ともにリーディングとリスニングに課題がある。課題研究に関する英語文献を読む活動、ICTを用いた個別最適化されたリーディング、リスニング活動を取り入れるとともに、基礎・基本を徹底させることにより、次年度は4技能のバランスが取れた英語力の育成に取り組む。

(6) 成果の普及・広報

ア 成果の普及・広報の実施状況

1 実施状況

- (1) 「イノベーション探究」実践報告書（成果物）
各授業における課題研究の成果物として、成果発表会における年間概要・発表資料等を記載した実践報告書を作成した。校内外へ課題研究の成果を普及させた。
- (2) 研究発表会等
 - ア 平成 30 年 11 月 11 日（日）「学問への扉」開設記念シンポジウム
「初年次教育の再構築－新しい形の高大接続と大学初年次教育を考える－」
主催：SGU 大阪大学全学教育推進機構
 - イ 平成 30 年 11 月 15 日（木）
SGH 事業研究発表会・「イノベーション探究Ⅱ」ポスターセッション
対象：文部科学省 1 名、京都府教育委員会 4 名、京都府名誉友好大使 5 名、SGH 校・SGH アソシエイト・京都府内高校 15 名、企業・大学関係者等 23 名
 - ウ 平成 31 年 2 月 2 日（土）1 年生「総合的な学習の時間」課題研究発表会
対象：京都府名誉友好大使 4 名
 - エ 平成 31 年 2 月 2 日（土）京都府教育委員会「グローバルネットワーク京都交流会」
対象：京都府立高校生徒 387 名・教職員 68 名、大学関係者等
 - オ 平成 31 年 2 月 23 日（土）「イノベーション探究Ⅰ」研究発表会
対象：大学関係者 4 名、京都府立図書館 1 名、企業関係者 1 名
 - カ 平成 31 年 2 月 23 日（土）日本 ESD 学会第 2 回近畿地方研究会
対象：日本 ESD 学会会員・ユネスコスクール関係者 17 名
 - キ 平成 31 年 3 月 23 日（土）SGH 甲子園
対象：SGH 甲子園参観者（全国の SGH 校・SGH アソシエイト、大学関係者等）
- (3) 専門学科「グローバル科」説明会・学校説明会（対象：京都府全域の中学生及び保護者）
 - ア 平成 30 年 6 月 23 日（土）・24 日（日）公立高校合同説明会 738 名（496 世帯）
 - イ 平成 30 年 8 月 23 日（木）専門学科「グローバル科」説明会 303 名（161 世帯）
 - ウ 平成 30 年 9 月 29 日（土）学校説明会Ⅰ 922 名（501 世帯）
 - エ 平成 30 年 10 月 27 日（土）学校説明会Ⅱ 478 名（266 世帯）
 - オ 平成 30 年 12 月 15 日（土）学校説明会Ⅲ 251 名（144 世帯）
- (4) ホームページ
日本語によるホームページ更新回数 95 回、英語によるホームページ更新回数 107 回
- (5) TOBA SGH NEWS
学期ごとに 1 回、年 3 回発行 [Vol. 10（8 月）、Vol. 11（12 月）、Vol. 12（3 月）]、HP に掲載
全校生徒、各研究発表会、学校説明会、学校評議員会、運営指導委員会等において配布
- (6) 新聞による広報
京都新聞 2 回
- (7) 学校訪問の受入れ
8 回（東京都立三田高校、長崎県議会文教厚生委員会現地調査、青森県深い学び研究協議会（地歴公民部会）、福岡市立福翔高校、新潟県立国際情報高校、岡山県立玉野光南高校、兵庫県立須磨東高校、滋賀県立守山高校）
- (8) 鳥羽高校 PTA 会報
学期ごとに年 3 回発行する PTA 広報紙に SGH の取組状況を掲載し、保護者に紹介した。

2 成果と課題

「イノベーション探究」実践報告書を作成し、課題研究の指導計画や独自教材の普及に取り組んだ。特に SGH 校以外の高校の学校訪問の受入れを積極的に行った。また、英語版 HP による広報に力を入れ、昨年度より 33 回多い 107 回更新した。次年度は SGH 校以外への成果普及をさらに進める。

イ S G H事業研究発表会

1 ねらい

S G H校としての取組や生徒の課題研究等の成果の普及を行うとともに、校外からS G H事業への意見や批評をいただくことにより、グローバル・リーダー育成のための教育課程等の研究開発を進める。

2 概要（実践）

- (1) 日 時 平成 30 年 11 月 15 日（木）9:50～16:00
- (2) 会 場 京都府立鳥羽高等学校
- (3) 参加者 文部科学省 1 名、S G H運営指導委員 1 名、学術顧問 1 名、京都府教育委員会（管理機関）4 名、京都府商工労働観光部経済交流課 1 名、京都府名誉友好大使 5 名、大阪大学 6 名、京都光華女子大学 1 名、京都文化博物館 1 名、ジェトロ京都貿易情報センター 2 名、株式会社堀場製作所 1 名、小川珈琲株式会社 1 名、株式会社桂建材店 1 名、大成印刷紙業株式会社 1 名、日本政策金融公庫 1 名、株式会社エージェンシーアシスト 1 名、Nisai Virtual Academy 2 名、きょうと留学生ハウス 2 名、S G H校・S G Hアソシエイト・京都府内の高校 15 名

(4) 日 程

ア 10:20～10:40 校長挨拶、全体連絡・諸注意（1棟2階多目的教室）

イ 10:50～11:40 研究授業・公開授業

研究授業（学校設定教科・科目、各1クラス）	授業者	公開授業
グローバル・コミュニケーションⅠ	桂、ジェイコブ	同時時間帯に行われている1・2年生の全授業
ソーシャル・インテリジェンス	植垣、渡邊、田村	
京都の風土・世界の風土	宮崎雄、田中誠、青木	
グローバル・コミュニケーションⅡ	ミューリ	

ウ 11:50～12:40 研究協議

エ 13:25～14:15 S G H事業報告会（1棟2階多目的教室）

- (ア) S G H事業について
- (イ) 総合的な学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」について
- (ウ) S G H海外研修について
- (エ) 質疑応答

オ 14:25～15:15 「イノベーション探究Ⅱ」ポスターセッション

- (ア) 発表生徒 2年生グローバル科 81名
- (イ) 参加生徒 1年生グローバル科 80名
- (ウ) 形 式 1セット15分×3（6分発表、6分質疑応答、3分評価・移動）

カ 15:25～16:00 講評、閉会式

(5) 評価の方法

- ア 1年生による2年生ポスター発表の評価
- イ 校外からの参加者によるアンケート、自由記述形式の評価



京都の風土・世界の風土



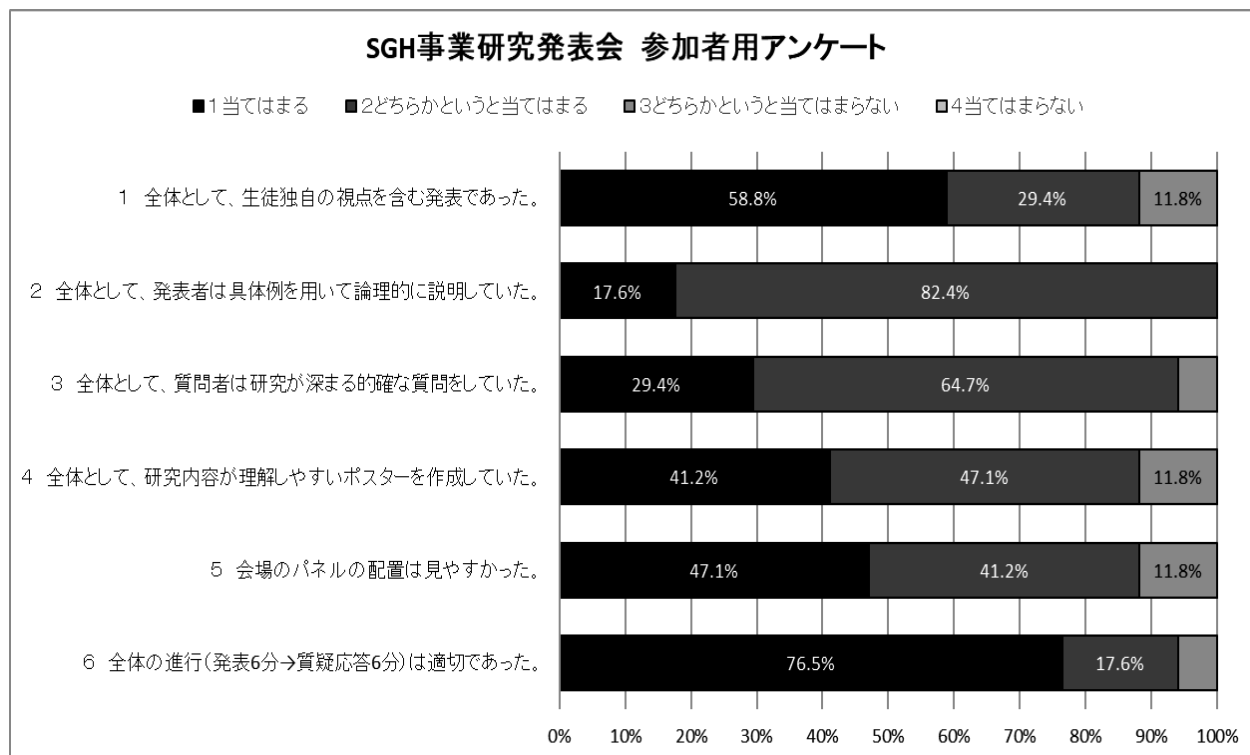
グローバル・コミュニケーションⅡ



イノベーション探究Ⅱ

3 成果

(1) アンケート結果



(2) 参加者の感想

- ・ポスターセッションはもっと図や表で書いてあって、その説明をするものだと思っていたので、このような形もあることに感心した。
- ・ポスターセッションをみて、資料をそのまま写すことにならずに、生徒がしっかりと考察していたことに、よく指導されていると感じた。
- ・生徒が積極的に質問していて、一人一人の授業への取り組み方に好感が持てた。

(3) 分析できる成果

総合的な学習の時間「イノベーション探究Ⅱ」については、SDGsの達成に向けた課題研究の中間発表と位置づけ、ポスターセッションを実施したが、SGU大阪大学や京都光華女子大学と連携して研究開発した独自教材であるポスターの形式について評価が高く、参加者へ教材集を配布するなど成果普及に取り組むことができた。

また、参加者用アンケート質問1「全体として、生徒独自の視点を含む発表であった」について「1当てはまる」の回答が58.8%に達するなど、個人発表ではなくグループ内で連携して役割分担をしながら協働研究を行ってきた内容について高い評価を受けた。

SGH中間評価を受けて、アクティブ・ラーニングへの指導法転換を推進しているが、午前中の研究授業および公開授業をとおして、参観者から様々なフィードバックを受け、授業改善に結びつける機会とすることができた。

4 課題

「イノベーション探究Ⅱ」のポスターについて、資料の出典がインターネットに偏ることなく、自分たちでインタビュー調査をした内容を増やすなど、より社会と関わる形で課題研究を進めさせたい。

また、参観者用アンケートの「1当てはまる」を抽出すると、質問2「全体として、発表者は具体例を用いて論理的に説明していた」が17.6%、質問3「全体として、質問者は研究が深まる的確な質問をしていた」が29.4%と低かった。「総合的な学習の時間」だけでなく、全教科共通した課題として、論理的・批判的な思考力や表現力の育成に取り組む。

ウ S G H教職員研修

1 ねらい

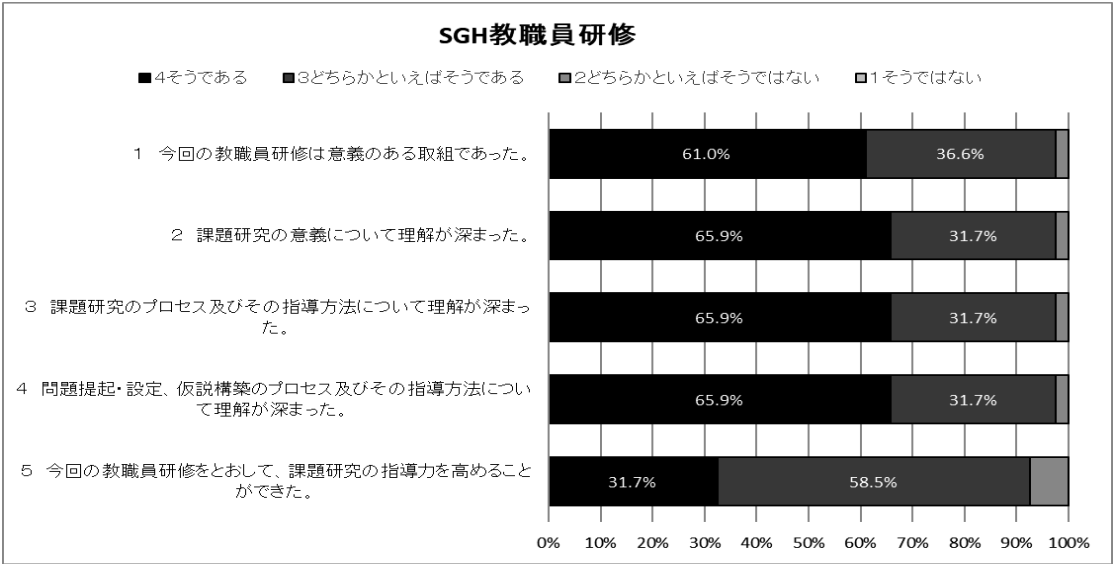
- (1) 専門的見地からの指導を受けることにより、「総合的な学習」の時間における教職員の課題研究の指導力を向上させる。
- (2) 京都府教育委員会「グローバルネットワーク京都」幹事校として課題研究に関する取組等を公開することにより、S G H事業における成果の普及を図る。

2 概要

- (1) 日 時 平成 30 年 7 月 4 日（水）14：00～15：30
- (2) 場 所 本校 1 棟多目的教室
- (3) 講 師 乾 明紀 氏（京都光華女子大学キャリア形成学科 准教授）
- (4) 内 容 『『総合的な学習の時間』における課題研究の指導プロセス～S G Hの取組をとおして～』
- (5) 参加者 本校教職員、グローバルネットワーク京都校より 3 名（西城陽高校 2 名、峰山高校 1 名）、京都府立高校から 2 名（久御山高校 1 名、綾部高校 1 名）

3 成果

(1) アンケート結果



(2) 分析できる成果

参加者アンケート質問 1 ～ 4 の回答のとおり、成果普及として、S G Hとして研究開発した課題研究の指導方法や独自教材を S G H以外の高校の教員と共有することができた。実際に生徒が使用する教材を教員が使用するワークショップをとおして、指導上の課題についても共有できた。

4 課題

平成 31 年度からの「総合的な探究の時間」の実施に向けて、S G H以外の高校から指導方法や教材についての問い合わせや相談が増えている。S G H教職員研修の開催時期を早めに伝え、より多くの高校の教員が参加できる体制を整え、研究開発の成果を普及させる。



専門学科「グローバル科」、学校設定教科「グローバル」

ア 専門学科「グローバル科」における取組

1 ねらい

課題解決型学習、第2外国語を含めた言語教育、専門教科「英語」および学校設定教科「グローバル」など特色ある教育活動をととして、幅広い視野と深い専門性を身につけ、将来国際社会で活躍できるグローバル・リーダーの育成を目指す。

2 概要（実践）

(1) 「イノベーション探究Ⅰ・Ⅱ」（1・2年次1単位）

探究活動をととして課題解決型学習を身につけた。1年次は「地域再発見プログラム」として、地元京都がもつ歴史的価値の再発見をおこなった。2年次は「グローバル・ジャスティスプログラム」として、価値観の対立するグローバルな課題について、探究活動をおこなった。

(2) 第2外国語（1・2年次1単位）

各言語1・2年とも週1時間の授業を1年間おこなった。1年生については各言語の音声・文字の習得から始めて、ペアワークやグループワークなどをととして、基礎的なコミュニケーション能力を育成した。2年生については1年次に身につけたコミュニケーション能力をさらに高める取組を中心に行った。

(3) 学校設定教科「英語」

4技能を総合的に高める「総合英語（1年次）」、「英語理解（2年次）」および自らの考えを英語で表現する能力を伸ばす「グローバル・コミュニケーションⅠ（1年次）、Ⅱ（2年次）」をおこなった。特に「グローバル・コミュニケーションⅠ」ではプレゼンテーションやディスカッションを取り入れ、「グローバル・コミュニケーションⅡ」ではディベートを取り入れるなど、英語による発信能力を育成した。

(4) 海外研修

本校主催（SGH海外研修、グローバル・セミナー）、京都府主催（グローバルチャレンジ・海外サテライト校事業、陝西省訪問プログラム）、文部科学省主催（日韓高校生交流（派遣）事業）などの海外研修にグローバル科生徒計44名が参加した。

3 成果と課題

言語教育については、特に第2外国語において英語圏以外の言語、文化に触れることで幅広い教養を身につける一助となった。また、昨年度に引き続き、韓国語履修生徒から文部科学省主催日韓高校生交流（派遣）事業に1名参加するなど、実際に現地に行き研修をおこなう流れもできてきた。一方で、授業が週1回となるため、前時の内容の継続性をいかに確保するかが課題である。

イ 学校設定教科「グローバル」における「グローバル・キャリアパス・プログラム」

1 ねらい

グローバル科の専門科目等において、民間企業等のグローバルな視座と知見に触れることによって、グローバル人材として求められる幅広い教養と深い専門性を身につける一助とする。

2 概要（実践）

(1) 協力企業 株式会社松栄堂

ア 実施日 平成31年1月29日（火）

イ 対象科目 「国語総合」

ウ 講師 畑 元章 氏（専務取締役）

エ 内容 古典文学作品とその中に出てくる「香」の意味を考えることによって、日本における「香文化」について学習をした。さらに日本の伝統文化を成果に広めていく視点に

ついて考察を行った。

(2) 協力企業 株式会社岡墨光堂

ア 実施日 平成31年2月23日(土)

イ 対象科目 「京都の風土・世界の風土」

ウ 講師 岡 岩太郎 氏(代表取締役)

エ 内容 伊藤若冲を取り上げ、芸術科と連携することにより、伊藤若冲の海外での活躍について考察を行った。また、そこからグローバル社会における文化的価値さらには日本の伝統文化を海外に広める視点について考察を行った。

(3) 協力企業 株式会社片岡製作所

ア 実施日 平成31年2月19日(火)

イ 対象科目 「物理G」

ウ 講師 豆野 和延 氏(研究開発本部開発部部长)、
林 佳佑 氏(研究開発本部開発部研究員)

エ 内容 日本におけるものづくりの技術的な変遷に関する講義を受けた。具体的に精巧な製品を観察することで、科学技術の進化やレーザー加工技術など、ものづくりに対する知識とこれからの物理の授業に関する視野を広げる機会を得た。

(4) 協力企業 株式会社ジェイアール西日本ホテル開発(ホテルグランヴィア京都)

ア 実施日 平成31年2月22日(金)

イ 対象科目 「グローバル・コミュニケーションⅡ」

ウ 講師 中本 陽子 氏

(カンパニー統括本部営業戦略部インバウンド推進グループ担当課長)

エ 内容 ホテルの業務説明、インバウンド戦略、京都のマーケット等ホテル業界として考えるべきことについて学習するとともに、実際のクレームやリクエストの対処方法を考えることにより、実践的な視点を養う機会を得た。

(5) 協力企業 京都青果合同株式会社

ア 実施日 平成30年12月19日(水)

イ 対象科目 「ソーシャル・インテリジェンス」

ウ 講師 内田 隆 氏(代表取締役社長)

エ 内容 流通にまつわる様々な知識や中央卸売市場で行われる仲卸やセリの様子、さらには食の大切さなどを学習することにより、流通に対する基本的な考え方を身につけた。

3 成果と課題

普段の学習ではとらえきれない専門的な知識や考え方を学習することで、より深い学びをとおり、グローバル・マインドを涵養することができた。次年度は、日常の授業との関連性をより密接にするため、年度当初から各教科が実施時期等を検討するとともに、講師と十分に打ち合わせを行った上で、より効果的な事前学習を行う。

平成 30 年度 京都府立鳥羽高等学校 第 1 回 S G H 運営指導委員会

1 日 時 平成 30 年 9 月 28 日 (金) 午後 1 時 30 分～午後 3 時 15 分

2 場 所 鳥羽高等学校 1 棟多目的教室

3 出席者

(1) 運営指導委員 三田康明氏、三谷宏治氏、Steven Herder 氏、北尾哲郎氏

(2) 府教育委員会 吉村要 (高校教育課首席総括指導主事)、前山雅宏 (高校教育課副課長)、
星野詠志 (高校教育課指導主事)、相築理穂 (高校教育課主事)

(3) 鳥羽高等学校 山埜茂彦 (校長)、橋長正樹 (副校長)、河村早苗 (副校長)、佐藤政史 (教諭)、
田中誠樹 (教諭)、片山哲也 (教諭)、ミューリ・ニコラス (教諭)、大泉幸寛 (教諭)、
宮崎雄史郎 (教諭)、花山正子 (事務員)

4 内 容

(1) 開会

(2) 教育委員会挨拶 吉村首席総括指導主事

(3) 校長挨拶 山埜校長

(4) 運営指導委員長選出

運営指導委員互選により、三田運営指導委員 (京都府国際センター常務理事) を運営指導委員長に選出した。

(5) 運営指導委員長挨拶 三田運営指導委員長

(6) 上半期の実施内容、成果と課題について 佐藤教諭、田中教諭

(7) 下半期の事業計画、実施方法について 佐藤教諭

(8) 生徒発表と質疑応答

ア S G H 韓国ソウル海外研修の成果発表 (日本語)

イ 学校設定科目「グローバル・コミュニケーション I」の取組 (Deep Kyoto) の発表 (英語)
(三谷委員)

・これまで何回か先輩からも発表を聞いてきたが、日本語の発表は滑らかな発表でとてもよかった。ただし、その滑らかさの半分は、日本語だからということもある。日本語は上手すぎて何を言っているかわからない。英語は下手だからシンプルなことしか言えない。日本語で情報はたくさんもらっているが、プレゼンテーションでは目的を明確にすることが大切。目的は何か、わかったこととわからないことは何か、今後どうするかという流れが欲しい。逆にそれさえわかればいい。御清聴されるのではなく、もっと問いかけをして、聞き手を巻き込むとよくなる。

(三田委員長)

・Deep Kyoto の発表は京都の伝統・文化に関するものだったが、どのような伝統・文化や原材料が現在の製品に入っているかを調べるのも面白い。お酒であれば、伏見の酒造メーカーが伏見の名水を使いつつ、麴については大学と連携しながら和食や洋食に合う配合について研究している。羊羹、西陣の帯、食器など、様々な伝統的なものの中にイノベーションが起きている。少し踏み込んで、世界とのつながりの中で京都の伝統・文化をとらえると面白いのではないかな。

(Herder 委員)

・自分自身は audience として、第 1 に何かを学びたいし、第 2 に何かを感じたい。日本語での発表については、内容は完璧に覚えられていてよかったが、話すスピードをゆっくりにして、アイコンタクトをすればさらによかった。

・英語の発表については、発音、イントネーション、テンポ、リーダーシップなど、発表者それぞれによさが見られた。寺町通りに関する発表だったが、なぜ寺町を選んだのかが知りたい。男子は th の発音をもっと練習すること。“Do you know?” のフレーズについても、定型で入れるのではなく、本当に質問がしたいのか考えること。ストーリーの組み立てや、冗談を入れながらプレゼンテーションした点はとてもすばらしかった。

(北尾委員)

- ・過去の生徒の発表と比べて、スタートの質がとても高かった。これまでの先生方の指導が大変浸透してきたと感じる。
- ・海外インターンシップで訪れた片岡製作所はレーザー技術で世界のトップを走っている。片岡製作所は京都大学など産学連携をとおして技術を伸ばしてきた会社である。海外インターンシップの後に、再び片岡製作所を訪れることができれば、これまでとは違った見方・発見があると思う。
- ・海外とのビジネスでは、人材や技術の流出が課題であり、これらをコントロールしていくこと、つまり、技術協力・技術開発と同時に技術を守る戦略が求められる。
- ・実際に韓国に行って、ハンヨン高校生と交流し、日本を好きな人々を身近に感じられたことはよい経験である。
- ・寺町に関する英語の発表については、とてもわかりやすかった。自分たちの世代は電柱と電線があるのが当たり前と思っていたが、京都の景観を守る上で新しい取組が必要である。
- ・三田委員長のコメントで Dari K さんが新たなチョコレートを作っているお話があった。日東薬品工業では「乳酸菌ショコラ」をロッテと共同開発しているが、「お菓子は体にいい」というコンセプトで作っている。京都の伝統的な和菓子に健康志向を加味するというアイデアはとてもいいと感じた。

(9) 研究協議

(三谷委員)

- ・SGHの初年度からの4年次の流れでいうと、よくここまで来たなと本当に思う。最初は自信のない中やっていたと思うが、方法論にしても、個々の取組をつなげて1つのパターンができてきた。
- ・課題は2つある。1つ目は英語力の育成。数値目標を立てるのはよいが、今の伸び率から言えば、達成できる根拠がわかりにくい。2つめは企業連携のあり方。順天高校では160社を3日間招いて各教室においてSGHの取組を行う。また、生徒たちが自分たちで企業を招待する交渉を行い、運営まで行っている高校もある。段階的にはあるが、生徒たちが主体的に交渉・運営する取組を増やしてはどうか。

(Herder 委員)

- ・英語教育のアイデアとして、Zoom や Skype などオンラインで英語を使う場面を増やしてはどうか。鳥羽高校の生徒が代表として入り、この仕組みを真似して、自分たちでネットワークを作ってみてはどうか。
- ・現在、教育における impact、何が生徒のやる気を引き起こすかに関する本を読んでいる。3つの段階があり、1番低いのが宿題、真ん中が先生の教え方である。1番高い impact は2つある。1つ目は生徒の自分に対する期待。生徒が自分自身に期待できるように指導する。2つ目は先生たちがチームを作って、同じメッセージを繰り返し生徒たちに伝えること。教職員間で改めて話し合い、生徒たちに何を伝えたいのか決めるのもよい。

(三谷委員)

- ・本日の説明を聞いていると、生徒たちが最も刺激を受けたのは、卒業生との交流だと思う。私の母校では、年に1回、卒業生のある学年が3000人くらい参加する同窓会の運営を担当する。そのときに、卒業生が高校の教室を使って在校生との交流会を開催する。鳥羽高校も卒業生の力を借りる場面をもっと増やしてもよい。

(北尾委員)

- ・先生方も意欲的に多くのプログラムをされているので、本当に大変だと感じる。先生方にももう少し時間的な余裕を持っていただきたい。生徒たちにとって大切なのは自分で「気づく」ということ。それがないと学習意欲も好奇心もわからない。難しいけれども、一方通行で教えるのではなく、生徒たちに自分たちで気づかせる時間が欲しいし、これがあると語学も学習内容も身につくのではないかな。

(三田委員長)

- ・英語のスキルやチームで仕事をするために必要な力を育てるために、グローバルベンチャーコンテストなど校外のビジネスプランコンテストに出場するのもよい。5月に日本と世界の大学生が参加するコンテストを開催したが、日本の大学生は予選で落ちてしまった。日本の大学生はアイデア・フラッシュのレベルだが、中国の大学生は、知的財産担当やマーケット担当などチームで役割分担を決めつつ、エビデンスまで整えてビジネスプランを作成する。日本人は多様性を踏まえて横断的にチームを作るのに慣れていない。グローバルなコンテストに参加させながら生徒の視野を広げてみてはどうか。
- ・コンテストに参加した大学生を見ていると、やはり好きなことにはものすごく熱心に打ち込んでいた。英語でのプレゼンテーションなので、どうしたら伝わるかを一生懸命考えていた。高校生の英語についても、モチベーションをいかに育てるかが大切だと思う。
- ・京都府国際センターでは、留学生と企業の交流会を開催している。東京、名古屋や海外に就職した留学生が京都に戻ってきて、就職活動についてのアドバイスをしている。先輩が後輩に、自分の体験を踏まえながら自分の言葉で教えるというのは後輩にとって説得力がある。
- ・実は、京都府国際センターから鳥羽高校の定時制に、たくさんの外国の方を受け入れていただいている。同じ地域や学校の中で学んでいる様々な文化的背景を持つ人々と交流するのもよい。

(10) 閉会

5 運営指導委員の指導・助言を受けた取組

S G H事業の改善についてまとめ、全校で情報を共有し、下半期の取組を行った。

(1) <研究開発単位Ⅰ>：総合的な学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」

- ・これまでの海外・国内の大学生や高校生との協働学習に加えて、卒業生や中学生との協働学習を実施し、多様な価値観に触れながら課題研究が行える機会を増やす。
- ・生徒たちが主体性と高いモチベーションを持って課題研究に取り組むことができるように、適切なフィードバックを行っていく。

(2) <研究開発単位Ⅲ>：新しい視座と高い言語能力を確立する戦略群

- ・英語4技能検定の取得状況について学科別・技能別に分析を行い、B2～B1レベルの取得生徒増加に向けた授業改善を行う。
- ・オンラインによる外国語学習や課題研究の推進に向けて、情報収集を行うとともに、次年度に向けた実施計画を策定する。

(3) <研究開発単位Ⅳ>：鳥羽の学びネットワークを活用したリベラルアーツ教育の研究開発

- ・より多くの本校生徒が外国人生徒との協働学習することを可能とするグローバルな学習環境整備に向けた情報収集を行い、次年度に向けた実施計画を策定する。

平成 30 年度 京都府立鳥羽高等学校 第 2 回 S G H 運営指導委員会

1 日 時 平成 31 年 2 月 13 日 (水) 午後 1 時 30 分～午後 3 時 15 分

2 場 所 鳥羽高等学校 1 棟多目的教室

3 出席者

(1) 運営指導委員 三田康明氏、三谷宏治氏、Steven Herder 氏、北尾哲郎氏

(2) 府教育委員会 立久井聡 (指導部理事)、前山雅宏 (高校教育課副課長)、
荻野真悟 (高校教育課指導主事)、相築理穂 (高校教育課主事)

(3) 鳥羽高等学校 山埜茂彦 (校長)、橋長正樹 (副校長)、河村早苗 (副校長)、佐藤政史 (教諭)、
田中誠樹 (教諭)、片山哲也 (教諭)、ミューリ・ニコラス (教諭)、大泉幸寛 (教諭)、
宮崎雄史郎 (教諭)、花山正子 (事務員)

4 内 容

(1) 開会

(2) 教育委員会挨拶 立久井指導部理事

(3) 校長挨拶 山埜校長

(4) 下半期の実施内容、成果と課題について 佐藤教諭

(5) 次年度の事業計画、実施方法について 佐藤教諭

(6) 生徒発表と質疑応答

ア S G H台湾海外研修の成果発表 (英語)

イ 総合的な学習の時間「イノベーション探究Ⅱ」の課題研究ポスター発表 (日本語)

(三谷委員)

- ・話には流れというものがある。S G H台湾海外研修の発表は中小企業をいかに強くしていくかという内容であったが、最後にオチがあってよかった。話の流れについては、正解がどこにあるかはわからないが、自分たちがどこに課題を感じているかを最初に示してから解決法について話してもよいと思う。例えば、魅力的な中小企業があり、それを我々が伝えていかなければならない、今それを紹介しましょう、という流れもでもよい。

(Herder 委員)

- ・よい発表だった。S G Hが始まった 4 年前とは全然違う世界だと感じた。自信を持ってみんな英語を話していた。聞き手全員の目を見て話すとさらによくなる。口を大きく開いて発音をはっきりする。another や the などの th の発音をさらに練習するとよい。

(北尾委員)

- ・Herder 先生と話していたのだが、4 年前と同じ生徒が話している訳ではないが、S G H 4 年間で受け継がれてきたものを感じた。自分たちの言葉として英語を話していることが素晴らしい。大企業がグローバル企業であるという印象を持つ人が多い中で、異なる見方を示したのがよかった。発表の中にあった株式会社片岡製作所と私たちの日東薬品工業株式会社は規模が同じくらいだが、この規模の会社で海外と関係のない企業はない。こうした中で働くには、語学力だけではなく、仕事をきちんとできる能力が求められる。単に英語が話せることがグローバルなのではなく、自分の気持ちをコミュニケーションをとおして伝えられることが一番大切。生徒の皆さんの発表を聞き、相手に伝わる表現の仕方を非常に勉強していると感心した。
- ・私が所属する一般財団法人京都経済同友会は NPO 法人のグローバル人材開発センターと連携し、グローバル人材の育成に取り組んでいる。東京や大阪の企業だけではなく、京都の企業に就職することで海外とのやり取りができることをぜひ知って欲しい。

(三田委員長)

- ・グローバル企業とは何か定義するのは難しい。企業の規模や外国人社員数からだけではグローバル企業として定義できない。様々な異なる文化的背景を持つ人が力を発揮し、多様性を強みとして新たな商品やソフトシステムなどイノベーションを持続的に生み出すことができることもグローバル企業としての指標の一つとなる。京都だけでは市場規模が限られているので、

もっと海外の成長市場に目を向けることが必要。また、新たに改正入管法が本年4月から施行され、外国人労働者の数が今後益々増えていく。外国の文化や価値観、考え方などを知ることとおして、彼らとどう向かい合うか、自分たちが目指すキャリア像についても考えて欲しい。

(三谷委員)

- ・移民問題の課題研究を行うにあたり、移民を多く受け入れているドイツを選んだのはよい。こうした最高の事例から学ぶことを、ベスト・プラクティスから学ぶという。日本の中にもベスト・プラクティスがないかを探してはどうか。多くの外国人労働者を受け入れている埼玉県や愛知県の豊田市などの自治体の事例もある。

(北尾委員)

- ・「移民のミライ」という難しいが素晴らしいテーマ、これから我々が取り組むべきテーマを選んだことを褒めてあげたい。移民の労働問題だけでなく、その子供たちへの教育に目を向けているのもよい。移民の子供たちと小さいころから一緒に学ぶ環境作りが大切。日本人はどこに行っても教育熱心であり、この日本のよさを活かして、海外から来た方にも教育費を無償化して教育の機会を提供する提案もできる。

(Herder 委員)

- ・発表のスタイルをみると、生徒たちがプロフェッショナルに見えた。まるでニュースキャスターのようだった。日本語と英語の発表のスタイルの違いに着目してみるとよい。3人で発表する際は、発表者以外も役割を考えて参加するともっとよくなる。

(三田委員長)

- ・京都府国際センターでは産学公の関係機関とも連携・共催し、オール京都の体制で、5月中旬に海外の大学生も参加する「ベンチャー・ビジネスコンテスト」を開催する予定。約30ヶ国から大学生が集まり、プレゼン発表や質疑応答なども全て英語で行う。海外の学生は発表するチーム内で、それぞれ知財・資金調達・コンプライアンス・社会実装化など担当を決め、役割分担して、コンテストに臨んでくるが、国内外の大学生のプレゼンが対比できて中々面白い。どうしたら相手に共感や納得をしてもらえるか等をよく考えている。様々な発見があると思うので、是非とも、貴校の生徒や先生方も見に来て欲しい。

(7) 研究協議

(三谷委員)

- ・英語力の育成には依然として課題がある。これまでの取組を着実に進めるのはよいが、来年度以降どの方向性を目指すのかをはっきりさせた方がよい。トップ10のWWL（ワールド・ワイド・ラーニング）を目指すのか、グローバル型を目指すのか。WWLを目指すならば、英語力の指標となる数値を10倍くらい上げなければならない。英語については、できればプレッシャーをかけずに楽しく学ぶのがよいし、必要になれば生徒はみんな自分で学ぶ。グローバル型を目指すのもすばらしい考えであり、私はそれでもよいと思う。

(三田委員長)

- ・京都府国際センターで留学生の就職活動への取組を支援するため、自分を知るための様々なカウンセリングにも応じている。また、日本人でも、留学経験や海外ボランティア経験があっても、人によっては、残念ながら必ずしも、そうした経験や語学力と仕事とがうまく結びつかない方もいる。経済産業省で提唱されている「社会人基礎力」の有無が評価を左右すると思う。職業人としてグローバルな舞台で活躍しようとは思っているが、英語はできるが、一番大切な「人間力」や「求心力」に欠ける場合は、組織の中で、その能力が上手く発揮できず、自己評価と上司・同僚評価とが乖離してしまうという話をしばしば企業関係者からも聞く。英語等の語学能力、専門的スキル以前に、そのベースとなる人間的な基礎能力については、高校時代から積み上がっていくものだと思うが、この点についてはどうか。

(北尾委員)

- ・様々な採用試験をみていると、高校時代・大学時代をとおして、英語の試験で高い点数を取ることが目的となっており、英語が社会に出てから仕事をするための手段になっていない人がい

る。社会で一緒に仕事をするにあたり、協調性や様々な仕事の中で優先順位をつける能力など、社会人としての基礎的な力がより重要である。

- ・英語の点数が様々な入試や就職試験において重点が置かれすぎており、英語はできるが実際の仕事でつまづいてしまう方もかなりいる。本日の生徒たちの発表を見て、鳥羽高校は英語がなぜ必要なのかを生徒に教育しているのですね、うれしく思う。言葉というのはコミュニケーションの手段であり、それを通じて何をするかが大切であることを今後も教えて欲しい。英語さえ勉強していれば人生うまくいくと考えると社会に出てから大変である。仕事をするためには語学が必要であることや、自分が将来どのような人になり、どのような仕事に就きたいかを考えることがより大切。

(三田委員長)

- ・京都府国際センターにも外国人職員がいるが、日本人と異なる考え方や価値観、生活文化などの多様性に着目し、そこから違いの背景を学ぶということがこれからの多文化共生では重要となる。多様性の中で個人の能力も引き出される。様々な国からの交換留学生を受入れたり、定時制で学ぶ外国人生徒から話を聞くことや交流することも新たな気づきのヒントとなる。海外研修に行くことも大事だが、同じ校舎で学ぶ身近な外国人生徒が何故日本に来て、何を思い、自らの将来をどのように切り拓こうと考えているのか、彼らから話を聞く機会を持つと考え方の幅も広がるのではないかな。

(Herder 委員)

- ・英語力の向上には時間がかかる。教員の力だけではなく、生徒のモチベーションを上げることが最も効果的である。
- ・リーダーシップを育てることも大切。Knowing, Being, Doing の3つの観点がある。リーダーシップとは何かを知り、周囲の人々とコミュニケーションを取り、実際に何かをやってみる。京都ノートルダム女子大学の中で、ペットボトルを使わない取組を提案している。ニューヨークでは、学生が水筒を作る会社とコラボレーションし、30万人に水筒を配布する取組を行っている。生徒たちが情熱を持ってリーダーシップを発揮できるプロジェクトを提示したり、紹介してはどうか。

(三谷委員)

- ・調査によると、企業が大学生に最も求める力は論理的思考力であり、この傾向は続いている。知識など他の項目と比較すると、理系にも当てはまることではあるが、特に文系に対しては圧倒的に論理的思考力が求められている。
- ・我々が鳥羽高校のSGHの取組でやってきたことは実践的な論理的思考力の強化であった。問題を論理的に捉える、ちゃんと質問をする、それに対して答えを導いていく。それに加えて、実際の現場でさらに必要なのが行動力であり、今までやってきたことはまさにこれらである。今回の生徒発表でも、様々な人々に生徒が直接聞きに行くなど、行動力が見られた。3年前はアンケートをとっても、机上の仮説を全員にアンケートをとって終わりといった具合であったが、現在は生徒たちに経験者に話を直接聴くなどの行動力がついたと感じる。こういった実践的な論理的思考力があると、コミュニケーションもとれるし、前に進むこともできる。
- ・論理的思考力と行動力の育成に向けて我々が取り組んできたことは間違いではないし、欠けているものもない。後は、これからこの2つの力を持つ生徒をどれだけの比率に高められるかが一番のチャレンジとすべきではないかな。

(三田委員長)

- ・論理的思考力と行動力の育成については、設定した課題の背景について考え、目標や成果指標を定め、実際に行動し、達成していく経験を積ませることが大切。目的意識を持たせることも重要で、目的意識があれば語学力も必ず向上する。こうした取組を行うために、情緒に流されず、きちんと物事を論理的に考え、行動に繋げる自律的な基礎力を感受性の豊かな高校生時代にしっかりと身につけることが将来に繋がるのではないかな。その上で、グローバル、ローカルなど、貴校の進む方向性を吟味し、次年度、更にその先のステップへと進んでいただきたい。

(8) 閉会

5 運営指導委員の指導・助言を受けた取組

S G H事業の改善についてまとめ、全校で情報を共有し、次年度の取組を行う。

(1) <研究開発単位Ⅰ>：総合的な学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」

- ・S G H指定5年次を迎えるにあたり、今後の方向性を明確にしながら、持続可能な探究学習の在り方について検討を行う。

(2) <研究開発単位Ⅱ>：グローバル・コンピテンシーを高める教科横断的科目群

- ・グローバル社会で活躍するために必要とされるコンピテンシーとして、語学力に加えて、コミュニケーション能力等の社会人基礎力を育成するために、グローバル・キャリアパス・プログラムによる企業連携の取組を推進する。

(3) <研究開発単位Ⅲ>：新しい視座と高い言語能力を確立する戦略群

- ・アジア高校生架け橋プロジェクトをとおして2名の留学生を受け入れ、より多くの生徒が海外の高校生と平常的に英語を用いてコミュニケーションや探究学習を行える環境を整備し、新しい視座と高い言語能力を身につけさせる。

(4) <研究開発単位Ⅳ>：鳥羽の学びネットワークを活用したリベラルアーツ教育の研究開発

- ・京都府国際センターの取組や海外大学生のビジネスプランコンテストにおける取組を参考にしながら、本校生徒に対して校外のコンテストへの参加を積極的に促す。

A：平成30年度鳥羽高校SGH イノベーション探究研究グループ 業務名、業務内容、担当者一覧

目的：総合的な学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」の研究開発

■ 主任1名（宮崎雄）、副主任1名（田中誠）

項目	学年	組	領域・内容	主担当	副担当	授業担当者	実施内容
A	①	1組（スポーツ総合専攻） 2組（文科スポーツ）	健康・スポーツ領域	柏木	三浦敏	西垣智、宮崎か、柏木、三浦敏	課題研究発表会（3学期）等
	②	3～6組（理数人文）	伝統・文化領域	越野	奥村、増田	越野、二澤、中山、奥村、増田、高木、高田、矢野	別紙参照
	③	7・8組（グローバル科）	イノベーション探究Ⅰ	宮崎雄	大泉、桂	大泉、宮崎雄、渡邊、桂	別紙参照
	④	1組（スポーツ総合専攻） 2組（文科スポーツ）	健康・スポーツ領域	松下	植垣	松下、大和、植垣、宮本	課題研究発表会（3学期）等
	⑤	3～6組（理数人文）	地域研究領域	長谷川	高木、高田	川合典、沖、長谷川、村本、明田、高木、高田、矢野	別紙参照
	⑥	7・8組（グローバル科）	イノベーション探究Ⅱ	田中誠	渋谷、竹林	田中誠、宇川、渋谷、竹林	別紙参照
	⑦	6～8組（理数人文G）	イノベーション探究Ⅲ	竹林	北尾	片山、北尾、阪下、佐藤、竹林、ミューリ	別紙参照

■ 共通業務

各取組内容に応じて、下記の業務を行う。

- ①連携先・訪問先との日程調整・参加申込等、②事前準備・生徒への事前指導、③当日の運営・引率、④ICT活用、⑤実施記録（HP原稿・写真）、⑥実施後の生徒アンケートのまとめ、⑦SGH事業研究発表会等の発表指導、⑧研究開発実施報告書の作成、⑨生徒の成果物集の作成

■ 教科担当の中から、主担当・副担当を決定する。

■ 主任・副主任が調整を行い、事業ごとに担当から主担当を定めて各事業を実施する。

B：平成30年度鳥羽高校SGH グローバル・コンピテンシー育成研究グループ 科目名、業務内容、担当者一覧

目的：グローバル教育に向けた新たな教科横断的科目に関する研究開発（学校設定科目の研究開発、教育効果の検証・評価等）

■ 主任1名（桂）、副主任1名（渡邊）

項目	科目名	業務内容	主担当	授業担当者
B	① 「グローバル・コミュニケーションⅠ」	・特色ある教育活動の実施 ・評価、学力分析 ・実施記録（HP原稿、写真） ・授業等におけるTAの依頼、活用 ・研究開発実施報告書の作成	桂	桂
	② 「グローバル・コミュニケーションⅡ」		ミューリ	ミューリ
	③ 「グローバル・コミュニケーションⅢ」		ミューリ	ミューリ、片山
	④ 「ソーシャル・インテリジェンス」		渡邊	渡邊、高田、矢野、植垣、田村
	⑤ 「京都の風土・世界の風土」		青木	青木、田中誠、宮崎雄

■ 教科担当の中から、主担当を決定する。

■ 主任・副主任を中心に、他のグループと連携しながら事業を実施する。

C：平成30年度鳥羽高校SGH 鳥羽の学びネットワーク研究グループ 業務名、業務内容、担当者一覧

目的：「イノベーション探究ⅡⅢ」、学校設定科目（「グローバル・コミュニケーションⅡⅢ」、「ソーシャル・インテリジェンス」、「京都の風土・世界の風土」）の実施に向けた鳥羽の学びネットワークとの効果的な連携方法について研究開発

■ 主任1名 [C-1担当]（片山）、副主任1名 [C-2担当]（明田）

項目	時期	業務名	対象	業務内容	担当者	想定される担当者
C-1	① 7月	鳥羽グローバル・サミット	全学年	授業参加、KYOTOフィールドワーク、ホームステイ、ワークショップ等の実施に向けた補助及びTAの募集業務等	和田、大久保、山口、櫻井、深川	英語科1名
	② 7月	JICA関西ワークショップ	1・2年	JICA関西と連絡・調整の上、ワークショップを実施	井平、坂部	
	③ 6～10月	高校生ビジネスプラン・グランプリ	1・2年	日本政策金融公庫主催のコンテスト。申込、事前学習会2回、エントリーの補助	中藤、福井、宮崎か	

項目	時期	業務名	業務内容	担当者	想定される担当者
C-2	① 通年	海外外部機関との協働学習・交流会準備運営	海外の外部機関・高校生等が来校する際の受入準備・運営	金崎、大和、宮本	
	② 通年	各種コンテスト	英語スピーチコンテストなど校外の各種コンテストの広報、参加申込補助、参加状況・入賞状況の集計、研究開発実施報告書の作成	松本	
	③ 通年	中期留学等申請手続き・書類作成補助	中期留学（オーストラリア・カナダ）や「トビタテ！留学JAPAN」等の募集、選考、申請手続き、書類作成の補助	中山	
	④ 通年	海外研修参加者への健康調査	海外研修参加者への出発前の健康調査及び健康指導	鷺尾、河合雛	養護教諭等2名
	⑤ 通年	冷泉家時雨亭文庫による作歌指導・歌会	作歌指導、春の歌会・秋の歌会の企画・運営	金子、笹井、東中	国語科2名
	⑥ 通年	伝統・文化事業	茶道・華道等の伝統・文化事業の企画・運営	矢野、竹下、田中喜	企画推進部1名
	⑦ 通年	SGHの取組の進路指導への活用	4技能型英語検定の取得状況・コンテストや校外課題研究発表会の参加状況等のSGH事業の取組をデータベース化、進路指導への活用	鈴木	進路指導部1名

■ 共通業務

各取組内容に応じて、下記の業務を行う。

- ①連携先・訪問先との日程調整・参加申込、②事前準備・生徒への事前指導、③当日の運営・引率、④実施記録（HP原稿・写真）、⑤実施後の生徒アンケートのまとめ、⑥成果発表会準備、⑦研究開発実施報告書の作成（A4各1枚程度）

■ 主任・副主任が調整を行い、事業ごとに担当から主担当を定めて各事業を実施する。

D：平成30年度鳥羽高校SGH リベラルアーツ教育研究グループ 業務名、業務内容、担当者一覧

目的：アクティブ・ラーニング等による既存の教育活動における学びの質や深まりを強化

■ 主任1名 [D-1担当]（宇川）、副主任1名 [D-2担当]（村本）

項目	業務名		業務内容	担当者	想定される担当者
D-1	アクティブ・ラーニングの研究開発	7月	公開授業の企画・調整	沖、山名、南條	
		11月	研究授業の企画・調整	山本、齋藤、南條	
		公開・研究授業の企画・調整、アンケートの実施、研究開発実施報告書の作成（公開授業当日の運営については、教務部と連携する）			
		教職員研修の企画・調整			
			SGH事業に関する教職員研修の企画・立案、準備、実施、アンケートの実施、研究開発実施報告書の作成	川合典、二澤	

項目	業務名		業務内容	担当者	想定される担当者
D-2	①	実用英語技能検定（英検）・GTEC・TEAPの案内、実施準備、運営、集計	英検・GTEC・TEAPの受検案内、実施準備、運営、受検・取得状況の集計、研究開発実施報告書の作成	秋山、阪下、藤浦	英語科1名
	②	1月 グローバル思考力コンテスト	実施要項・問題作成、印刷、採点、講評、研究開発実施報告書の作成	水谷、藤田、岩本、鐵尾、西垣淳、福島、山田、永井	
	③	SGH事業に関連した図書の整備・管理	「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」等の課題研究や教養力向上を目的とした図書（日本語・英語）の整備・管理	小泉	図書部1名
	④	特別時間割の作成・時間割変更	SGH事業実施に必要とされる特別時間割の作成・時間割変更	西垣智	教務部1名

■ 主任・副主任が調整を行い、事業ごとに担当から主担当を定めて各事業を実施する。

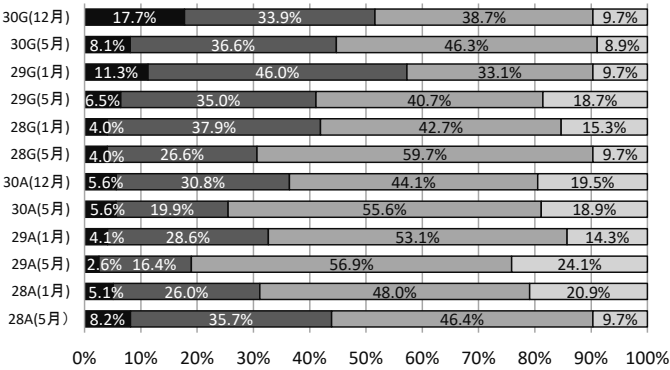
平成28年度入学生（現3年生）SGH事業に関するアンケート結果

■実施時期	平成28年度5月	平成28年度1月	平成29年度5月	平成29年度1月	平成30年度5月	平成30年度12月
■対 象	1 年次全員（322名）	2 年次全員（321名）	3 年次全員（320名）			
	28年度5月 回答数（320名）	28年度1月 回答数（320名）				
	29年度5月 回答数（318名）	29年度1月 回答数（301名）				
	30年度5月 回答数（319名）	30年度12月 回答数（319名）				
■方 式	質問紙法（マークシート方式）					

G: 普通科G(SGH対象)
A: 普通科G以外(SGH対象以外)

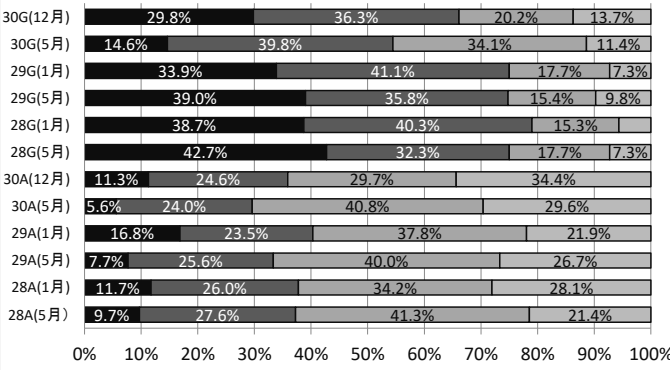
1 自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組んでいる。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



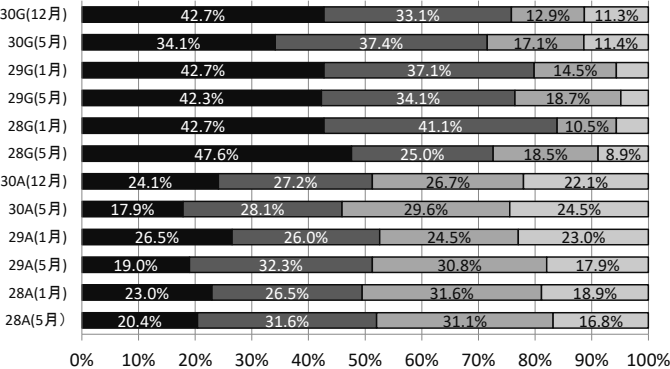
2 高校生として、自主的に留学又は海外研修に行きたい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



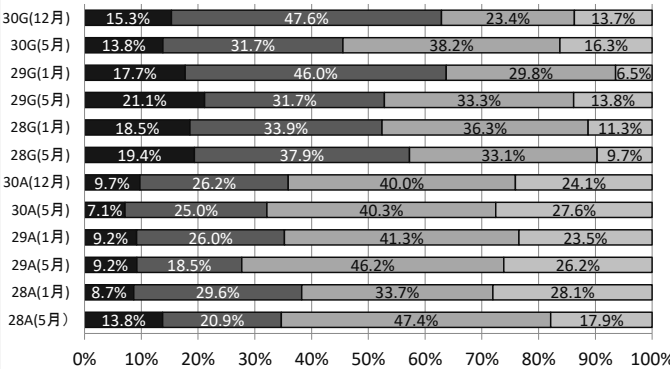
3 大学在学中に、留学又は海外研修に行きたい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



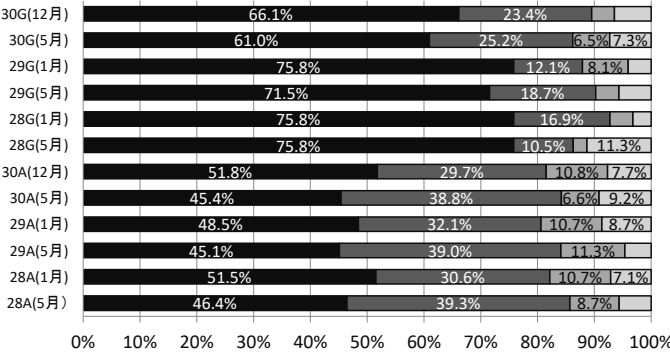
4 高校・大学卒業後に、海外で仕事をしたり、国際的に活躍したい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



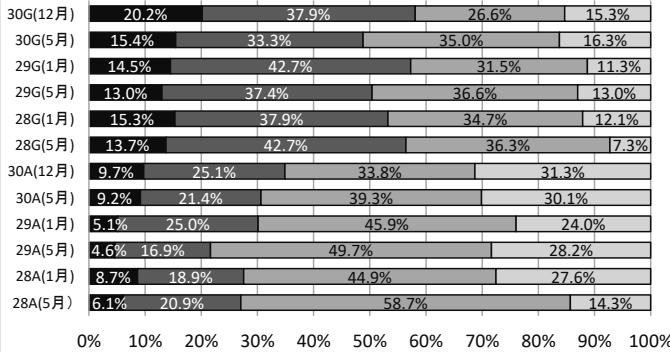
5 英語によるコミュニケーション能力を向上させたい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



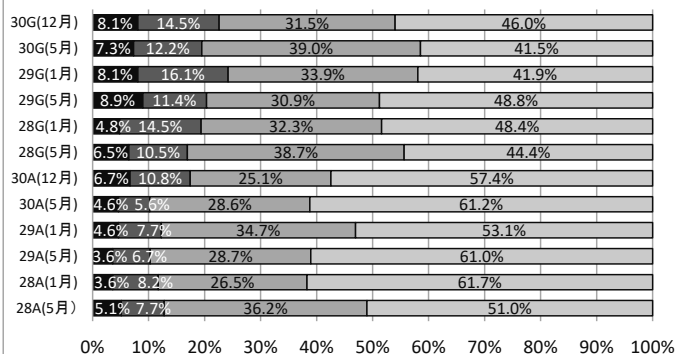
6 将来、国際化に重点を置く大学へ進学したい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



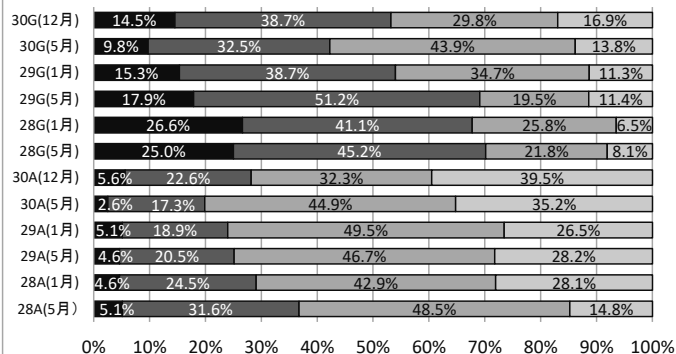
7 将来、できれば海外の大学へ進学したい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



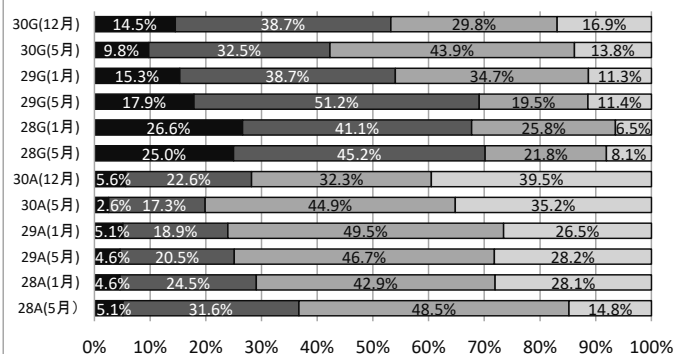
8 高校在学中に、課題研究に関する海外研修に参加したい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



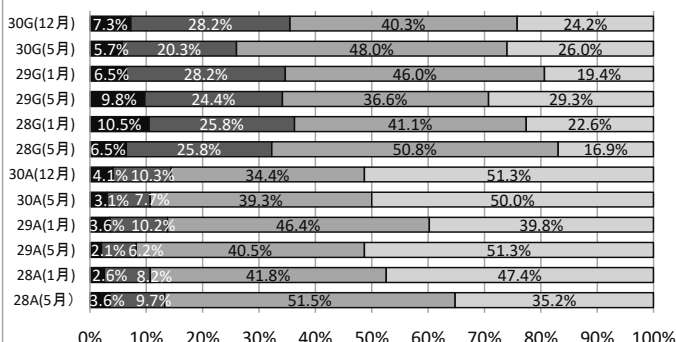
9 高校在学中に、課題研究に関する国内研修に参加したい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



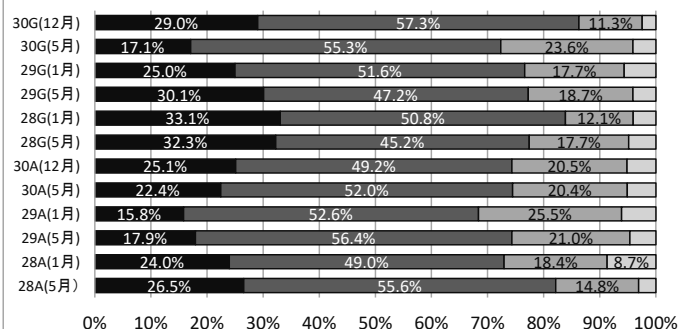
10 高校在学中に、グローバルな社会やビジネス課題に関する国内外の大会に参加したい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



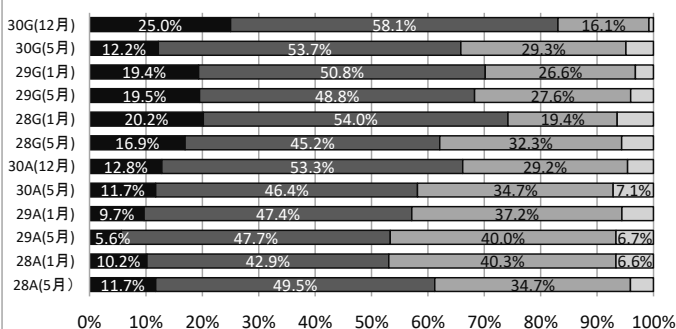
11 京都や世界に関するニュースについて興味・関心を持つことができる。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



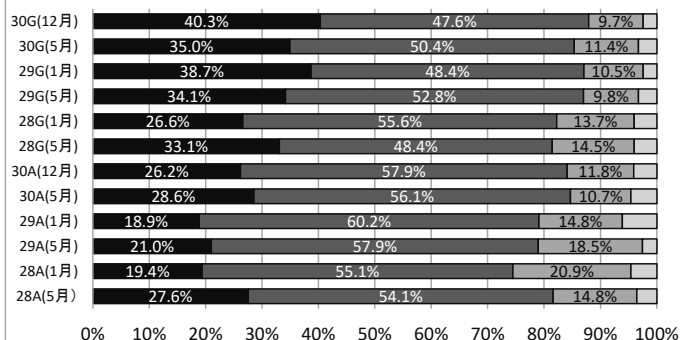
12 京都や世界の事柄について、それらの持つ新しい価値に気づくことができる。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



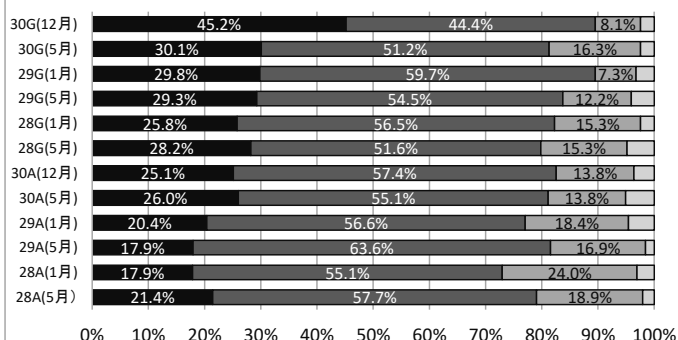
13 異なる価値観を持つ人とコミュニケーションをとることができる。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



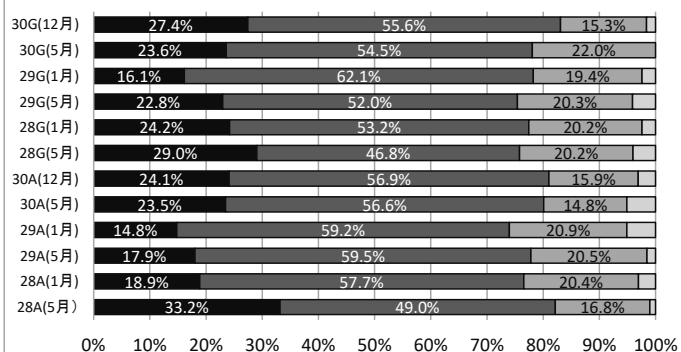
14 異なる価値観を持つ人と協働して課題に取り組むことができる。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



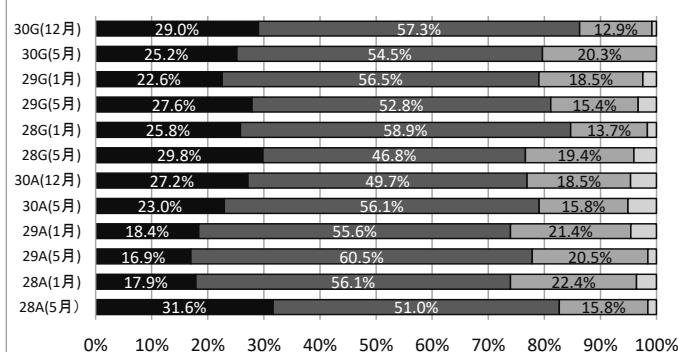
15 困難な課題に対して、積極的に挑戦することができる。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



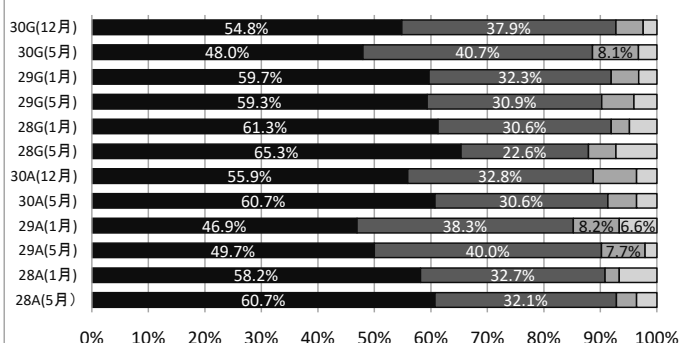
16 困難な課題に対して、あきらめずに粘り強く取り組むことができる。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



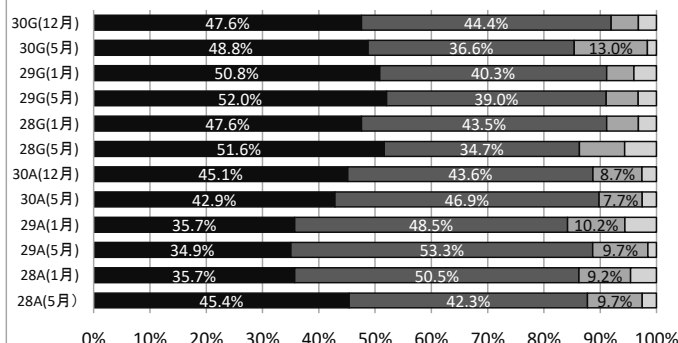
17 自分とは異なる価値観を持つ人が存在することを理解できる。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



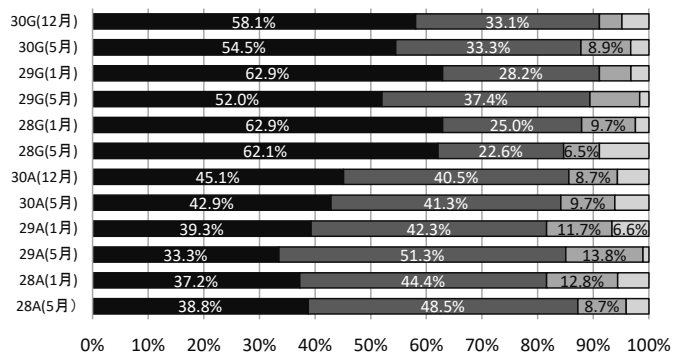
18 自分とは異なる価値観を受け入れることができる。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



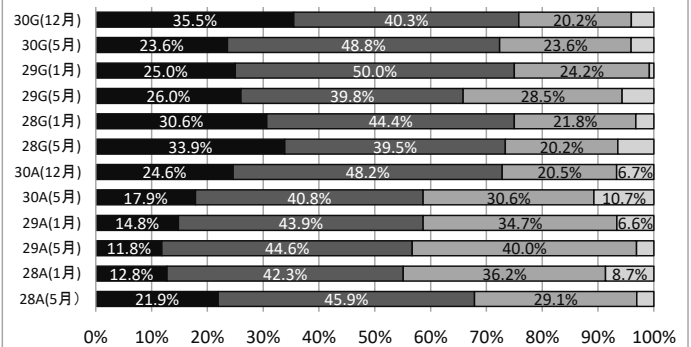
19 国際社会において、様々な分野に関する幅広い教養が必要だと思う。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



20 読書や様々な体験をととして、幅広い教養を身につけようとしている。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



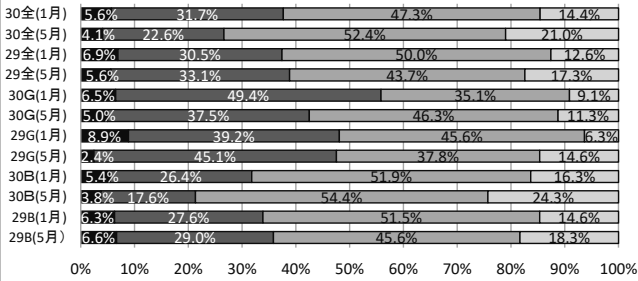
平成29年度入学生（現2年生）SGH事業に関するアンケート結果

■実施時期	平成29年度5月	平成29年度1月	平成30年度5月	平成30年度1月
■対 象	2年次全員（320名）	29年度5月 回答数（323名）	29年度1月 回答数（318名）	30年度5月 回答数（320名）
■方 式	質問紙法（マークシート方式）	30年度1月 回答数（316名）		

全:全体
G:グローバル科
B:グローバル科以外(SGH対象)

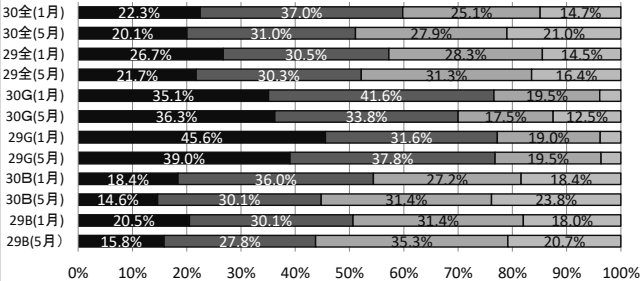
1 自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組んでいる。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない ■1思わない



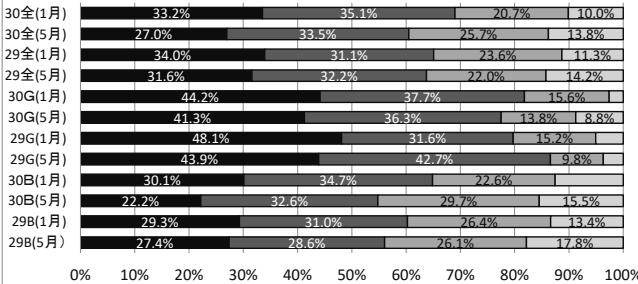
2 高校生として、自主的に留学又は海外研修に行きたい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない ■1思わない



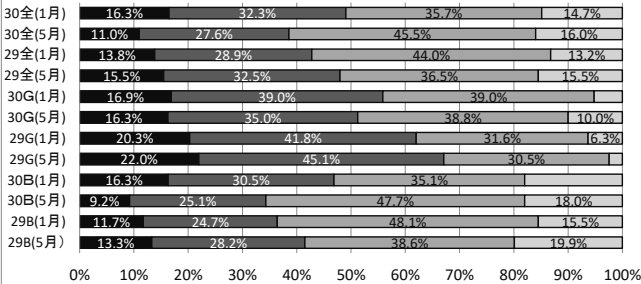
3 大学在学中に、留学又は海外研修に行きたい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない ■1思わない



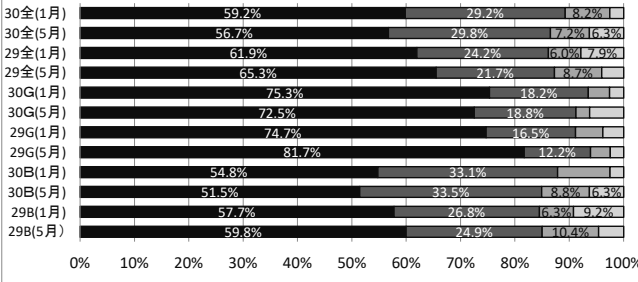
4 高校・大学卒業後に海外で仕事をしたり、国際的に活躍したい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない ■1思わない



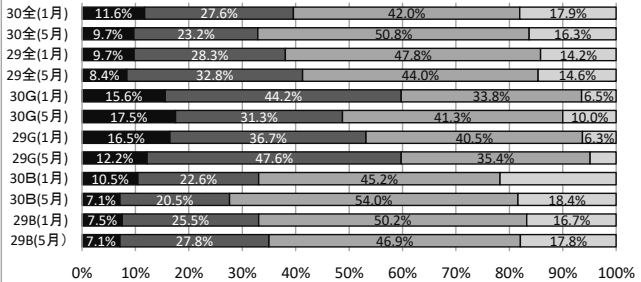
5 英語によるコミュニケーション能力を向上させたい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない ■1思わない



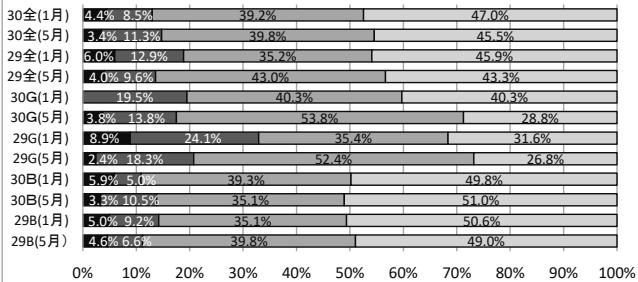
6 将来、国際化に重点を置く大学へ進学したい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない ■1思わない



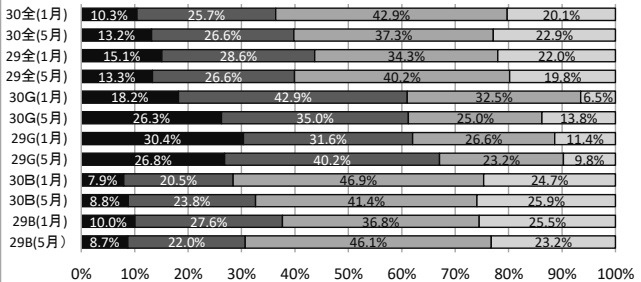
7 将来、できれば海外の大学へ進学したい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない ■1思わない



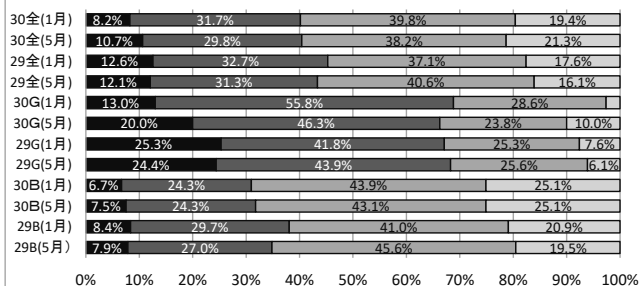
8 高校在学中に、課題研究に関する海外研修に参加したい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない ■1思わない



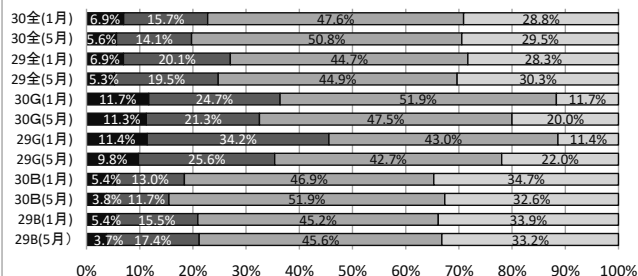
9 高校在学中に、課題研究に関する国内研修に参加したい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



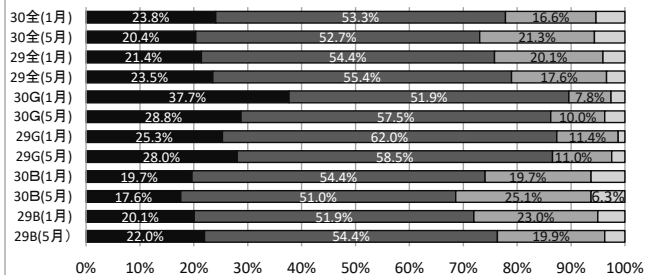
10 高校在学中に、グローバルな社会やビジネス課題に関する国内外の大会に参加したい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



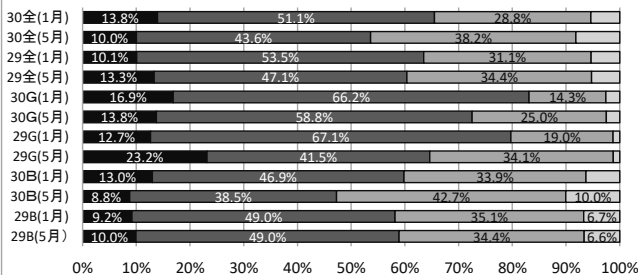
11 京都や世界に関するニュースについて興味・関心を持つことができる。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



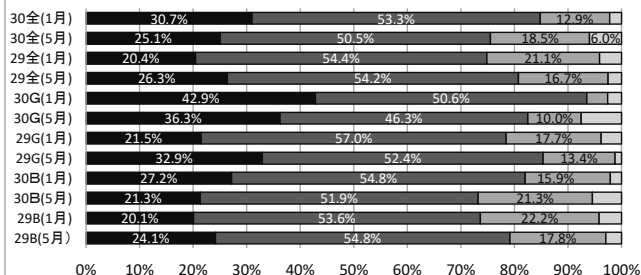
12 京都や世界の事柄について、それらの持つ新しい価値に気づくことができる。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



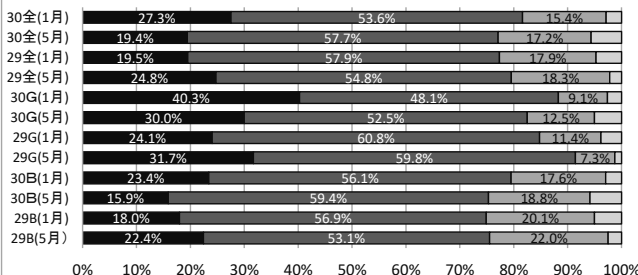
13 異なる価値観を持つ人とコミュニケーションをとることができる。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



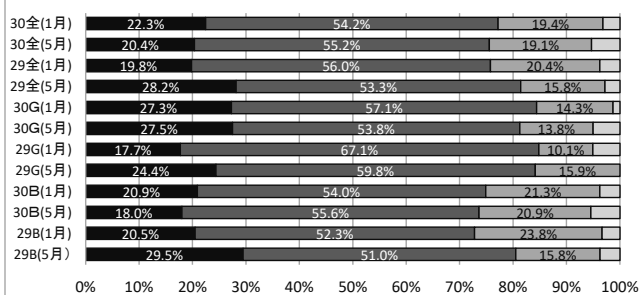
14 異なる価値観を持つ人と協働して課題に取り組むことができる。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



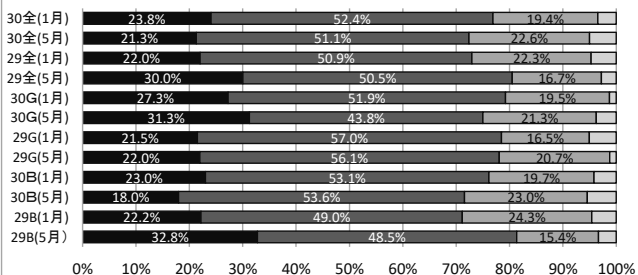
15 困難な課題に対して、積極的に挑戦することができる。

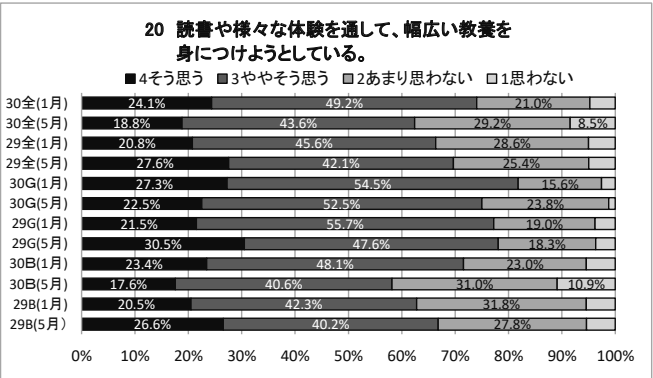
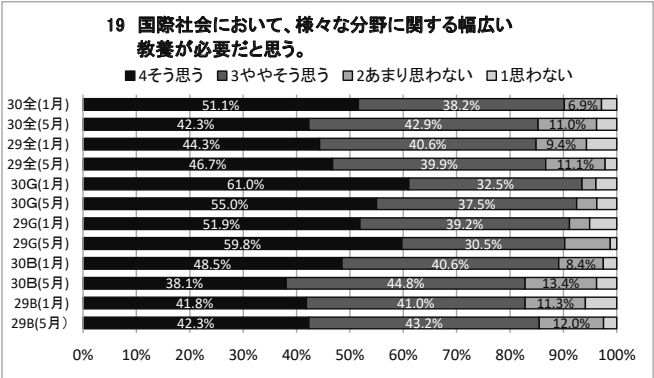
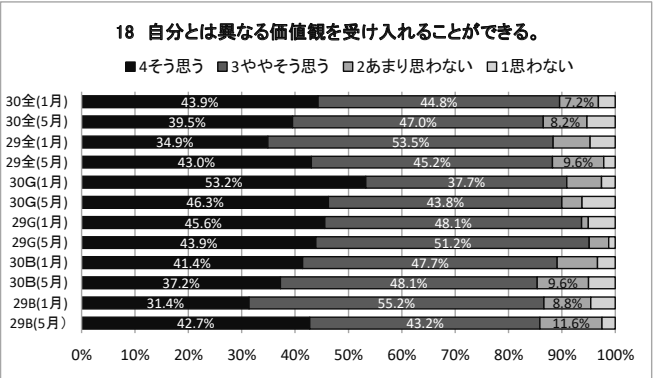
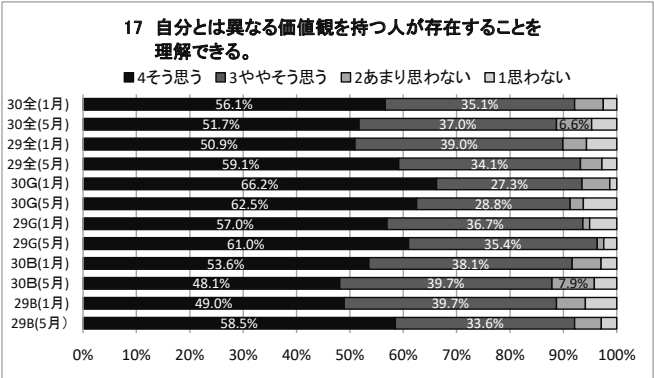
■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



16 困難な課題に対して、あきらめずに粘り強く取り組むことができる。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない





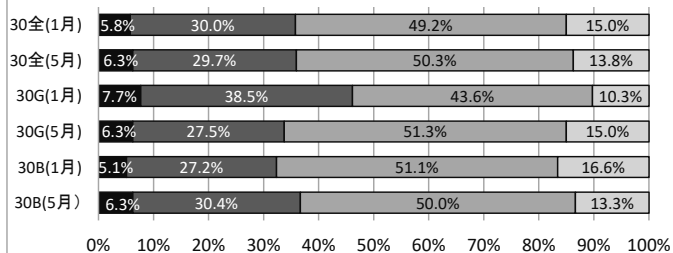
平成30年度入学生（現1年生）SGH事業に関するアンケート結果

■実施時期 平成30年度5月 平成30年度1月
 ■対 象 1年次全員（320名） 30年度1月 回答数（313名）
 ■方 式 質問紙法（マークシート方式）

全：全体
 G：グローバル科
 B：グローバル科以外(SGH対象)

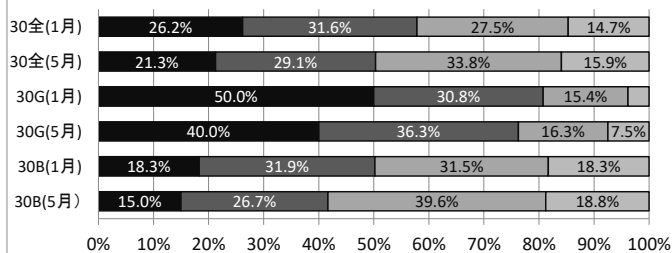
1 自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組んでいる。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



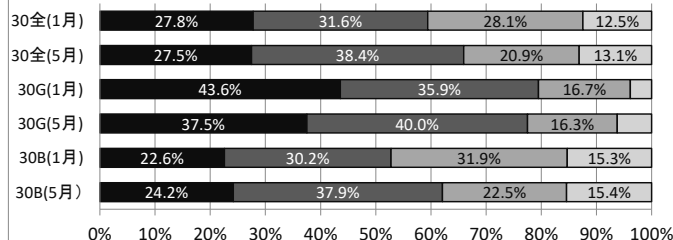
2 高校生として、自主的に留学又は海外研修に行きたい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



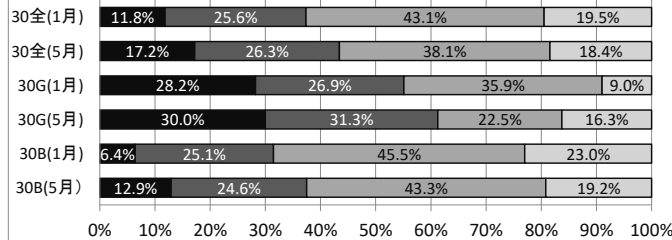
3 大学在学中に、留学又は海外研修に行きたい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



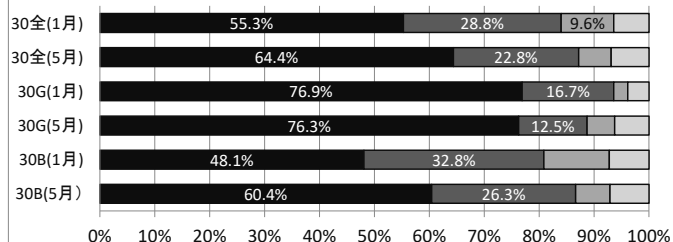
4 高校・大学卒業後に、海外で仕事をしたり、国際的に活躍したい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



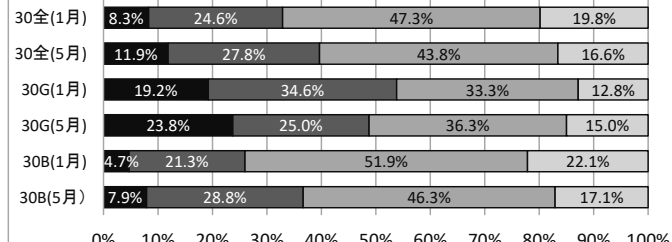
5 英語によるコミュニケーション能力を向上させたい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



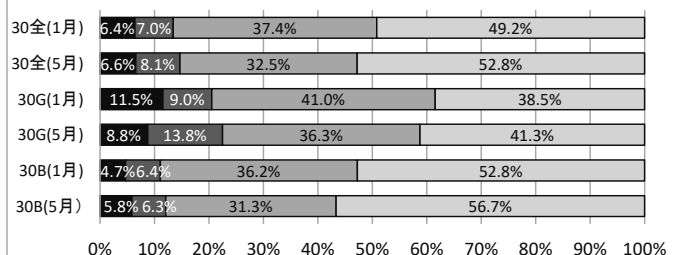
6 将来、国際化に重点を置く大学へ進学したい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



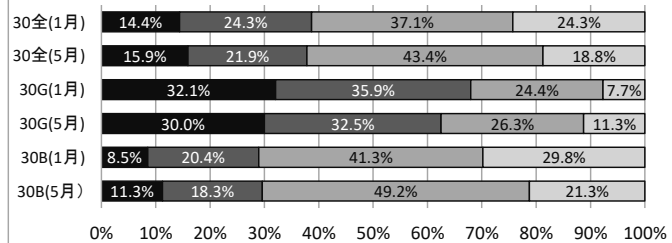
7 将来、できれば海外の大学へ進学したい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



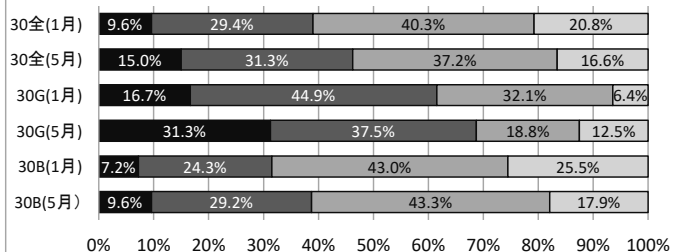
8 高校在学中に、課題研究に関する海外研修に参加したい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



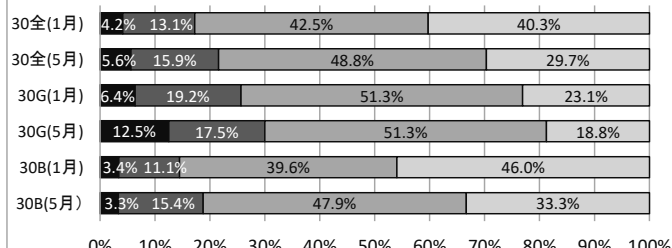
9 高校在学中に、課題研究に関する国内研修に参加したい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない

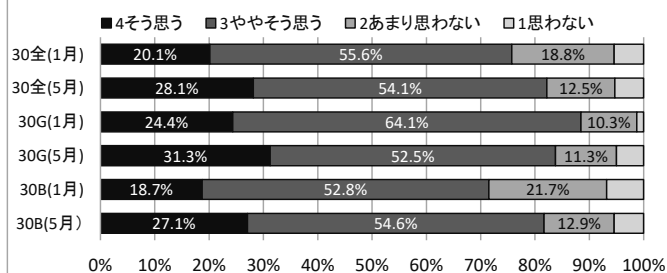


10 高校在学中に、グローバルな社会やビジネス課題に関する国内外の大会に参加したい。

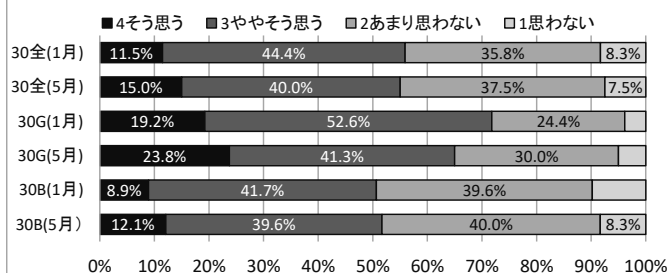
■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



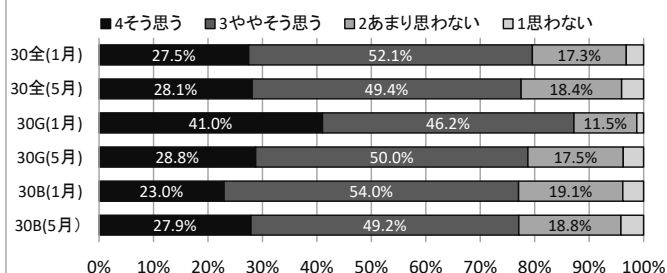
11 京都や世界に関するニュースについて興味・関心を持つことができる。



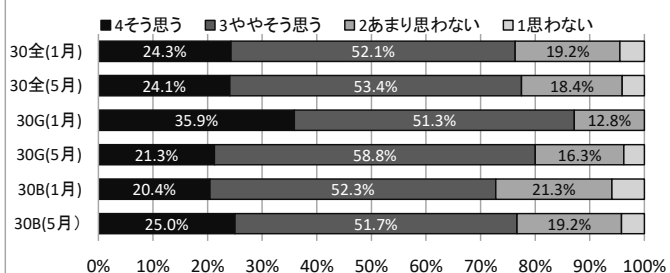
12 京都や世界の事柄について、それらの持つ新しい価値に気づくことができる。



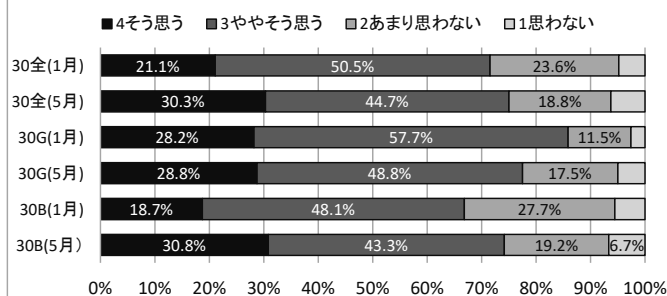
13 異なる価値観を持つ人とコミュニケーションをとることができる。



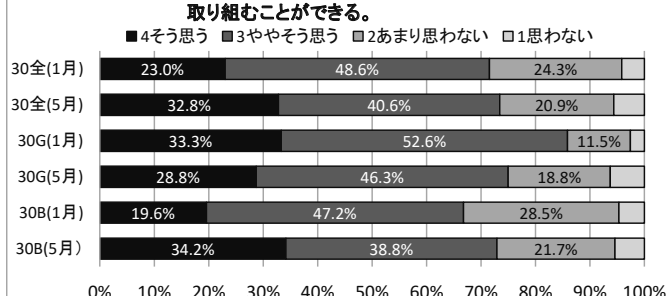
14 異なる価値観を持つ人と協働して課題に取り組むことができる。



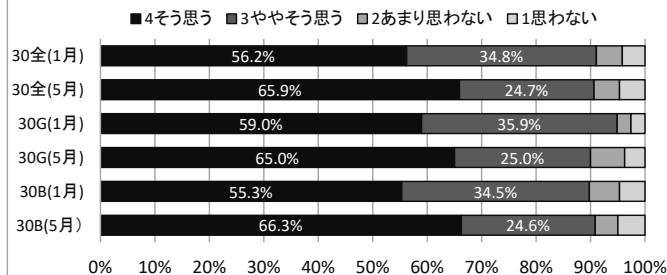
15 困難な課題に対して、積極的に挑戦することができる。



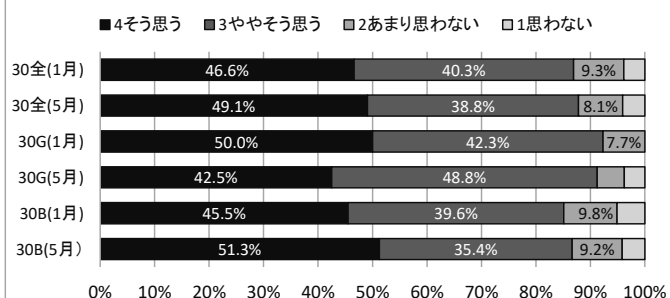
16 困難な課題に対して、あきらめずに粘り強く取り組むことができる。



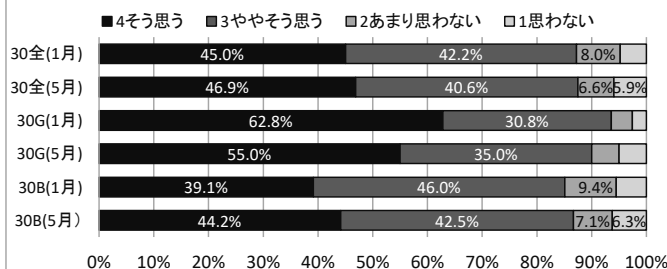
17 自分とは異なる価値観を持つ人が存在することを理解できる。



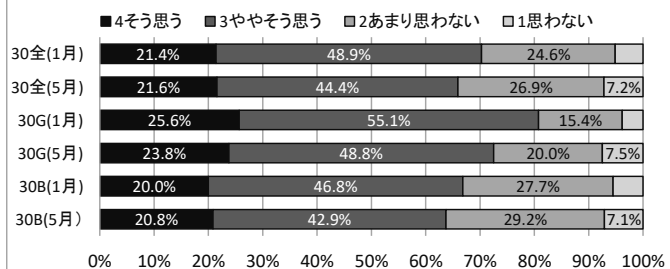
18 自分とは異なる価値観を受け入れることができる。



19 国際社会において、様々な分野に関する幅広い教養が必要だと思う。



20 読書や様々な体験を通して、幅広い教養を身につけようとしている。



平成30年度第3学年(8学級)教育課程

(各学科に共通する教科・科目等)

教科	科目	標準 単位数	普通科 理数人文コース			普通科 スポーツ 総合専攻	普通科 文科 スポートコース	合計	
			理数R	人文I	理数G	人文G		科目	教科
国語	国語総合	4						0・2	4～8
	国語表現	3					△2		
	現代文A	2							
	現代文B	4	2	3	2	3	3	2・3	
	古典A	2							
地理	古典B	4	2	3	2	3	3	2・3	
	世界史A	2	2					0・2	4・5・6・7
	世界史B	4		2	2		2	0・2	
	日本史A	2							
歴史	日本史B	4		2	2		3	0・2・3・4	
	地理A	2							
	地理B	4	3		5			0・3・5	
							○2		
	歴史探究			2	2			0・2	
公民	現代社会	2							
	倫理	2		2	2		△2	0・2	0・2・4
	政治・経済	2		2	2		2	0・2	
	数学I	3							0～6
数学	数学II	4							
	数学III	5	3		3			0・3	
	数学A	2					2	0・2	
	数学B	2					○2	0・2	
	数学探究I					3		0・3	
理科	数学探究II		3		3			0・3	
	数学探究III								
	科学入門	2					2	0・2	0～7
	物理基礎	2							
理	物理	4	◎4		◎4			0・4	
	化学基礎	2							
	化学	4	3		3			0・3	
	生物基礎	2	◎4		◎4		△●4	0・4	
	生物	4							
保健	地学基礎	2							
	地学	4							
	理科探究			3				0・3	
	体育	7～8	2	2	2	2	3	2・3	2・3
	健康	2							
芸術	音楽I	2							
	音楽II	2							
	美術I	2							
	美術II	2							
	書道	2							

高等学校名		分校	課程		学 科
高等			全 日 制		
鳥羽高等学校					普通科

教科	科目	標準 単位数	普通科 理数人文コース			普通科 スポーツ 総合専攻	普通科 文科 スポートコース	合計	
			理数R	人文I	理数G	人文G		科目	教科
外国語	英語I	3							6・8
	英語II	4							
	英語III	4	4	4	4	4	4	4	
	英語表現I	2							
	英語表現II	4	2	2			2	0・2	
家庭	英語総合I								
	英語総合II						●2	0・2	
	英語総合III				2	2		0・2	
	家庭基礎	2							
情報									
	社会と情報	2							
	総合的な学習の時間 (Gはイノベーション探究III)	3～6	1	1	1	1	1	1	1

(主として専門学科において開設される教科・科目)

教科	科目	標準 単位数	普通科 理数人文コース			普通科 スポーツ 総合専攻	普通科 文科 スポートコース	合計	
			理数R	人文I	理数G	人文I		科目	教科
体育	スポーツI							0・3	0・2・3・5
	スポーツII							0・3	
	スポーツIII							0・3	
	スポーツ概論						●2	0・2	
	フットボール					△2	△2	0・2	0・2
家庭									
共通									
共通教科・科目単位数合計									
専門教科・科目単位数合計									
教科全履修科目単位数合計									
選択履修科目単位数合計									
科目履修単位数合計									
総合的な学習の時間									
特別活動									
週当たりの授業時数									

平成30年度第2学年(8学級)教育課程

学 科 目	標準 単位数	グローバル科 G理	グローバル科 G文	普通科 理数人文 コース	普通科 スポーツ 総合専攻	普通科 文科 スポーツコース	合 計
教 科 目	単位数			理数	人文	科目	教科
国語	国語総合	4					0・4・5・6
	国語表現	3					
	現代文A	2					
	現代文B	4	2		2	2	0・2・3
	古典	2					
地理歴史	古典B	4	2		2	3	0・2・3
	世界史A	2					0・2・4・6
	世界史B	4		2		2	
	日本史A	2			3	4	0・2・3・4
公民	日本史B	4		2		2	
	地理A	2			3		0・2・3
	地理B	4					
	歴史探究				2		0・2
数学	現代社会	2					
	倫理	2					
	政治・経済	2					
	数学Ⅰ	3					4・6・7
	数学Ⅱ	4	3	3	3	4	3・4
理科	数学Ⅲ	5	2		2		0・2
	数学A	2					
	数学B	2	2	3	2	3	0・2・3
	数学探究Ⅰ						
	数学探究Ⅱ						
理 科	数学探究Ⅲ						
	科学・人間生活	2					2・4・9
	物理基礎	2	○2		○2		0・2
	物理	4			△2		0・2
保 体	化学基礎	2					
	化学	4					
	生物基礎	2	○2△2	2	3		0・3
	生物	4			○2□2	2	0・2
	地学基礎	2	□2	2	△2		0・2
健 体	地学	4			□2	2	0・2
	理科探究						
	体育	7～8	2	2	2		
	保健	2	1	1	1	3	2・3
芸術					1	1	3・4
	音楽Ⅰ	2					
	音楽Ⅱ	2					
	美術Ⅰ	2					
	美術Ⅱ	2					
	書道Ⅰ	2					
	書道Ⅱ	2					

高等学校名	分校	課程	学科
鳥羽高等学校	分 校	全 日 制	グローバル科 普通科

教 科	科 目	標 準 単位数	グロ―バル科 G 理	普通科 理数人文 コース	普通科 スポーツ 総合専攻	普通科 文 科 スポーツコース	合 計 科 目 教 科
外国語	ロシア語Ⅰ	3					0・5・6・7
	ロシア語Ⅱ	4		5	5	4	
	ロシア語Ⅲ	4					
	英語表現Ⅰ	2				2	
	英語表現Ⅱ	4		2			0・2
家 庭	家庭基礎	2			2	2	0・2
情 報	社会と情報	2					
	総合的な学習の時間(グローバル科は「グローバル探究Ⅱ」)	3～6	1	1	1	1	1

(主として専門学科において開設される教科・科目)

教科	科目	標準 単位数	2 年						合 計	
			グローバル科		普通科 理数人文 コース	普通科 スポーツ 総合専攻	普通科 文科 スポーツコース	科目	教科	
			G 理	G 文						
体 育	スポーツⅠ								0・3	0・3
	スポーツⅡ								0・3	
	スポーツⅢ								0・3	
英 語	総合英語									0・6
	英語理解		3	3					0・3	
	グローバルⅠ									
	グローバルⅡ		3	3					0・3	0・9・10
	現代文 G			3					0・3	
	古典 G			3					0・3	
	読者の目・書評の目上		2	2					0・2	
	総合数学									
	物理 G		△2						0・2	
	化学 G		3						0・3	
外国語	生物 G		△2						0・2	0・1
	音楽 G								0・1	
	美術 G		1	1					0・1	
	書道 G								0・1	
	家庭 G								0・1	
	中国語Ⅱ								0・1	
	韓国語Ⅱ								0・1	
	フランス語Ⅱ		1	1					0・1	
	スペイン語Ⅱ									
	海外文化研究Ⅱ									

共通教科・科目単位数合計	18	17	32	32	26	27
専門教科・科目単位数合計	15	16	0	0	3	3
教科	全員履修科目単位数計	25	31	26	26	27
	選択履修科目単位数計	8	2	6	0	3
科目	履修単位数計	33	33	32	29	30
総合的な学習の時間	1	1	1	1	1	1
特別活動	1	1	1	1	1	1
当たりの授業時間	35	35	34	34	31	32

平成30年度第1学年(8学級) 教育課程

(各学科に共通する教科・科目等)

教科	科目	標準 単位数	グローバル科	普通科 理数人文 コース	普通科 スポーツ 総合専攻	普通科 文コース	合計	
							科目	教科
国語	国語総合	4	5	5	5	5	5	5
	国語表現	3						
	現代文A	2						
	現代文B	4						
	古典	2						
地理 歴史	世界史A	2						
	世界史B	4						
	日本史A	2						
	日本史B	4						
	地理A	2						
公民	地理B	4						
	歴史探究							
数学	現代社会	2	2	2	2	2	2	2
	倫理	2						
	政治・経済	2						
	数学Ⅰ	3		4	3	3	0・3・4	1・5・7
	数学Ⅱ	4	1	1			0・1	
理科	数学Ⅲ	5						
	数学A	2		2	2	2	0・2	
	数学B	2						
	数学探究Ⅰ							
	数学探究Ⅱ							
理	数学探究Ⅲ							
保健 体育	科学・人間生活	2						0・2・4
	物理基礎	2						
	物理	4						
	化学基礎	2	2	2	2	2	0・2	
	化学	4						
芸術	生物基礎	2			2	2	0・2	
	生物	4						
	地学基礎	2						
	地学	4						
	理科探究							
音楽 美術 書道	体育	7～8	3	3	3	3	3	4
	保健	2	1	1	1	1	1	
	音楽Ⅰ	2					0・2	2
	音楽Ⅱ	2						
美術 書道	美術Ⅰ	2					0・2	
	美術Ⅱ	2						
	書道Ⅰ	2					0・2	
	書道Ⅱ	2						

高等学校名	分校	課程	学 科
高等 鳥 羽 学 校	分 校	全 日 制	グローバル科 普 通 科

教科	科目	標準 単位数	グローバル科	普通科 理数人文 コース	普通科 スポーツ 総合専攻	普通科 文コース	合計
外国語	英語総合Ⅰ	3		4	4	4	0・6
	英語総合Ⅱ	4					
	英語表現Ⅰ	2		2	2	2	0・2
	英語表現Ⅱ	4					
家庭 情報	家庭基礎	2	2	2			0・2
	社会と情報	2		2	2	2	0・2
総合的な学習の時間(グローバル科は イノベーション探究Ⅰ)		3～6	1	1	1	1	1

(主として専門学科において開設される教科・科目)

教科	科目	標準 単位数	1 年				合計	
			グローバル科	普通科 理数人文 コース	普通科 スポーツ 総合専攻	普通科 文コース	科目	教科
体 育	スポーツⅠ						0・3	0・3
	スポーツⅡ				3		0・3	
	スポーツⅢ						0・3	
英 語	総合英語		3				0・3	0・6
	英語理解						0・3	
	グローバルⅠ		3				0・3	
グローバル科	グローバルⅡ							
	現代文G							0・9
	古典G							
	読解・読書・読論							
	総合数学		6				0・6	
	物理G							
	化学G							
	生物G							
	音楽G							
	美術G							
外国語	書道G							
	家庭G							
	中国語Ⅰ							0・1
	韓国語Ⅰ						0・1	
	フランス語Ⅰ						0・1	
海外インターナショナル	海外インターナショナル		2				0・2	
			(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)

共通教科・科目単位数合計		18	32	26	30
専門教科・科目単位数合計		15	0	3	0
教科 全員履修科目単位数計		30	30	24	28
教科 選択履修科目単位数計		3	2	5	2
科目 履修単位数計		33	32	29	30
総合的な学習の時間		1	1	1	1
特別活動ホームルーム活動		1	1	1	1
週当たりの授業時数		35	34	31	32

平成 27 年度指定

スーパーグローバルハイスクール研究報告書＜第 4 年次＞

平成 31 年 3 月発行

京都府立鳥羽高等学校

〒601－8449

京都市南区西九条大国町 1

TEL 075－672－6788

FAX 075－691－7448

<http://www.kyoto-be.ne.jp/toba-hs/>

E-mail toba-hs@kyoto-be.ne.jp